

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 261 集

目名市 II 遺跡発掘調査報告書

ふるさと農道緊急整備事業関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

め ないち
目名市II遺跡発掘調査報告書

ふるさと農道緊急整備事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、平成6年3月現在8,711ヶ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に高速道路網の整備は産業経済開発の大動脈として多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的な課題であり、岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、ふるさと農道緊急整備事業に関連して、平成7年度に発掘調査を行った目名市II遺跡の調査結果をまとめたものであります。目名市II遺跡は、安代町の北西を東流する目名市沢の右岸に立地し、調査の結果、縄文時代の前期から晩期、弥生時代までの遺構と遺物が発見され、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました岩手県盛岡地方振興局岩手北部土地改良事業所・安代町教育委員会をはじめとする関係者各位に衷心より謝意を表します。

平成8年9月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 船越昭治

例 言

1. 本報告書は岩手県二戸郡安代町字目名市 66-1 ほかに所在する目名市II遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、ふるさと農道緊急整備事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会文化課と岩手県盛岡地方振興局岩手北部土地改良事業所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の調査成果は、先に現地公開資料（平成7年6月2日）と『岩手県埋蔵文化財調査略報（平成7年度分）』（岩埋文246集）に発表しているが、本書の内容が優先するものである。
4. 岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号と遺跡略号は次のとおりである。

遺跡番号 J E 54-1137
遺跡略号 MN II-95
5. 本遺跡は、当初「目名市遺跡（MN-95）」として調査を行った。しかしその後、本遺跡が従来「目名市遺跡」とされていたところと地点が異なることが判明し、従来の遺跡を「目名市I遺跡（J E 54-1211）」とし、今回調査した本遺跡を「目名市II遺跡（MN II-95）」と遺跡名を変更している。
6. 発掘調査面積は918 m²である。発掘調査期間は平成7年4月18日～6月15日、整理期間は平成8年1月4日～3月31日である。
7. 野外調査および室内整理は阿部勝則・沼田和宏が行った。
8. 本報告書の執筆は「I. 調査にいたる経過」を高橋與右衛門、その他を阿部勝則が執筆した。
9. 土層の観察にあたっては『新版標準土色帖』9版（1989 小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。
10. 遺物の鑑定に当たっては次の方々に依頼した。

石質鑑定 佐藤二郎（榊長内水源工業）
炭化材樹種鑑定 早坂松次郎（岩手県木炭協会）
火山灰の分析鑑定 三辻利一（奈良教育大学）
11. 基準点測量は、株式会社 吉田測量設計に委託した。
12. 空中写真撮影および写真測量は榊シン技術コンサルに委託した。
13. 発掘・整理・執筆にあたっては次の方々に御協力、御指導をいただいた（順不同・敬称略）。

高橋信雄 小田野哲憲 佐藤嘉広 佐々木務（岩手県教育委員会文化課）
佐々木勝 濱田宏（岩手県立博物館）
14. 本遺跡の調査で得られた一切の資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。
15. 本書で使用した地形図は以下のとおりである。
 - a. 建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「荒屋」
 - b. 建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「陸奥荒屋」
 - c. 安代町集成図（土地利用）5000分の1

目 次

序
例言

< 本 文 >

I. 調査に至る経過	2
II. 遺跡の位置と立地	2
1. 遺跡の位置および地理的環境	2
2. 遺跡の立地および周辺の地形	4
3. 基本土層	5
4. 周辺の遺跡	5
III. 調査・整理の方法	16
1. 野外調査	16
2. 室内整理	17
3. 掲載図版等について	17
IV. 遺構と遺物	19
1. 竪穴状遺構	19
2. 土坑	21
3. 陥し穴	38
4. 焼土遺構	39
V. 遺構外の出土遺物	42
1. 土器	42
2. 石器	52
VI. 分析・鑑定	55
VII. 考察とまとめ	56
報告書抄録	78

< 表 >

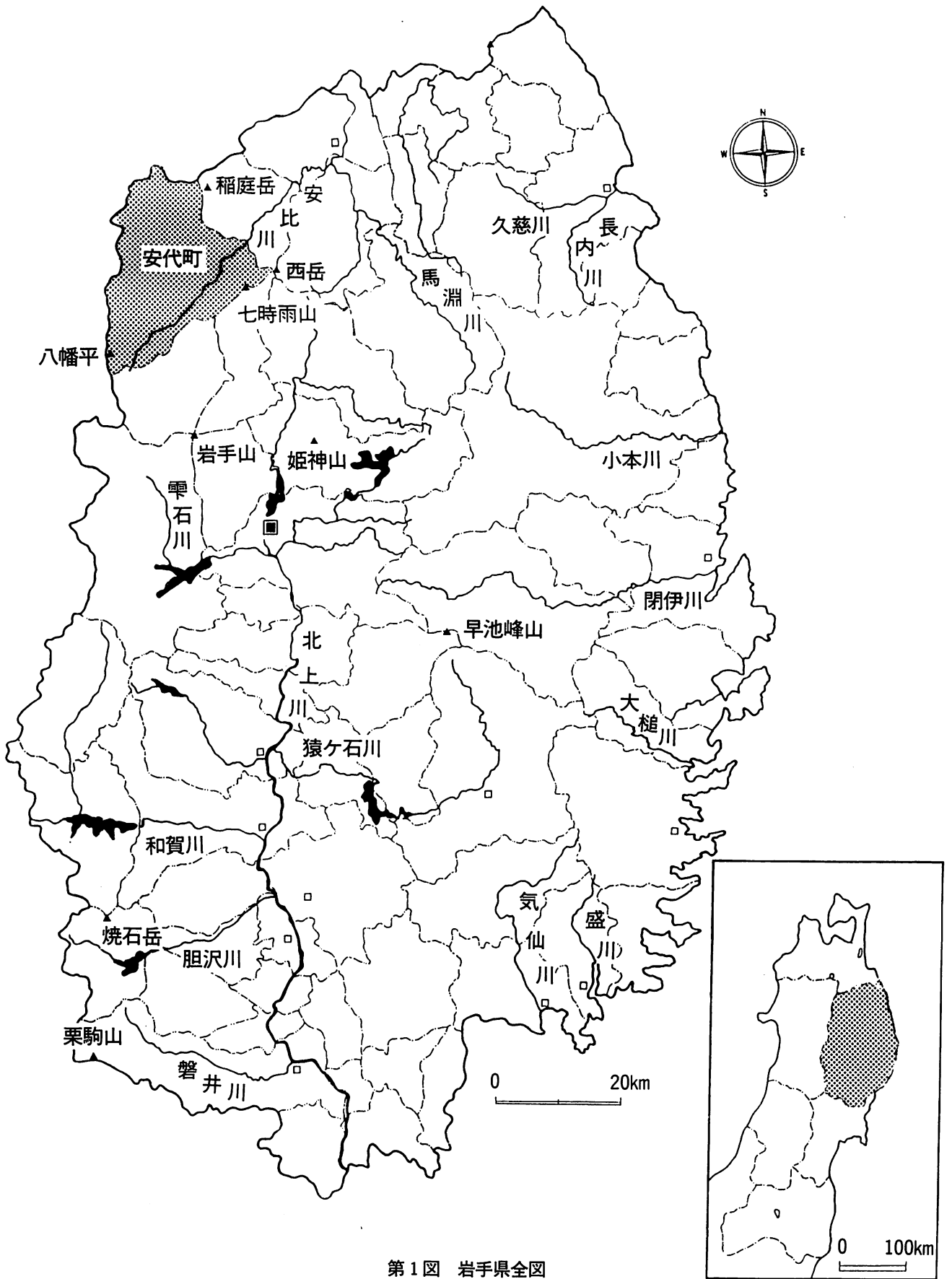
第1表 周辺の遺跡	14
第2表 土器観察表	50
第3表 石器観察表	52

< 図 版 >

第1図 岩手県全図 …………… 1	第15図 RD28・29・30・32 土坑 …………… 36
第2図 遺跡位置図 …………… 3	第16図 RD33・34・35・36 土坑 …………… 37
第3図 基本土層模式図 …………… 5	第17図 RD31 陥し穴 …………… 38
第4図 遺跡周辺の地形図 …………… 7	第18図 RF01・02 焼土遺構 …………… 39
第5図 地形分類図 …………… 9	第19図 遺構内出土遺物(1) …………… 40
第6図 周辺の遺跡分布図 …………… 11	第20図 遺構内出土遺物(2) …………… 41
第7図 目名市II遺跡遺構配置図 …………… 18	第21図 遺構外出土遺物：土器(1) …………… 44
第8図 RE01・02 竪穴状遺構 …………… 20	第22図 遺構外出土遺物：土器(2) …………… 45
第9図 RD01・02・03・04 土坑 …………… 30	第23図 遺構外出土遺物：土器(3) …………… 46
第10図 RD05・06・07・08・09 土坑 …………… 31	第24図 遺構外出土遺物：土器(4) …………… 47
第11図 RD10・11・12・13・14 土坑 …………… 32	第25図 遺構外出土遺物：土器(5) …………… 48
第12図 RD15・16・17・18 土坑 …………… 33	第26図 遺構外出土遺物：土器(6) …………… 49
第13図 RD19・20・21・22・23 土坑 …………… 34	第27図 遺構外出土遺物：石器(1) …………… 53
第14図 RD24・25・26・27 土坑 …………… 35	第28図 遺構外出土遺物：石器(2) …………… 54

< 写真 図 版 >

写真図版 1 遺跡全景・調査区東側土坑群 …… 59	写真図版11 遺構内出土遺物(1) …………… 69
写真図版 2 RE01・02 竪穴状遺構 …………… 60	写真図版12 遺構内出土遺物(2) …………… 70
写真図版 3 RD01・02・03・04・05 土坑 …… 61	写真図版13 遺構外出土遺物：土器(1) …………… 71
写真図版 4 RD06・07・08・09・10 土坑 …… 62	写真図版14 遺構外出土遺物：土器(2) …………… 72
写真図版 5 RD11・12・13・14・ 15・17土坑 …………… 63	写真図版15 遺構外出土遺物：土器(3) …………… 73
写真図版 6 RD16・18・19・20 土坑 …………… 64	写真図版16 遺構外出土遺物：土器(4) …………… 74
写真図版 7 RD21・22・23・24 土坑 …………… 65	写真図版17 遺構外出土遺物：土器(5) …………… 75
写真図版 8 RD25・26・27・28・29 土坑 …… 66	写真図版18 遺構外出土遺物：土器(6) …………… 76
写真図版 9 RD30・32・33・34・35 土坑 …… 67	写真図版19 遺構外出土遺物：石器 …………… 77
写真図版10 RD36 土坑・RD31 陥し穴・ RF01・02 焼土遺構・基本土層 …… 68	



第1図 岩手県全図

I. 調査に至る経過

「ふるさと農道緊急整備事業」に係わる事業は、地域として農産物流通上または農村生活環境上などから緊急に整備を必要とする農道の整備をする事業であるが、「同事業 目名市地区」については安代町曲田・横間地区における農産物を、早急かつ安全に目名市地区にある野菜出荷施設へ運搬することを目的とした総延長2,400 mに及ぶ農道の整備事業であり、平成5年度から事業に着手し、平成8年度に完了する予定である。

事業実施区域に対する埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県盛岡地方振興局岩手北部土地改良事業所（以下事業所）と岩手県教育委員会事務局（以下県教委）との間で協議がなされたが、その経過は以下のとおりである。

事業所では、事業実施区域内に埋蔵文化財が存在するかを確認するために、平成5年8月4日付盛地（岩土地）第205号によって県教委に分布調査の依頼をした。

依頼を受けた県教委は、事業実施区域に対して詳細な分布調査を行い、その結果は平成5年9月6日付「教文第453号 埋蔵文化財分布調査について（回答）」で、当該遺跡の存在が確認されたこと、事業実施にあたり、事業実施区域が遺跡にかかっている場合には、文化財保護法第57条の3に基づく県教委宛での通知が必要である旨を付記して回答された。

回答を受けた事業所では、平成6年度に事業実施区域内についての試掘調査を県教委に依頼した。依頼を受けた県教委では平成6年11月14日に試掘調査を実施し、その結果は平成6年12月6日付「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」によって、本調査が必要である旨を付記して事業所に回答した。

回答を受けた事業所では、本調査を平成7年度に実施したい旨を付記して県教委に連絡したが、連絡を受けた県教委では（財）岩手県文化振興事業団の平成7年度の受託事業として発掘調査を実施することとし、その旨を事業所と（財）岩手県文化振興事業団の両者に通知した。通知を受けた両者は平成7年3月に発掘調査に係わる事前協議を持ち、平成7年4月から調査を開始することとした。

実際の発掘調査にあたっては、平成7年4月3日付で岩手県盛岡地方振興局長と（財）岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、平成7年4月18日から調査に着手した。調査期間は当初4月10日開始で計画したが、積雪であること等から4月18日の開始となり、その後、遺構・遺物が多く発見されたことや調査開始が前記の理由で遅延したことなどから、当初の5月31日終了予定を6月15日まで延長して調査を終了し、現場を撤収した。

II. 遺跡の位置と立地

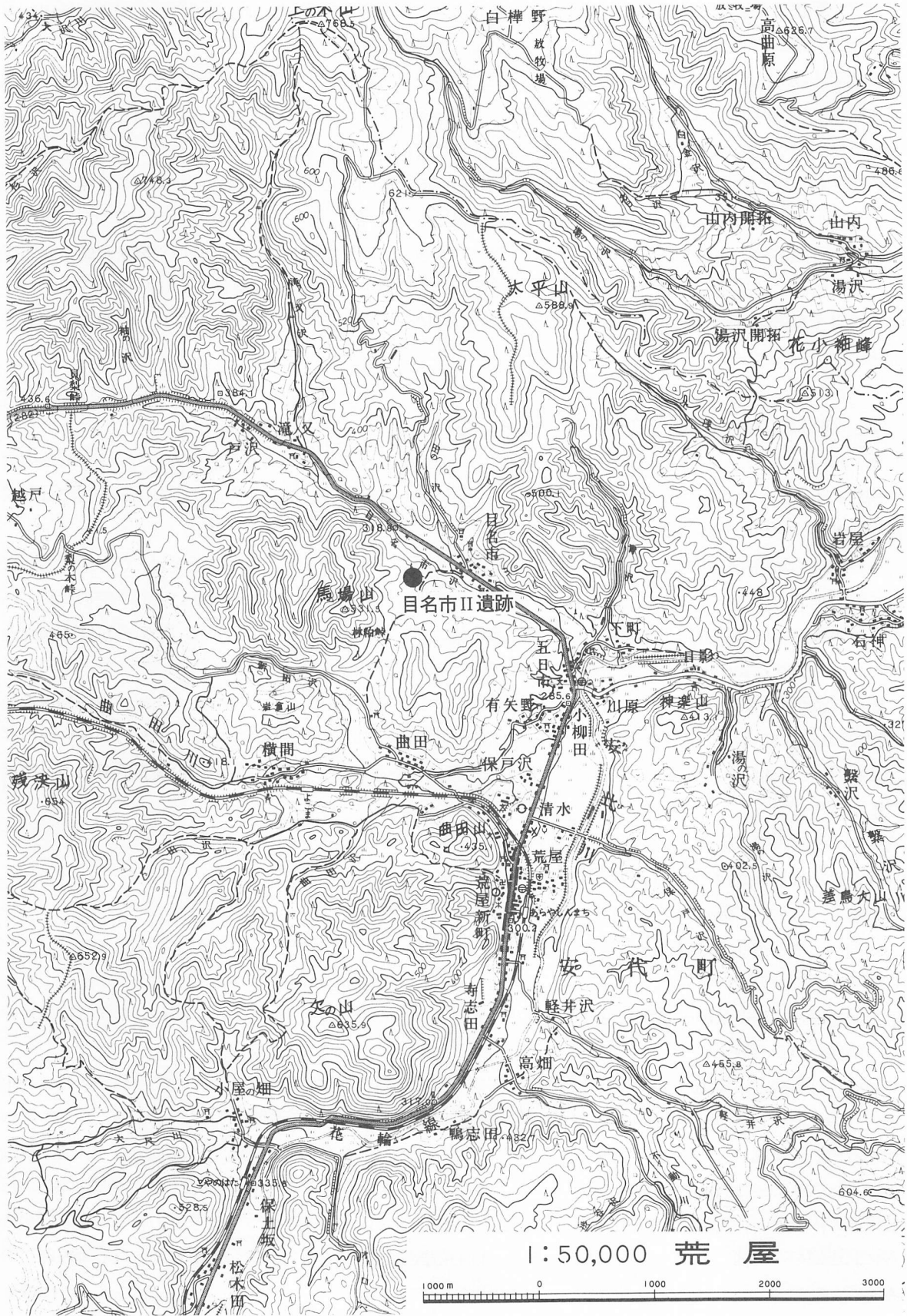
1. 遺跡の位置および地理的環境（第1・2図）

目名市II遺跡の所在する安代町は、岩手県の西北端に位置し、北は青森県田子町、東は浄法寺町、南は西根町、松尾村、西は秋田県角鹿市に接する。

面積456.94 km²、人口7,982人である。町域の南西端に安比岳があり、十和田八幡平国立公園に属している。安比岳から東に連なる屋ノ棟岳・前森山の北には雄大な景観美で知られる安比高原が広がる。安比岳を源流とする安比川は馬淵川最大の支流で、延長52 kmの一級河川である。安比川源流付近には安比温泉があり、岩手県北部における一大観光地となっている。

年平均気温は9.0度、年間降水量は1330.3 mmで、冬期間の積雪が多く、寒さの厳しい裏日本型気候の特徴を示している。

現在の安代町は、国道282号線と東日本旅客鉄道花輪線が南から西へ弧状に通じ、これにほぼ並行して東



第2図 遺跡位置図

北縦貫自動車道が通る。縦貫道は、安代ジャンクションで八戸線と青森線に分かれており、岩手・秋田・青森を結ぶ交通の要所となっている。

安代町の成立について簡単に触れると、明治22年(1889)町村施行により荒沢村が成立し、田山村はそのまま存続し、昭和31年に2村が合併して安代町になる。安代の名称は、町内を流れる安比川と能代川の二川から1字ずつとって命名されたものである。現在、安代町に大字はなく、個々の土地については126の字名で表示されている。目名市の地名は、天和2年(1682)の「惣御代官所中高付村」に村名として見え、また元文4年(1739)の「福岡通絵図」に「目名一」の名が見える。現在、字名としては目名市・田の沢がある。

目名市II遺跡は、二戸郡安代町字目名市66-1ほかに所在し、東日本旅客鉄道花輪線の荒屋新町駅の北北西約3km付近に位置する。同地点は、国土地理院発行の5万分の1地形図「荒屋」(NK-54-18-16)および2万5千分の1地形図「陸奥荒屋」(NK-54-18-16-3)の図幅に含まれる。北緯40度7分17秒、東経141度2分35秒付近に位置する。

2. 遺跡の立地および周辺の地形(第4・5図)

安代町内は、ほとんど山地丘陵で占められており、町面積の91%以上が森林で占められている。町の中央を南北に走る分水嶺を境に東部は安比川が南から北東に流れ、貝梨峠・梨の木峠より西の田山地区では米代川が西流し、鹿角市を経て日本海側へ流れている。

遺跡周辺の地形を分類すると山地・丘陵地・台地・低地に分けられるが、大半が山地および山地の裾野である丘陵地で占められている。谷底平野は、安比川と米代川流域沿いに僅かにみられ、谷底平野の背後に小規模な段丘・山麓地緩斜面が発達しているが、総面積に占める割合は少ない。第5図 地形分類図の図幅内においても低地は安比川沿いに僅かにみられるだけである。

安比川流域の段丘地形は、赤坂田・扇畑付近の右岸、曲田・目名市沢との合流付近の左岸、中佐井付近の右岸に形成されており、沖積地は荒屋新町・中佐井付近で比較的広く形成されている。これらの地形面の標高は約280m~400mで、主要な遺跡の多くはこの地形面に分布している。安比川流域の段丘区分については以下のようなになる。

- A面 谷底平野の後背地に発達する地形面で洪積段丘である。
- A'面 山地とA面との間の傾斜変換点付近の地形面である。
- B面 A面とC面との間に部分的に発達する沖積段丘である。
- C面 現沖積面である。
- C'面 C面の背後に発達する地形面である。

上記の段丘区分と遺跡の立地の関係を見ると、A面に多くの遺跡が立地し、B・C面に立地する遺跡は少ない傾向がある(註1)。

目名市II遺跡は、馬場山(標高531.5m)などからなる馬場山山地(小起伏山地)の山裾部にあたり、上記区分のA'面(山麓地緩斜面)に載る。遺跡の東側は目名市沢が東流し、南側は目名市沢に注ぐ小さな沢が東流する。遺跡は、目名市沢と目名市沢に注ぐ小さな沢に挟まれた台地の先端に立地している。遺跡付近の標高は319m~328mで、西から東へ傾斜しており、調査区の西端と東端では約9mの比高差がある。目名市沢の川床面との比高差は約10mである。遺跡の現況の土地利用は畑地である。遺跡の範囲は調査区のさらに北西側の平坦面に広がっているようである。目名市沢を挟んで対岸には目名市I遺跡・目名市館跡がある。

3. 基本土層 (第3図)

調査区が東西に長いことから、東端・中央・西端で土層の確認をおこなった。各地点で各層の層位に差はあっても基盤は灰白色土層(八戸浮石流凝灰岩)であることは共通している。

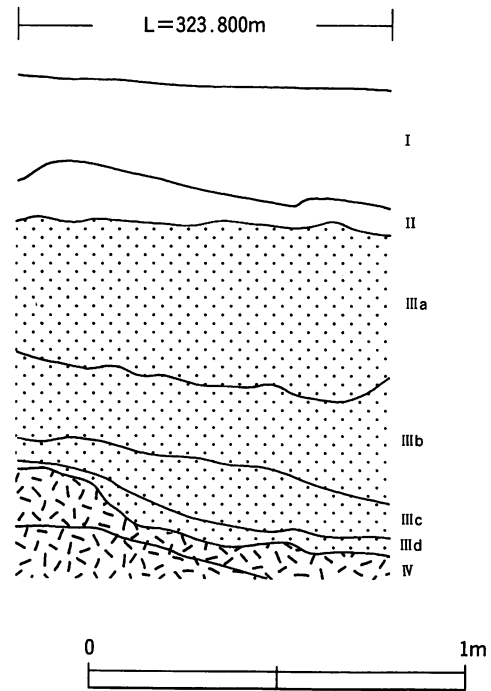
遺跡の現況は畑地であるが、調査区は畑造成の際に削平や攪乱を受けている。調査区のほとんどがIII層、H4・H5区付近に至ってはIV層まで削平を受け、I4区以東では耕作による攪乱が甚だしい。また調査区を水道管理設溝が東西に横断している。このような状況のなかで検出された遺構の多くは、上部を削られている。遺構検出面は、時期差にかかわらずIII層である。以下に各層の概略を述べる。

I層 10 YR2/2 黒褐色 層厚 10~100 cm。現表土で耕作土である。

II層 10 YR2/3 黒褐色 層厚 0~10 cm 以上。部分的にみられ、若干の遺物を包含する。

III層 10 YR4/6 褐色 層厚 0~80 cm 以上。遺構検出面である。

IV層 10 YR5/4 灰白色 層厚 50 cm 以上。白~灰色がかって見える。灰黄色ないしにぶい黄橙色浮石を含む。基盤となる層で八戸浮石流凝灰岩(シラス)に相当する。今回、検出された遺構の多くがIV層を掘り込んで底面を形成している。



第3図 基本土層模式図

4. 周辺の遺跡 (第6図)

現在、安代町内では137遺跡が確認されている(註2)。図幅内に載る遺跡は90遺跡である。安代町で過去に調査が行われた遺跡には、昭和49年の有矢野遺跡の一部試掘、昭和50年に安代中学校体育館改修に伴い調査が行われた保土沢遺跡、1978~84年に東北縦貫自動車道建設に伴い17遺跡の発掘調査が行われている(註3)。以下、時期ごとに遺跡の内容・立地等について、これまで調査が行われた遺跡を中心に概観する。

〈縄文時代の遺跡〉

縄文時代の遺跡は79遺跡ある。

早期の遺跡には、有矢野遺跡がある。

前期の遺跡は、有矢野遺跡、小屋の畑遺跡、横間台遺跡、曲田I(上の山XI)遺跡などがある。曲田I遺跡は、縄文・弥生・中世・近世の複合遺跡であるが、前期の遺物として、大木1式土器が土坑から得られている。

中期の遺跡は、有矢野遺跡、荒屋I・II遺跡、越戸II遺跡、上の山VII遺跡などがある。時期は、大木9・10式が多く、中期末葉に属する住居跡が多く検出されている。

後期の遺跡は、赤坂田I・II遺跡、上の山VII・X・XI遺跡、扇畑II遺跡、水神遺跡がある。

晩期の遺跡は、上の山I・II・III遺跡、曲田I遺跡などがあり、曲田I遺跡のように住居跡が58棟検出さ

れた大集落もある。水神遺跡では陥し穴状遺構が45基みつまっている。

縄文時代の遺跡は、時期的には後・晩期に属する遺跡が多いようである。

〈弥生時代の遺跡〉

過去に調査された17遺跡のうち、7遺跡で弥生土器が出土している。荒屋II遺跡、有矢野遺跡、赤坂田I遺跡、上の山I・II遺跡、水神遺跡、曲田I遺跡などがある。また上の山II遺跡では天王山くづれの土器片が採集されているようである。水神遺跡では竪穴住居跡1棟、曲田I遺跡では墓墳が検出されている(註4)。

〈古代の遺跡〉

奈良時代の遺跡には戸沢I遺跡があり、栗罎式に比定される土師器片が表面採集されているようである。安比川流域には奈良時代のものほとんどなく、平安時代の遺跡が多いのが特徴である。平安時代の遺跡は10遺跡を数え、なかでも上の山VII遺跡では住居跡が38棟検出された大規模な集落跡である。また、過去に調査された17遺跡のうち、7遺跡から鉄滓が出土しており、関沢口遺跡では鍛冶工房が検出されている。

安代町内の平安期の代表的な集落には上の山VII遺跡があり、住居跡の構築方法(煙道が短く、急角で立ち上がるカマドなど)や遺物が秋田県鹿角地方に類似しているなどの特徴がある。この時期の遺跡は、安比川流域の全域にあり、河川に沿う街道沿いの集落としての意味が強いと思われ、秋田県鹿角地方との関係や流通の問題を考えるうえで好資料である。保土沢遺跡の調査では平安時代の住居跡5棟が調査されている。

以上の遺跡の立地をみると、安比川及びその支流によって形成された段丘(上位・中位・下位)の上位・中位段丘とその縁辺部に立地している。安比川流域には低地は開けていないが、西側から曲田川や目名市沢が流れ込む五日市付近が比較的広く開けており、数多くの遺跡が立地している。縄文時代の遺跡は、新しい時期の遺跡ほど低い面に立地する傾向がみられ、また、現在の集落よりもやや高い位置にある段丘のうえに立地している。

〈中世の遺跡〉

中世の遺跡として館跡がある。現在、安代町内では15の館跡が確認されている。田山館は、上館・中館・下館の三郭と空堀からなる町内最大規模の館跡で、米代川の右岸の丘陵上に立地する。館市にある佐比内館は、二重の空堀をもつ単郭式の館跡で、米代川とその支流の兄川の合流点に臨む丘陵上に立地する。五日市館や上の山館は安比川沿いの断崖を利用してつくられた館跡で、浄法寺からの交通の要所に位置している。

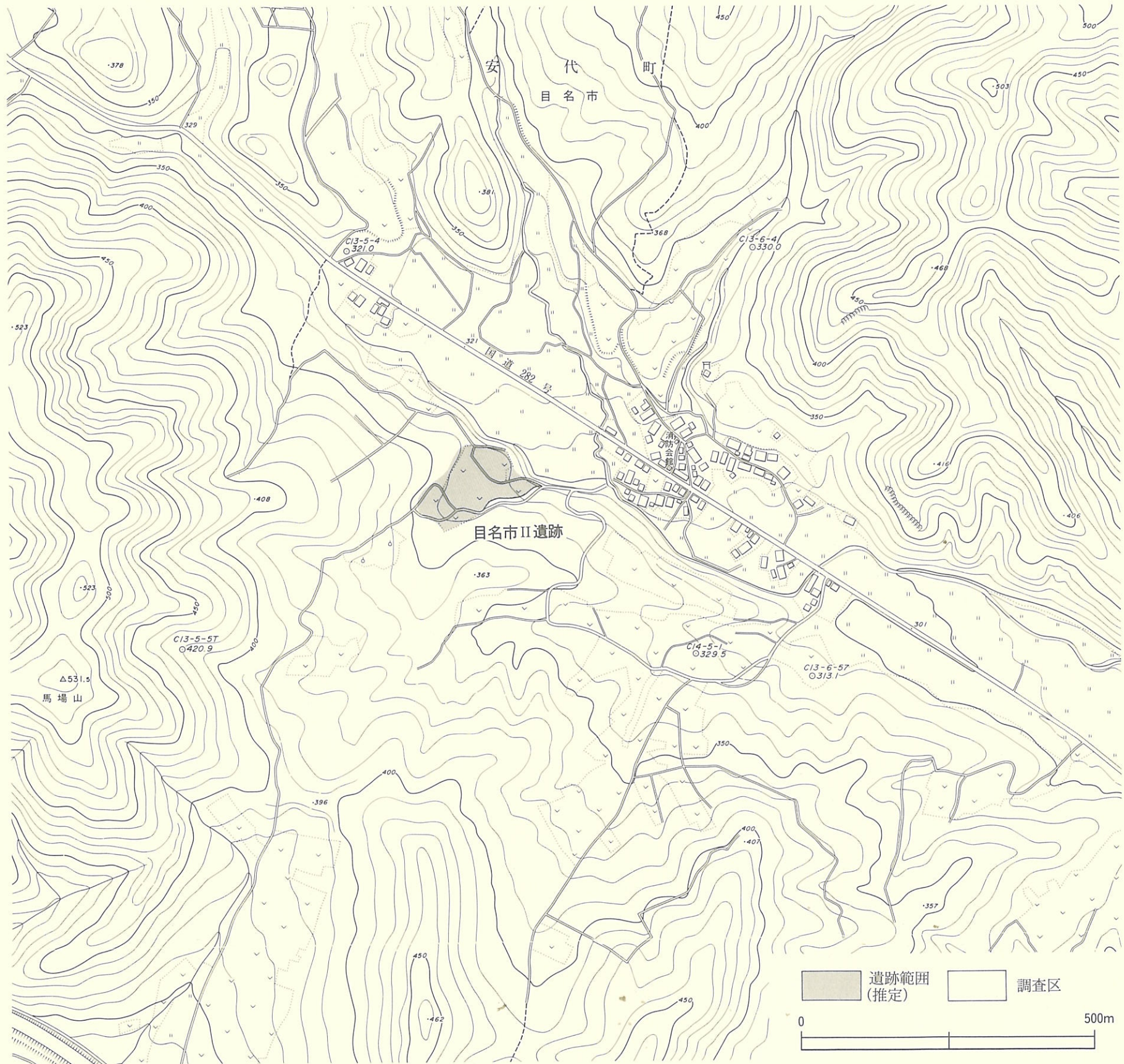
上の山館遺跡では、箱堀、薬研堀、腰曲輪・犬走りなどが調査でみつまっている。目名市沢の左岸には目名市館があるが詳細は不明である。

これらの館跡の立地をみると、下位に低地を望む山地・丘陵の先端部につくられ、下位の段丘とは30m~40mの比高差をもつ館跡が多い。

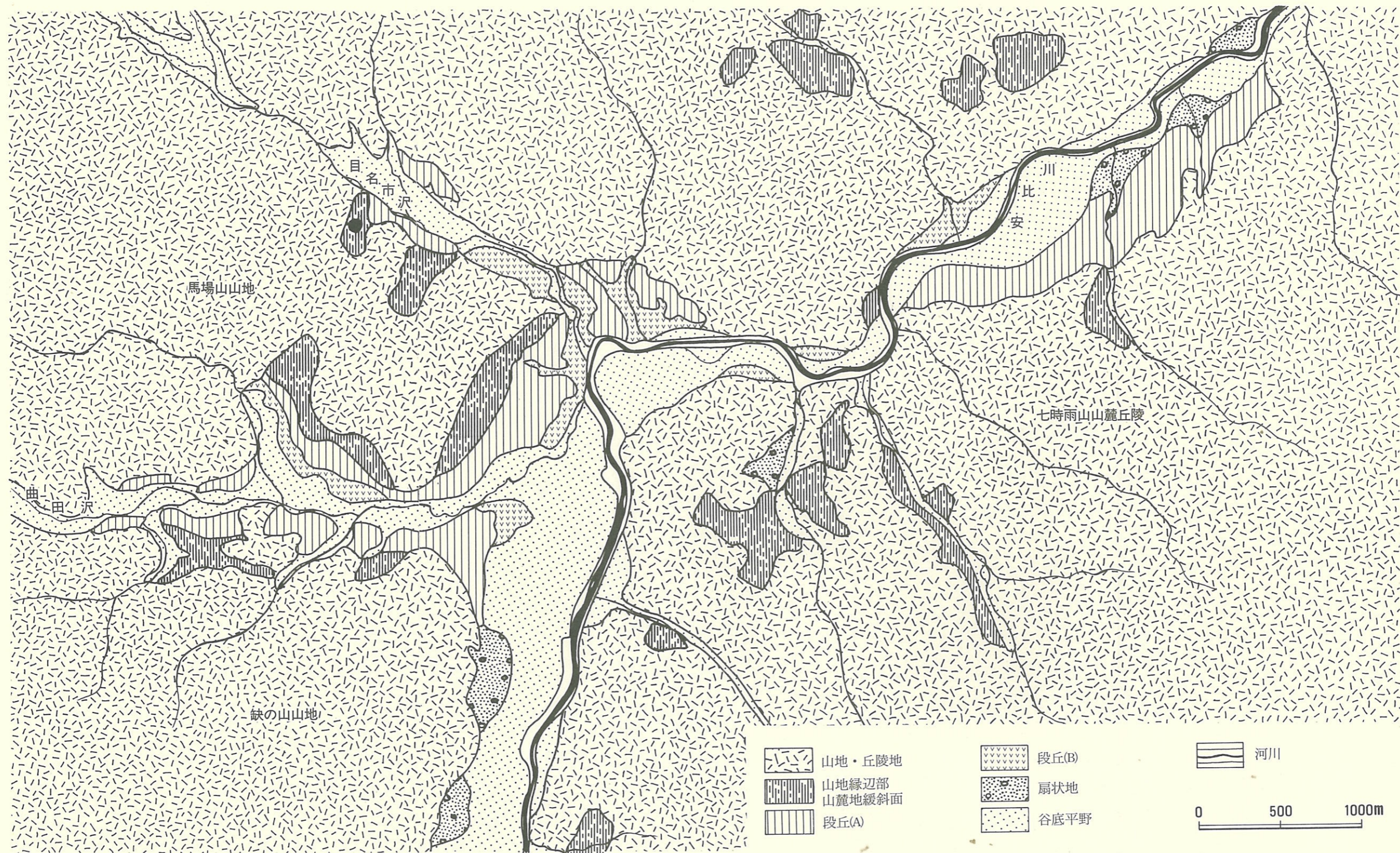
〈近世の遺跡〉

近世の遺跡としては一里塚が挙げられる。安代町は古くから交通の要所として知られる。東北北部において、奥羽山脈を抜ける主なルートは三つある。北上和賀一横手(現107号線)、盛岡・雫石一田沢湖(現46号線)と、安代一鹿角(現282号線)である。前2者が北上川中流域と秋田県内陸地方を結ぶ道路であるのに対して、後者は、秋田へ通じる道であるとともに津軽へ通じる道でもあり、北上川中流域から鹿角・津軽へと抜ける交通の要所で、平安時代には、陸奥国から出羽国に抜ける「流霞道」と呼ばれた。近世には、盛岡と秋田を結ぶ道路として「鹿角街道」と呼ばれ、街道沿いには一里塚が築かれた。安代町内では、七時雨一里塚・荒屋一里塚・曲田一里塚・苗代一里塚が残っており、町の文化財に指定されている。

墓墳の発見例も多い。関沢口遺跡では近世墓墳が9基みつまっているが、そのなかで頭骨に鉄鍋を被せていた墓墳が1基ある。鉄鍋は吊り耳である。水神遺跡では、土葬墓10基、火葬墓4基の計14基の墓墳がみ



第4図 遺跡周辺の地形図



第5図 地形分類図



第6図 周辺の遺跡分布図

1:50,000 荒屋

つかっている。このうち火葬墓4基は15～16世紀、土葬墓6基（4基から人骨、1基から馬・狐の骨が出土している）は中世に遡るものである。上の山館遺跡では人骨が2体出土しているが、うち1体は中世の竪穴遺構の床面から出土しており、時期は中世以前の可能性をもっている。

註1 安代地区の段丘区分については、上の山VII遺跡（岩埋文第60集）のIII. 遺跡の立地と環境（種市進）に詳しい。

註2 『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧』；1995 岩手県教育委員会。安代町内の遺跡については、遺跡数・名称・位置など各文献によって記載の違いが多くみられる。例えば日影遺跡（表1、63、64、65）など。正確を期していくことは分布調査とともに今後の課題と思われる。

註3 東北縦貫道関連で他に調査された遺跡として、寄木遺跡・上の山X I遺跡がある。寄木遺跡は検出遺構・遺物は無く、上山X I遺跡は曲田 I遺跡と同一地形面上であることから、曲田 I遺跡と一括して報告されている。

註4 小田野哲憲「岩手県における弥生時代の住居址」『紀要』VIII. 1989. 岩埋文。同論では、扇畑II遺跡で検出されているI II-d2住居跡、I II-f3住居跡の出土遺物を検討し、時期が弥生時代(A期)であることを指適している。

参考文献

- 『北上山系開発地域 土地分類基本調査「荒屋」』1974, 岩手県企画開発室。
『岩手県の地名』 日本歴史地名大系, 第3巻; 1990, 平凡社。
『安代の自然と文化』; 1987, 岩手県立博物館。
『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧』; 1995, 岩手県教育委員会。
『扇畑 I 遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第17集; 1981。
『荒谷 I・II・越戸II遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第21集; 1981。
『有矢野・上の山X遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第38集; 1982。
『扇畑II遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第39集; 1982。
『上の山館遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第40集; 1983。
『赤坂田 I・II遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第58集; 1983。
『上の山VII遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第60集; 1983。
『湯の沢III・繫沢II・石神II遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第79集; 1984。
『曲田 I・繫沢II遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第87集; 1985。
『関沢口遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第95集; 1985。
『水神遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第96集; 1985。
高橋信雄他『保土沢遺跡発掘調査報告書』; 1976, 岩手県二戸郡安代町教育委員会。
『岩手の城館跡』 岩手県文化財調査報告書第82集; 1986, 岩手県教育委員会編。

表1 周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代	所在地	備考
1	越戸Ⅰ	散布地	縄文(後期?)	安代町字越戸	
2	越戸Ⅱ	集落跡	縄文(中期)	安代町字越戸	岩埋文 21 集
3	越戸Ⅲ	散布地	縄文	安代町字越戸	
4	戸沢Ⅰ	散布地	縄文(晩期)	安代町字戸沢	
5	戸沢Ⅱ	散布地	縄文(中・晩期)	安代町字戸沢	
6	戸沢Ⅲ	散布地	縄文	安代町字戸沢	
7	戸沢Ⅳ	散布地	縄文	安代町字戸沢	
8	目名市Ⅰ	散布地	縄文	安代町字目名市	
9	目名市Ⅱ	集落跡	縄文・弥生	安代町字目名市	
10	目名市館	城館跡	中世	安代町字目名市	
11	上の山Ⅰ	散布地	弥生	安代町字上の山	
12	上の山Ⅱ	散布地	縄文・弥生	安代町字上の山	
13	上の山Ⅲ	集落跡	縄文(後・晩期)	安代町字上の山	
14	上の山Ⅳ	散布地	縄文(中期)	安代町字上の山	
15	上の山Ⅴ	集落跡	縄文・平安	安代町字上の山	
16	上の山Ⅵ	散布地	縄文	安代町字上の山	
17	上の山Ⅶ	集落跡	縄文(後期)・古代	安代町字上の山	岩埋文 60 集
18	上の山Ⅷ	集落跡	縄文(中・後期)・古代	安代町字上の山	
19	上の山Ⅸ	散布地	縄文(前・晩期)・弥生	安代町字上の山	
20	上の山Ⅹ	散布地	縄文・古代	安代町字上の山	岩埋文 38 集
21	曲田Ⅰ	集落跡	縄文	安代町字曲田	岩埋文 87 集
22	曲田Ⅱ	散布地	縄文	安代町字上の山	
23	曲田Ⅲ	散布地	縄文	安代町字曲田	
24	曲田Ⅳ	散布地	縄文	安代町字曲田	
25	曲田Ⅴ	散布地	縄文	安代町字曲田	
26	曲田Ⅵ	散布地	縄文	安代町字曲田	
27	曲田Ⅶ	集落跡	縄文	安代町字曲田	
28	曲田Ⅷ	散布地	縄文	安代町字曲田	
29	曲田Ⅸ	散布地	縄文(中期)	安代町字曲田	
30	曲田Ⅹ	散布地	縄文(後・晩期)	安代町字曲田	
31	曲田一里塚	一里塚	近世	安代町字曲田	町指定史跡
32	曲田経塚Ⅰ	経塚	近世	安代町字上の山	
33	曲田経塚Ⅱ	経塚	近世	安代町字上の山	
34	ヤカマシダ	散布地	縄文(晩期)	安代町字曲田	
35	横間台	散布地	縄文(前・中期)	安代町字打田内(横間)	
36	横間Ⅰ	散布地	縄文	安代町字打田内	
37	横間Ⅱ	散布地	縄文	安代町字打田内	
38	上の山Ⅸ	散布地	縄文(中・後期)・近世	安代町字上の山	
39	五日市館	城館跡	中世	安代町字五日市	
40	有矢野館	城館跡・散布地	縄文(後期)	安代町字上の山(有矢野)	
41	有矢野	集落跡・キャンプ	縄文(早～後)・古代	安代町字五日市	岩埋文 38 集
42	保土坂	集落跡	縄文	安代町字保土坂	
43	荒屋一里塚	一里塚	近世	安代町字荒屋新町	町指定史跡
44	上の山館	城館跡・集落跡	縄文(中期)・古代	安代町字上の山	岩埋文 40 集
45	保土沢	散布地	古代	安代町字保土坂	
46	荒屋館	散布地	縄文	安代町字荒屋新町	
47	瀬戸谷地窯	窯跡	近世	安代町字荒屋新町	

No.	遺跡名	種別	時代	所在地	備考
48	荒屋 I	散布地	縄文(前・中期)	安代町字高畑	岩埋文 21 集
49	荒屋 II	散布地	縄文(前・中期)	安代町字高畑	岩埋文 21 集
50	小屋畑	散布地	縄文	安代町字小屋畑	
51	扇畑 I	キャンプ・集落跡	縄文(後期)	安代町字扇畑	岩埋文 17 集
52	扇畑 II	散布地	縄文	安代町字扇畑	岩埋文 39 集
53	寄木	キャンプ	縄文	安代町字寄木	岩埋文 19 集
54	赤坂田 I	集落跡	縄文(後期)	安代町字赤坂田	岩埋文 58 集
55	赤坂田 II	集落跡	縄文	安代町字赤坂田	岩埋文 58 集
56	七時雨一里塚	一里塚	近世	安代町字高畑地内	町指定史跡
57	湯の沢 I	集落跡	縄文(中・後期)	安代町字湯の沢	
58	湯の沢 II	集落跡	縄文(中・後期)	安代町字湯の沢	
59	湯の沢 III	集落跡	縄文(中～晩期)	安代町字湯の沢	岩埋文 79 集
60	湯の沢 IV	散布地	縄文	安代町字湯の沢	
61	繫沢 I	散布地	縄文(中期)	安代町字繫沢	
62	繫沢 II	散布地	縄文	安代町字繫沢	岩埋文 79 集
63	日影 I	散布地	縄文	安代町字日影	JE55-2067
64	日影	散布地	縄文	安代町字日影	JE55-2048
65	日影 I	散布地	縄文	安代町字日影	JE55-2121
66	岩屋	散布地	縄文	安代町字岩屋	
67	山口	散布地	縄文	安代町字山口	
68	八幡館跡	城館跡・集落跡	縄文(前・中期)	安代町字石神	
69	石神 I	集落跡	縄文(前期)	安代町字石神	
70	石神 II	散布地	縄文	安代町字石神	岩埋文 79 集
71	石神 III	散布地	縄文(前期)	安代町字石神	
72	石神 IV	散布地	縄文(後・晩期)	安代町字石神	
73	石神 V	散布地	縄文	安代町字石神	
74	関沢口	集落跡	縄文(中・後期)	安代町字関沢口	岩埋文 95 集
75	古屋敷	散布地	古代	安代町字古屋敷	
76	山ノ神	集落跡	縄文(後・晩期)	安代町字中佐井	
77	北ノ城	城館跡	縄文	安代町字中佐井	
78	中佐井 I	集落跡	縄文	安代町字中佐井	
79	中佐井 II	集落跡	縄文	安代町字中佐井	
80	中佐井 III	集落跡	縄文	安代町字中佐井	
81	中佐井 IV	集落跡	縄文(中～晩期)	安代町字中佐井	
82	中佐井 V	散布地	縄文	安代町字中佐井	
83	山岸 I	散布地	縄文(後・晩期)	安代町字山岸	
84	山岸 II	散布地	縄文(晩期)	安代町字山岸	
85	土沢 I	散布地	縄文(後・晩期)	安代町字土沢	
86	土沢 II	散布地	縄文(後・晩期)	安代町字土沢	
87	土沢 III	散布地	縄文(後・晩期)	安代町字土沢	
88	水神	集落跡	縄文(後期)	安代町字土沢・水神	岩埋文 96 集
89	下ノ田館	城館跡・集落跡	縄文(後・晩期)	安代町字中佐井・下ノ田	
90	下の田	散布地	縄文(後期)	安代町字下の田	

周辺の遺跡分布図 凡例 ●目名市 II 遺跡

- 縄文
- ◇ 弥生
- △ 古代
- 中・近世

III. 調査・整理の方法

1. 野外調査

(1) 調査区の設定と遺構の命名

調査区の地区割りにあたっては、平面直角座標（第X系）を用いて、調査区の座標設定とグリッドの設定を行うことにした。設定した座標の基準点は以下のとおりである。

基準点1：X = +13,500.000 m、Y = +17,870.000 m、H = 326.125 m

基準点2：X = +13,510.000 m、Y = +17,900.000 m、H = 323.260 m

基準点3：X = +13,510.000 m、Y = +17,930.000 m、H = 321.305 m

この3点を基準として実際のグリッド設定を行った。また遺跡をカバーするグリッドは、原点を中心にして10 m 間隔で西から東へむかって、A・B・C……、北から南にむかって1・2・3……という区画名を与え、A1・A2区などの大グリッド名を付した。また各グリッドはさらに2 m 間隔で5等分し、それぞれ西から東にむかってA～E、北から南にむかって01～05 という区画名を与え、それぞれの組み合わせで、A01・A02グリッドなどの小グリッド名を付した。グリッドの北西隅の杭をもって、その区画のグリッドの名称を表わした。遺構の位置については、大小のグリッド名を組み合わせでA1A01グリッドなどと表わした。検出された遺構の名称は検出順に以下の記号を用いて命名を行った。

竪穴住居跡：RA01～、竪穴状遺構：RE01～、土坑類：RD01～、焼土遺構：RF01～、
遺跡の発掘調査面積は918 m²である。

6月2日（金）には、現地公開を行い、遺構と遺物の公開・展示をおこなっている。

(2) 粗掘と遺構検出・遺構の精査と遺物の取り上げ

当初、2 m 幅のトレンチを任意に地形に応じて入れ、遺跡の状況把握につとめた。その結果、全域にわたり削平されており、表土の厚さは、厚いところで1 m 前後、薄い所では10 cm 前後で、遺物もほとんど出土しなかったことから、盛り土の厚いところは重機を用い、薄いところは人力で表土を除去し、遺構検出を行った。

検出された遺構は、原則として住居跡の場合は4分法、土坑類は2分法を行ったが、必要に応じてその他の方法も併用した。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行った。

遺構内出土の遺物は、埋土では分層して取り上げ、床面出土の遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。その他にも適時写真撮影・図面作成をして取り上げた。遺構外出土の遺物については、原則として小グリッドごとに出土した層位を記して取り上げ、適時写真撮影・図面作成をしている。

(3) 実測・写真撮影

平面実測は、グリッドに合わせた1 mメッシュを基本とした。住居跡・土坑類は平面図・断面図とも1/20の縮尺を基本とし、炉跡・焼土遺構については1/10の縮尺を基本とした。遺構の埋土が単層である場合は、その状態をField Cardに記し、土層断面図の作成は省略した。レベルは、基準点をもとに絶対高で測った。

写真撮影は35 mmモノクロームとカラーライド各1台、モノクローム6×7判1台を使用した。撮影にあたっては、整理時の混乱を避けるために撮影カードを利用した。実際の撮影は、各種の埋土堆積状況や、遺物の出土状況、完掘状況、全景などについて行い、調査の終了段階でラジコン・ヘリによる空中写真撮影及び写真測量を行った。遺構平面図の一部は写真測量を行い図化したものである。

2. 室内整理

野外調査で得られた遺物、実測図、写真などの各種資料は、室内整理の段階で次のように処理し、整理し、報告書作成とともに資料化を行った。

各実測図面ごとに分類し、図面点検のうえ、必要なものについては第二原図を作成し、トレースを行った。撮影されたフィルムは、ネガアルバムに密着写真と一組にして収納した。カラーライドフィルムはスライドファイルに撮影順に収納した。遺物は当センター整理室で水洗した後、出土地点・層位等を注記した。その後、地点・層位ごとに仕分けを行い、接合復元作業を実施した。遺物の実測図は実大とし、トレースは遺物の状況に応じて実大あるいは縮尺して図化した。炭化物・植物遺存体・石材の分析は、外部の専門家に委託した。

3. 掲載図版等について

報告書は以上の作業を経て編集した。掲載遺物には観察表を付した。観察表の（ ）内数値は残存値である。遺物の図版番号は各遺構ごとに付し、写真番号も同一のものとした。掲載した遺構・遺物の図版の縮尺は次のとおりである。

(1) 遺構図版

各遺構の図面は以下の縮尺を原則としたが、一部変更したものもあり、各図にスケール・縮尺を付した。住居跡の平・断面図 1/60、炉の断面図 1/60、土坑の平・断面図 1/40。焼土遺構の平・断面図 1/40。

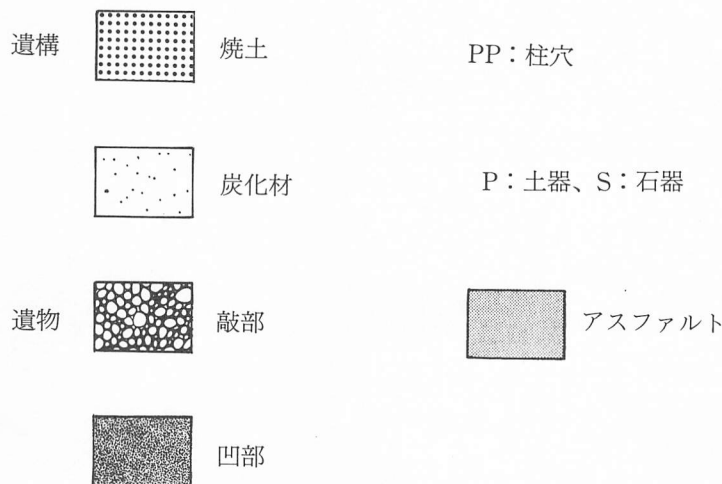
(2) 遺物図版

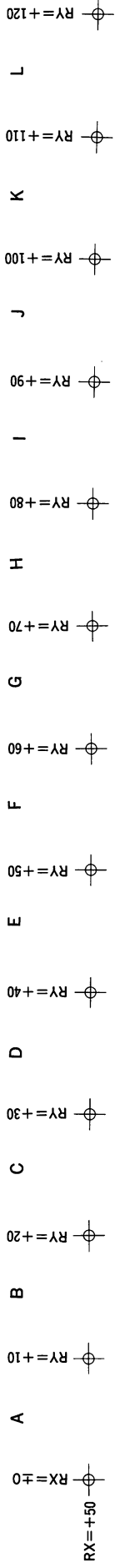
各遺物の図面は以下の縮尺を原則としたが、一部変更したものもあり、各図にスケール・縮尺を付した。土器 1/3、大型の土器 1/4、拓本 1/3、剥片石器 1/2、小型の剥片石器 2/3、礫石器 1/3、大型の礫石器 1/6。

(3) 写真図版

遺構の写真図版は縮尺不定である。遺物の写真図版については、各図に縮尺を付した。

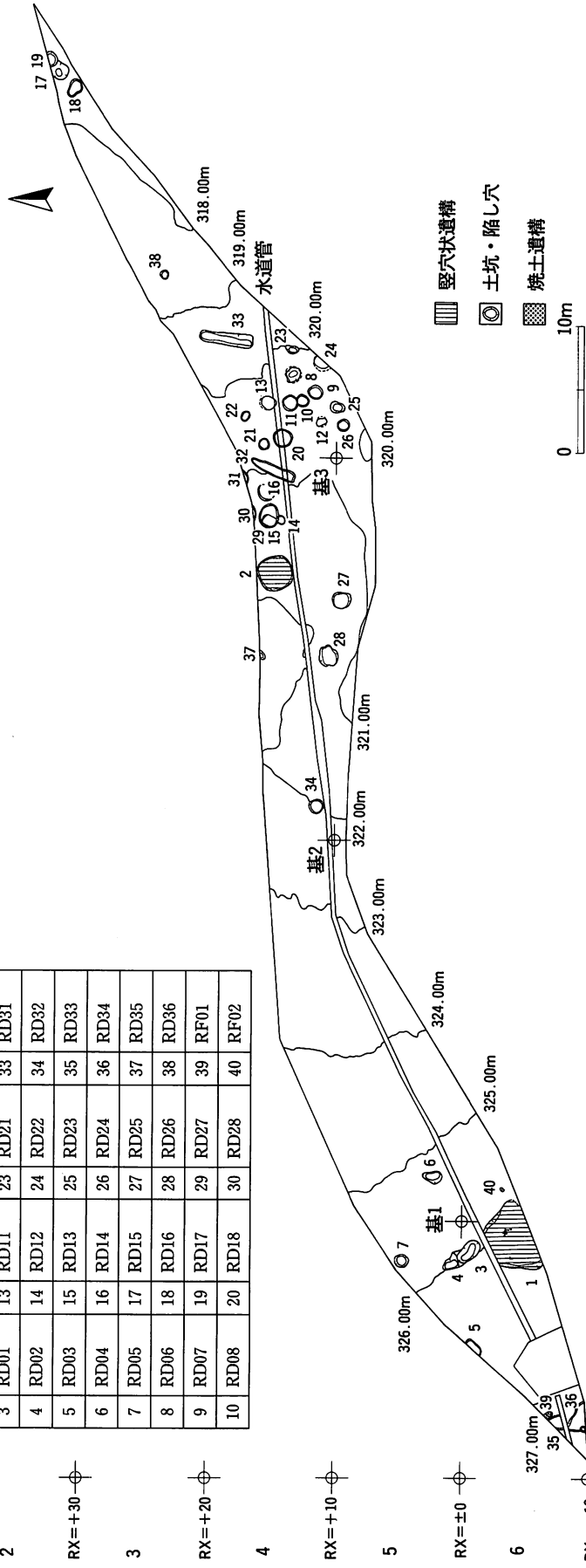
図中に使用した記号・スクリーン・トーンの凡例は次のとおりである。





第7図 遺構一覧表

No	遺構名	No	遺構名	No	遺構名	No	遺構名
1	RE01	11	RD09	21	RD19	31	RD29
2	RE02	12	RD10	22	RD20	32	RD30
3	RD01	13	RD11	23	RD21	33	RD31
4	RD02	14	RD12	24	RD22	34	RD32
5	RD03	15	RD13	25	RD23	35	RD33
6	RD04	16	RD14	26	RD24	36	RD34
7	RD05	17	RD15	27	RD25	37	RD35
8	RD06	18	RD16	28	RD26	38	RD36
9	RD07	19	RD17	29	RD27	39	RF01
10	RD08	20	RD18	30	RD28	40	RF02



第7図 目名市II遺跡遺構配置図

IV. 遺構と遺物

1. 竪穴状遺構 (第 8・19 図、写真図版 2・11)

R E 01 竪穴状遺構

遺構 (第 8 図、写真図版 2)

〈検出状況・重複関係〉 B 6 D 02 グリッドに位置する。III層で黒褐色土の広がりとして検出された。北側を水道管理設溝に切れており、南側は調査区域外にかかる。

〈規模・平面形〉 5.0 m×3.3m 以上で、方形基調と推定される。

〈埋土〉 おもに黒褐色土と黒色土で構成される。

〈壁・床面〉 壁高は東壁で 25 cm あり、外傾して立ち上がるが、他は不明である。床面はIII層を掘り込んでつくられており、ほぼ平坦である。部分的に貼り床が施された痕跡がある。

〈柱穴〉 住居跡の東端に 1 本検出された。規模は径 40 cm×30 cm、深さ 25 cm である。

〈炉〉 中央付近に石囲状のものを検出したが、明瞭な石組みではなく、焼土の痕跡のみみつかっていない。

遺物 (第 19 図、写真図版 11)

〈出土状況〉 埋土から縄文土器片が数点出土している。

〈土器〉 前期～晩期までの土器・土器片が出土している。

〈石器〉 出土していない。

時期 出土した遺物から縄文時代前期以降と思われる。

R E 02 竪穴状遺構

遺構 (第 8 図、写真図版 2)

〈検出状況・重複関係〉 H 4 A 04 グリッドに位置する。IV層で黒褐色土の広がりとして検出された。

〈規模・平面形〉 2.75 m×2.2m で、隅丸方形を呈する。

〈埋土〉 黒色土・黒褐色土・にぶい黄褐色土・にぶい黄橙色土で構成される。

〈壁・床面〉 壁高は 35 cm ほどで、直立ぎみに外傾する。床面はIV層を掘り込んでつくられており、平坦である。

〈柱穴〉 検出されていない。

〈炉〉 検出されていない。

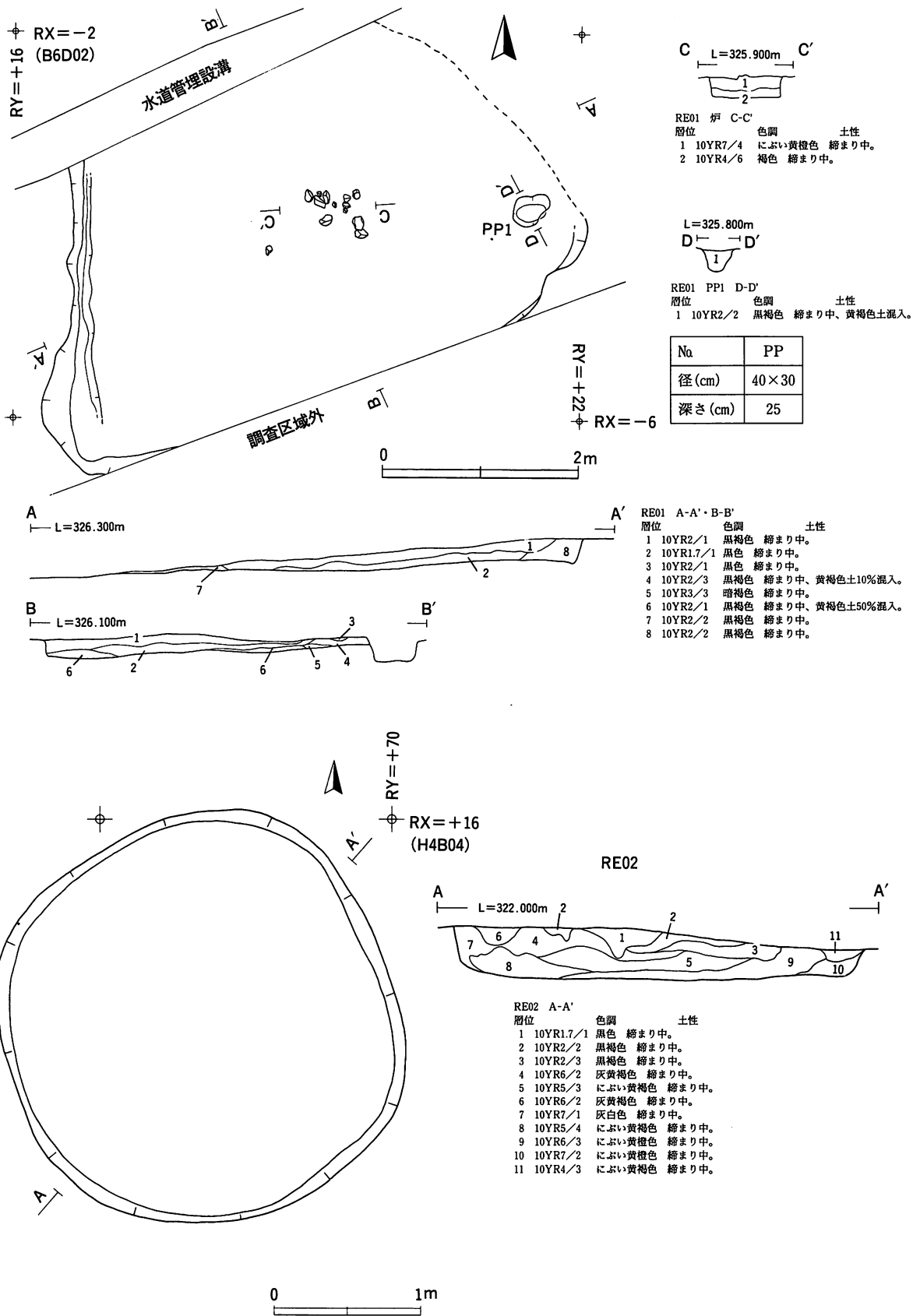
遺物 (第 19 図、写真図版 11)

〈出土状況〉 埋土から縄文土器片が数点出土している。

〈土器〉 縄文土器の底部片 1 点と土器片が数点出土しており、縄文時代中期末葉と思われる口縁部片がある。

〈石器〉 出土していない。

時期 出土した遺物から縄文時代中期末葉以降と思われる。



第8図 RE01・02 竪穴状遺構

3. 土坑 (第9～16、19・20 図、写真図版3～10、11・12)

R D 01 土坑 (第9・19 図・写真図版3・11)

〈検出状況・重複関係〉 B 6 D 01 グリッドに位置する。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。北側で R D 02 土坑と重複する。南側 50 cm には R E 01 竪穴状遺構が位置する。

〈規模・形態〉 開口部径 196 cm×130cm、底部径 138 cm×60cm、深さ 66 cm である。平面形は不整な楕円形を呈する。底面はⅢ層からⅣ層を掘り込んでつくられ、凹凸がある。壁は外反するところと直立気味に立ち上がるところがある。

〈埋土〉 おもに黒色土と黒褐色土で構成される。

〈遺物〉 埋土から縄文土器片が数点と台付鉢の台の部分が出土している。また埋土中から炭化材が得られているが樗であるとの鑑定結果を得ている。

時期 出土遺物から縄文時代中期以降と推定される。

R D 02 土坑 (第9・19 図、写真図版3・11)

〈検出状況・重複関係〉 B 6 D 01 グリッドに位置する。Ⅲ層上位で黒褐色土の広がりとして検出された。南側で R D 01 土坑と重複する。

〈規模・形態〉 開口部径 180 cm×110cm、底部は径 110 cm×100cm、深さ 50 cm である。平面形は不整形である。底面はⅢ層を掘り込んでつくられ、凹凸をもちながら湾曲する。壁は外反しながら立ち上がる。

〈埋土〉 黒褐色土・暗褐色土・黒色土で構成される。

〈遺物〉 埋土から縄文土器片と凹石 1 点が出土している。

時期 出土遺物から縄文時代中期以降と思われる。

R D 03 土坑 (第9 図、写真図版3)

〈検出状況・重複関係〉 B 6 A 01 グリッドに位置する。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。北側は調査区域外にかかり、南側半分の検出である。

〈規模・形態〉 開口部径 150 cm、底部径 50 cm ほどで、平面形は円形を呈するものと推定される。深さは 40 cm である。底面はⅢ層を掘り込んでつくられ、やや凹凸をもって西から東へ緩く傾斜する。壁は緩く外傾して立ち上がる。

〈埋土〉 おもに黒褐色土・にぶい黄褐色土で構成される。1 層から火山灰が検出されたが、八戸火山灰であるとの鑑定結果を得ている。

〈遺物〉 遺物は出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 04 土坑 (第9 図、写真図版3)

〈検出状況・重複関係〉 C 5 B 05 グリッドに位置する。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉 開口部径 145 cm×105cm、底部径 60 cm×40cm、深さ 40 cm である。平面形は不整な円形を呈し、南東側に長さ 30 cm・幅 20 cm ほどの張り出しをもつ。

〈埋土〉 おもに暗褐色土・灰黄褐色土で構成される。

〈遺物〉 縄文土器の碎片が 3 片出土している。

時期 出土遺物から縄文時代と推定されるが詳細は不明である。

R D 05 土坑 (第 10 図、写真図版 3)

〈検出状況・重複関係〉 B 5 D 02 グリッドに位置する。III層で黒色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉 開口部径 100 cm、底部径 80 cm、深さ 50 cm である。平面形は円形を呈する。底面はIII層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒色土・黒褐色土で構成され、埋土下位から底面にかけて径 10~20 cm 大の垂角礫が混入していた。

〈遺物〉 出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 06 土坑 (第 10・19 図、写真図版 4・11)

〈検出状況・重複関係〉 I 4 D 03 グリッドに位置する。III層で暗褐色土の広がりとして検出された。東側 1 m には R D 21 土坑が位置する。

〈規模・形態〉 開口部径 120 cm×110cm、底部径 120 cm、深さ 55 cm である。平面形は不整な円形を呈する。底面はIV層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。壁は緩く内湾しながら立ち上がる。

〈埋土〉 おもに暗褐色土・黒褐色土で構成される。

〈遺物〉 縄文土器片が出土している。

時期 出土遺物から縄文時代と推定されるが詳細は不明である。

R D 07 土坑 (第 10・19 図、写真図版 4・11)

〈検出状況・重複関係〉 I 4 C 05 グリッドに位置する。検出面はIII層下位で、にぶい黄褐色土の広がりとして検出された。北側には R D 08 土坑が隣接する。

〈規模・形態〉 開口部径 110 cm、底部径 110 cm、深さ 20 cm である。平面形は円形を呈し、底面はIII層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。壁は底部付近で僅かに直立ぎみに立ち上がる。

〈埋土〉 にぶい黄褐色土で構成される。

〈遺物〉 埋土から縄文土器片が 1 点出土している。

時期 出土遺物から縄文時代中期と推定される。

R D 08 土坑 (第 10・19 図・写真図版 4・11)

〈検出状況・重複関係〉 I 4 C 04 グリッドに位置する。III層下位でにぶい黄褐色土の広がりとして検出された。北側で R D 09 土坑と重複し、切っている。南側には R D 07 土坑が隣接する。

〈規模・形態〉 開口部径 110 cm×90cm、底部径 86 cm、深さ 10 cm である。平面形は円形を呈する。底面はIII層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。

〈埋土〉 にぶいに黄褐色土で構成される。

〈遺物〉 底部から小型の土器片 1 点が出土している。体部下半で無文である。

時期 出土遺物から縄文時代中期以降と推定される。

R D 09 土坑 (第 10 図、写真図版 4)

〈検出状況・重複関係〉 I 4 C 04 グリッドに位置する。III層下位でにぶい黄褐色土の広がりとして検出された。南側で R D 08 土坑と重複し、切られている。

〈規模・形態〉開口部径 120 cm、底部径 115 cm×105cm、深さ 30 cm である。平面形は不整な円形を呈する。底面はⅢ層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。壁は内湾しながら立ち上がる。

〈埋土〉 ぶい黄褐色土・暗褐色土・黄褐色土で構成される。

〈遺物〉 出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 10 土坑 (第 11・19 図、写真図版 4・11)

〈検出状況・重複関係〉 I 4 B 05 グリッドに位置する。Ⅲ層下位でぶい黄褐色土の広がりとして検出された。北東側 3 m には R D 07 土坑が位置する。南側 1 m には R D 23・24 土坑が位置する。

〈規模・形態〉 開口部径 90 cm×65cm、底部径 90 cm×80cm、深さ 43 cm である。平面形は不整は楕円形を呈し、北側で攪乱を受ける。底面はⅣ層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。壁は内湾しながら立ち上がる。

〈埋土〉 ぶい黄褐色土・褐色土・黒褐色土で構成される。

〈遺物〉 埋土から縄文土器片が出土している。

時期 時期は出土遺物から縄文時代中期以降と推定される。

R D 11 土坑 (第 11 図、写真図版 5)

〈検出状況・重複関係〉 I 4 C 03 グリッドに位置する。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。南側の壁の一部を水道管理設溝に切られている。

〈規模・形態〉 開口部径 116 cm×106cm、底部径 120 cm×112cm、深さ 70 cm である。平面形は不整な円形を呈する。底面はⅣ層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。壁はやや内湾しながら直立ぎみに立ち上がる。

〈埋土〉 おもに黒褐色土と暗褐色土で構成される。

〈遺物〉 出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 12 土坑 (第 11 図、写真図版 5)

〈検出状況・重複関係〉 H 4 C 03 グリッドに位置する。Ⅳ層中で褐色土の広がりとして検出された。北側に R D 13 土坑が隣接する。

〈規模・形態〉 開口部径 78 cm×70cm、底部径 69 cm、深さ 8 cm である。平面形は円形を呈する。底面はⅣ層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。壁は底部付近の立ち上がりが僅かに確認できるのみである。

〈埋土〉 褐色土で構成される。

〈遺物〉 出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 13 土坑 (第 11 図、写真図版 5)

〈検出状況・重複関係〉 H 4 C 03 グリッドに位置する。Ⅳ層中で褐色土の広がりとして検出された。南側に R D 12 土坑が隣接する。

〈規模・形態〉 開口部径 110 cm×100cm、底部径 108 cm×96cm、深さ 10 cm である。平面形は不整な円形

を呈する。底面はIV層を掘り込んでつくられ、平坦である。壁は底部付近の立ち上がりが僅かに確認できるのみである。

〈埋土〉褐色土で構成される。

〈遺物〉出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 14 土坑 (第 11 図、写真図版 5)

〈検出状況・重複関係〉 H 4 B 03 グリッドに位置する。IV層でいよいよ黄褐色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉 開口部径 106 cm×94cm、底部径 92 cm×84cm、深さ 22 cm である。平面形は不整な円形を呈する。底面はIV層を掘り込んでつくられ、西から東へ緩く傾斜する。壁は底部付近の立ち上がりが僅かに確認できるのみである。

〈埋土〉 おもにいよいよ黄褐色土と褐色土で構成される。

〈遺物〉 出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 15 土坑 (第 12・19 図、写真図版 5・11)

〈検出状況・重複関係〉 K 2 E 05 グリッドに位置する。III層で黒褐色土の広がりとして検出された。東側で R D 17 土坑と重複する。R D 15 土坑が R D 17 土坑を切っている。

〈規模・形態〉 開口部径 126 cm×120cm、底部径 68 cm×60cm、深さ 70 cm である。平面形は不整な円形を呈する。底面はIII層を掘り込んでつくられ、緩く湾曲している。壁は外傾しながら立ち上がる。

〈埋土〉 おもに黒褐色土と暗褐色土で構成される。

〈遺物〉 埋土下位で中央付近から縄文土器が 1 個体横転した状態 (pot 1) で、また北側から底部片が逆位の状態 (pot 2) で出土している。

時期 出土遺物から縄文時代中期初頭と思われる。

R D 16 土坑 (第 12 図、写真図版 6)

〈検出状況・重複関係〉 K 2 E 04 グリッドに位置する。III層で褐色土の広がりとして検出された。北東側 1 m には R D 15 土坑が隣接する。

〈規模・形態〉 開口部径 130 cm×90cm、底部径 110 cm×70cm、深さ 24 cm である。平面形は不整な楕円形を呈する。底面はIII層を掘り込んでつくられ、北から南へ傾斜する。壁は外傾して立ち上がる。

〈埋土〉 褐色土・明黄褐色土で構成される。

〈遺物〉 出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 17 土坑 (第 12 図、写真図版 5)

〈検出状況・重複関係〉 L 2 A 04 グリッドに位置する。III層上位で暗褐色土の広がりとして検出された。西側で R D 15 土坑と重複し、切られている。

〈規模・形態〉 開口部径 120 cm、底部径 75 cm ほどで、平面形は円形を呈するものと推定される。深さは 84 cm である。底部はIII層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。壁は直立ぎみに外傾する。

〈埋土〉 おもに暗褐色土とにぶい黄褐色土で構成される。

〈遺物〉 埋土から縄文土器の碎片が出土している。

時期 縄文時代と思われるが詳細は不明である。

R D 18 土坑 (第 12・19 図、写真図版 6・11)

〈検出状況・重複関係〉 I 4 A 03 グリッドに位置する。III層でにぶい黄褐色土の広がりとして検出された。中央部を水道管理設溝に切られている。北側 1 m には R D 19 土坑が位置する。

〈規模・形態〉 開口部径 140 cm、底部径 134 cm×124cm、深さ 54 cm である。平面形は円形を呈する。底面はIV層を掘り込んでつくられ、平坦である。壁は内湾しながら立ち上がる。

〈埋土〉 おもににぶい黄褐色土・暗褐色土・黄褐色土で構成される。

〈遺物〉 埋土から縄文土器の碎片が出土している。

時期 縄文時代と思われるが詳細は不明である。

R D 19 土坑 (第 13 図・写真図版 6)

〈検出状況・重複関係〉 I 4 A 03 グリッドに位置する。III層で褐色土の広がりをとして検出された。南側 1 m に R D 18 土坑が位置する。

〈規模・形態〉 開口部径 82 cm、底部径 70 cm、深さ 28 cm である。平面形は円形を呈する。底面はIV層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

〈埋土〉 おもに褐色土・暗褐色土・黄褐色土で構成される。

〈遺物〉 出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 20 土坑 (第 13 図、写真図版 6)

〈検出状況・重複関係〉 I 4 B 02 グリッドに位置する。III層で暗褐色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉 開口部径 84 cm×58cm、底部径 76 cm×48cm、深さ 18 cm である。平面形は楕円形を呈する。底面はIII層を掘り込んでつくられ、平坦だが副穴をもつ。壁は底部付近の立ち上がりが僅かに確認できるのみである。

〈埋土〉 暗褐色土で構成される。

〈遺物〉 出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 21 土坑 (第 13 図、写真図版 7)

〈検出状況・重複関係〉 I 4 E 04 グリッドに位置する。III層で褐色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉 開口部径 100 cm×56cm、底部径 64 cm×38cm、深さ 42 cm である。平面形は不整な楕円形を呈する。底面はIII層を掘り込んでつくられ、湾曲する。壁は外傾して立ち上がる。

〈埋土〉 褐色土・黄褐色土・暗褐色土で構成される。

〈遺物〉 出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 22 土坑 (第 13 図、写真図版 7)

〈検出状況・重複関係〉 I 4 D 04 グリッドに位置する。南側半分は調査区域外にかかり、北側半分の検出である。III層でいぶい黄褐色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉 開口部径 130 cm、底部径 152 cm ほどで、平面形は円形を呈するものと推定される。深さは 56 cm である。底面はIV層を掘り込んでつくられ、平坦である。壁は内湾しながら立ち上がる。

〈埋土〉 にぶい黄褐色土・にぶい黄橙色土・黒褐色土・暗褐色土で構成される。

〈遺物〉 出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 23 土坑 (第 13・20 図、写真図版 7・12)

〈検出状況・重複関係〉 I 5 B 01 グリッドに位置する。III層で暗褐色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉 開口部径 124 cm×100cm、底部径 116 cm×96cm、深さ 56 cm である。平面形は楕円形を呈する。底面はIV層を掘り込んでつくられ、緩く湾曲する。壁は内湾しながら立ち上がる。

〈埋土〉 暗褐色土・褐色土・にぶい黄褐色土で構成される。

〈遺物〉 埋土から縄文土器片数点が出土しており、ミニチュア土器も出土している。

時期 出土遺物から縄文時代中期以降と思われる。

R D 24 土坑 (第 14・20 図、写真図版 7・12)

〈検出状況・重複関係〉 I 5 B 01 グリッドに位置する。III層で褐色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉 開口部径 94 cm×85cm、底部径 76 cm、深さ 34 cm である。平面形は不整な円形を呈する。底面はIII層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。壁は直立ぎみに立ち上がる。

〈埋土〉 褐色土からなる。

〈遺物〉 出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 25 土坑 (第 14 図、写真図版 8)

〈検出状況・重複関係〉 G 4 E 01 グリッドに位置する。III層で褐色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉 開口部径 146 cm×128cm、底部径 120 cm×116cm、深さ 94 cm である。平面形はやや方形がかかる円形を呈する。底面はIV層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。壁は南壁は緩く外傾し、他は内湾して立ち上がる。

〈埋土〉 黒褐色土・黒色土・黄褐色土・褐色土で構成される。

〈遺物〉 埋土中から縄文土器片が数十点、磨製石斧 1 点が出土している。

時期 出土遺物から縄文時代中期以降と思われる。

R D 26 土坑 (第 14 図、写真図版 8)

〈検出状況・重複関係〉 G 4 C 05 グリッドに位置する。III層で暗褐色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉 開口部径 220 cm×110cm、底部径 152 cm×108cm、深さ 50 cm である。平面形は不整形を呈する。底面はIII層を掘り込んでつくられ、凹凸をもちながら北東から南西にむかい傾斜する。壁は緩く外傾する。

〈埋土〉 暗褐色土で構成される。

〈遺物〉 出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 27 土坑 (第 14 図、写真図版 8)

〈検出状況・重複関係〉 H 4 C 03 グリッドに位置する。IV層でいよいよ黄褐色土の広がりとして検出された。R D 12・13 土坑の下位に位置する。北側には R D 28 土坑が隣接し、東側に R D 13 土坑が隣接する。

〈規模・形態〉 開口部径 184 cm×150cm、底部径 175 cm×136cm、深さ 32 cm である。平面形は楕円形を呈する。底面はIV層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。壁は底部付近の立ち上がりが僅かに確認できるのみである。

〈埋土〉 明黄褐色土・暗褐色土・いよいよ黄褐色土で構成される。

〈遺物〉 出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 28 土坑 (第 15 図、写真図版 8)

〈検出状況・重複関係〉 H 4 C 02 グリッドに位置する。IV層でいよいよ黄褐色土の広がりとして検出された。北側半分以上は調査区域外にかかり、南端部分のみの検出である。南側には R D 27 土坑が隣接する。

〈規模・形態〉 検出した部分で開口部径 116 cm×20cm、底部径 88 cm×14cm、深さ 30 cm である。平面形は円形を呈するものと推定される。底面はIV層を掘り込んでつくられており、ほぼ平坦である。壁は底部付近での立ち上がりがわずかに確認できるのみである。

〈埋土〉 いよいよ黄褐色土・黄褐色土・灰黄褐色土・明黄褐色土から構成される。

〈遺物〉 出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 29 土坑 (第 15・20 図・写真図版 8・12)

〈検出状況・重複関係〉 H 4 E 02 グリッドに位置する。IV層で暗褐色土の広がりとして検出された。北側半分以上が調査区域外にかかり、南端部分のみの検出である。南側を耕作機による攪乱を受けている。

〈規模・形態〉 検出した部分で開口部径 130 cm×30cm、底部径 126 cm×26cm、深さ 16 cm である。平面形は円形を呈するものと推定される。底面はIV層を掘り込んでつくられており、平坦である。壁は底部付近がわずかに外傾して立ち上がる。

〈埋土〉 暗褐色土である。

〈遺物〉 埋土から縄文土器片が数点出土している。

時期 出土遺物から縄文時代中期以降と推定される。

R D 30 土坑 (第 15 図、写真図版 9)

〈検出状況・重複関係〉 H 4 E 04 グリッドに位置する。IV層中で黄褐色土の広がりとして検出された。中央部付近の上壁を水道管理設溝により切られている。2 基の土坑が重複していた可能性もある。

〈規模・形態〉 開口部径 154 cm×74cm、底部は径 134 cm×62cm、深さ 20 cm である。平面形は隅丸長方形を呈する。底面はIV層を掘り込んでつくられ、平坦である。壁は直立ぎみに立ち上がる。

〈埋土〉黄褐色土・暗褐色土・灰黄褐色土で構成される。

〈遺物〉土器・石器は出土していないが、埋土中から炭化材が出土しており、樗であるとの鑑定結果を得ている。

時期 時期を決定できる出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 32 土坑 (第 15 図、写真図版 9)

〈検出状況・重複関係〉 F 4 B 05 グリッドに位置する。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉開口部径 110 cm×108cm、底部径 96 cm×94cm、深さ 46 cm である。平面形は円形を呈する。底面はⅢ層を掘り込んでつくられ、西側から東側にむかって段差をもって傾斜する。

〈埋土〉黒褐色土・褐色土で構成される。

〈遺物〉出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 33 土坑 (第 16・20 図、写真図版 9・12)

〈検出状況・重複関係〉 A 6 C 05 グリッドに位置する。北側は調査区域外にかかり、南側は水道管理設溝に切られている。東側に R F 01 焼土遺構が隣接する。Ⅲ層で黒色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉開口部径 116 cm×80cm、底部径 90 cm×74cm、深さ 40 cm である。平面形は方形基調と思われるが詳細は不明である。底部はⅢ層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。東壁は外傾し、西壁は内湾する。

〈埋土〉黒褐色土・褐色土・黄褐色土で構成される。

〈遺物〉埋土中から縄文時代の底部片 1 点と碎片が出土している。

時期 縄文時代中期以降と推定される。

R D 34 土坑 (第 16 図、写真図版 9)

〈検出状況・重複関係〉 A 6 C 05 グリッドに位置する。北側は水道管理設溝に切られ、南側は調査区域外にかかる。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。

〈規模・形態〉検出された範囲では、開口部径 230 cm×120cm、底部径 240 cm×120cm、深さ 38 cm である。平面形は方形基調と推定されるが、詳細は不明である。底面はⅢ層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。東側に径 40 cm、深さ 20 cm の小土坑を伴う。壁はおおむね緩く立ち上がるが、東壁は直立ぎみに立ち上がる箇所がある。

〈埋土〉黒褐色土・黄褐色土で構成される。

〈遺物〉出土していない。

時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R D 35 土坑 (第 16・20 図、写真図版 9・12)

〈検出状況・重複関係〉 G 4 C 03 グリッドに位置する。Ⅲ層～Ⅳ層で褐色土の広がりとして検出された。北側は調査区域外にかかり、南側半分の検出である。

〈規模・形態〉開口部径 70 cm、底部径 52 cm、深さ 34 cm である。平面形は円形を呈するものと推定される。底面はⅣ層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。壁は底部付近の立ち上がりが僅かに確認できるのみで

詳細は不明である。

〈埋土〉 褐色土・黄褐色土・にぶいに黄褐色土で構成される。

〈遺物〉 埋土中から縄文土器片が数点出土している。

時期 出土遺物から縄文時代中期以降と推定される。

R D 36 土坑 (第 16 図、写真図版 10)

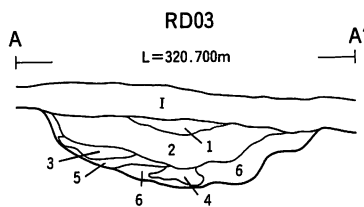
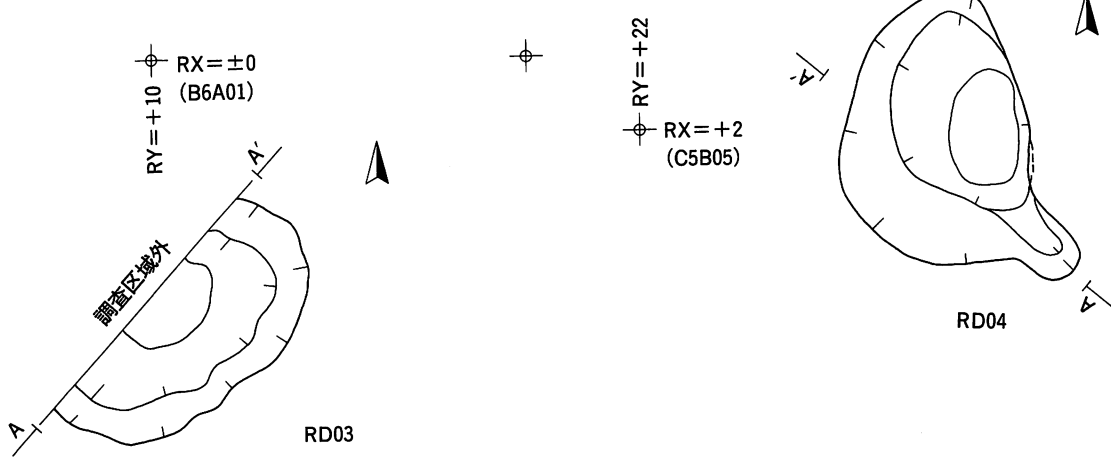
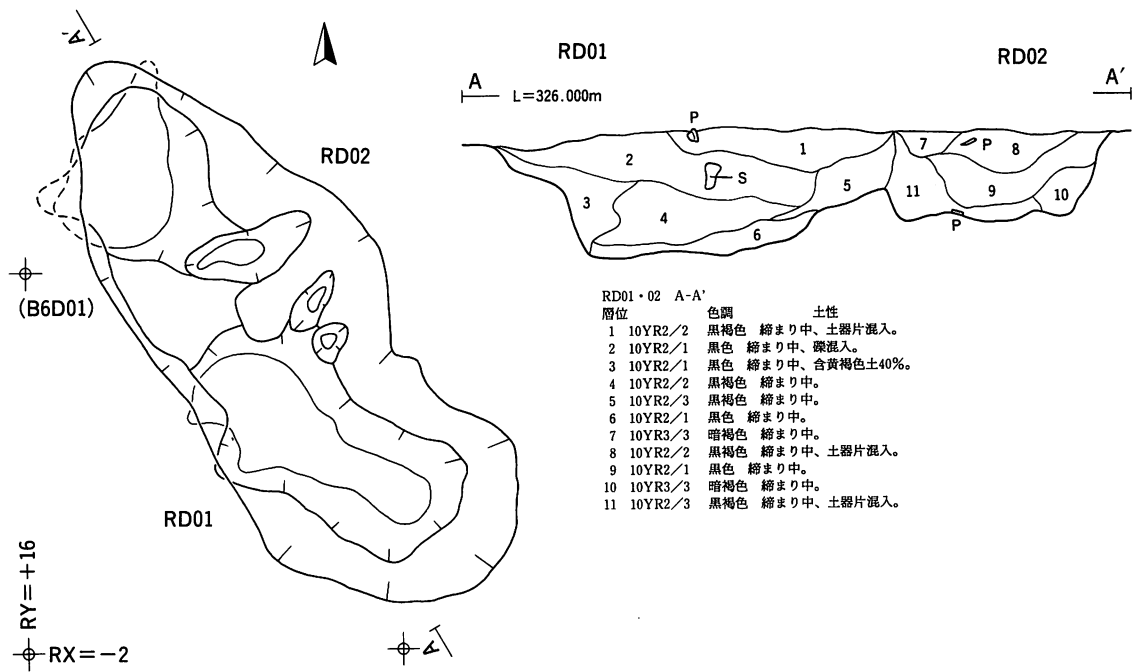
〈検出状況・重複関係〉 J 3 C04 グリッドに位置する。Ⅲ層で黒色土の広がりとして検出された。中央部を耕作機による攪乱を受けている。

〈規模・形態〉 開口部径 110 cm×66cm、底部径 52 cm×24cm、深さ 24 cm である。平面形は不整な楕円形が 2 つ連なったような形を呈する。底面はⅢ層を掘り込んでつくられ、ほぼ平坦である。壁は外傾する。

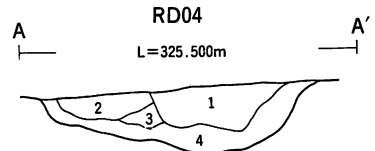
〈埋土〉 黒色土と黒褐色土で構成される。

〈遺物〉 出土していない。

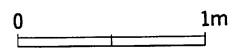
時期 出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。



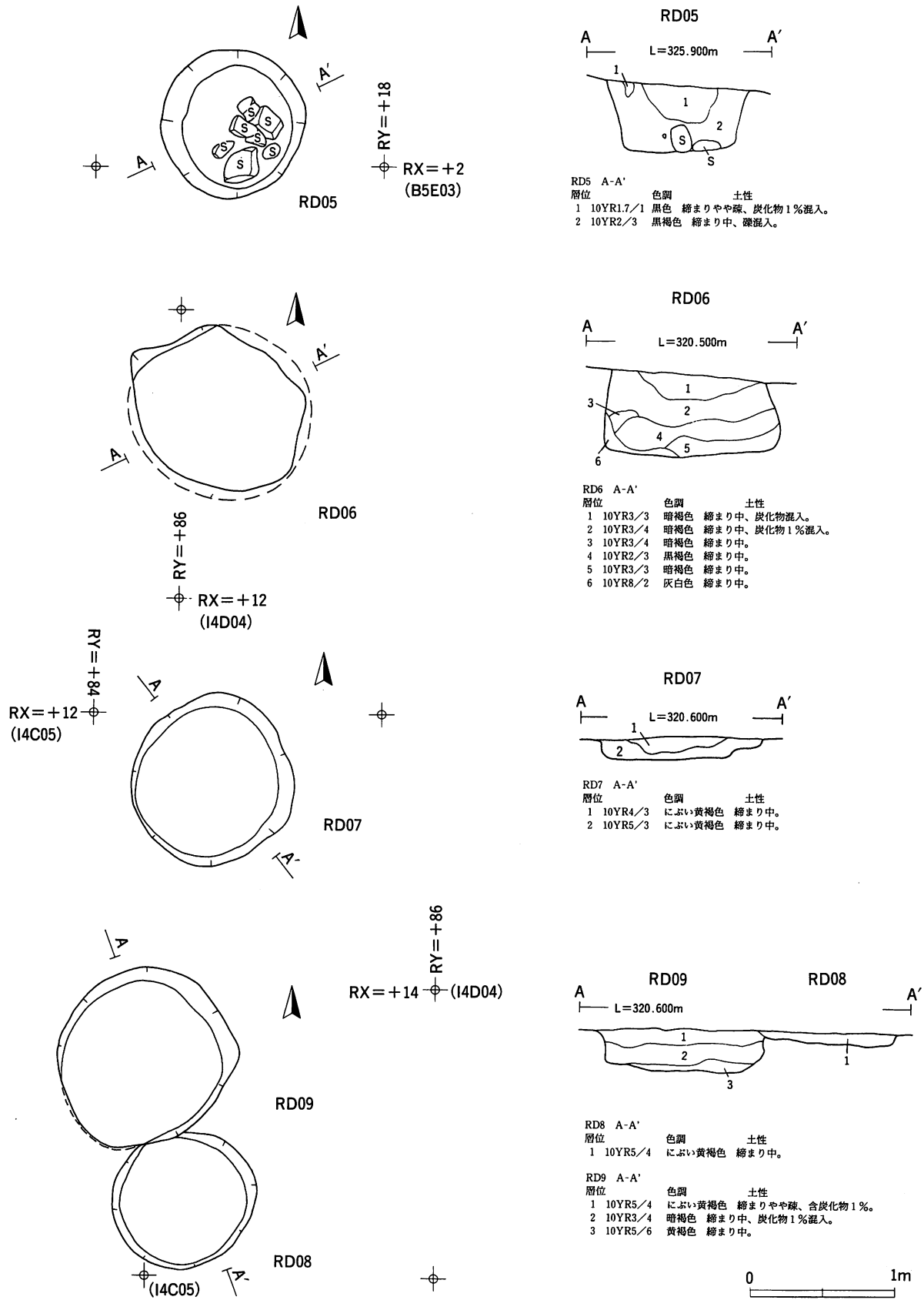
層位	色調	土性
1	10YR3/2 黒褐色	基本土層1層、現表土。
2	2.5Y7/4 におい黄褐色	締まりややあり。
3	10YR3/2 黒褐色	締まり中、土器片混入。
4	10YR4/6 褐色	締まり中。
5	10YR7/4 におい黄褐色	締まりややあり。
6	10YR2/3 黒褐色	締まり中。
6	10YR5/6 黄褐色	締まりあり。



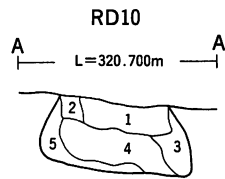
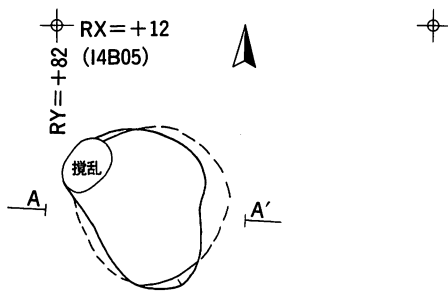
層位	色調	土性
1	10YR3/2 暗褐色	締まり疎、含炭化物微量。
2	10YR4/2 灰黄褐色	締まり中。
3	10YR5/3 におい黄褐色	締まり中。
4	10YR6/6 明黄褐色	締まり中。



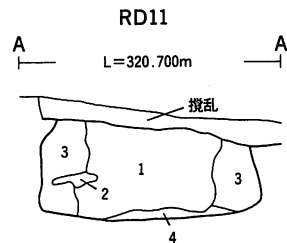
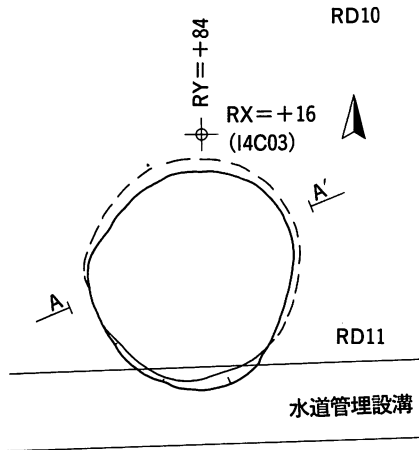
第9図 RD01・02・03・04土坑



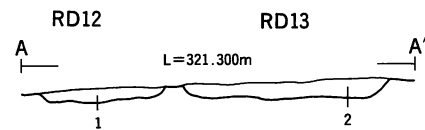
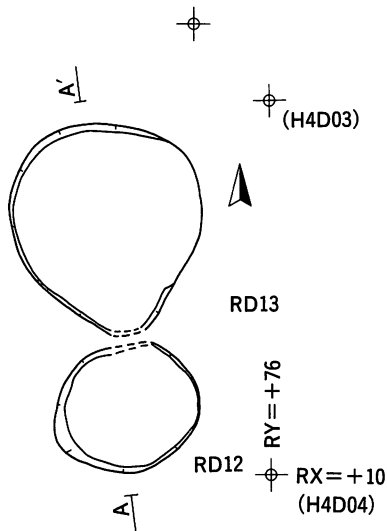
第10図 RD05・06・07・08・09土坑



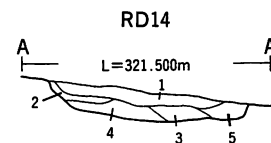
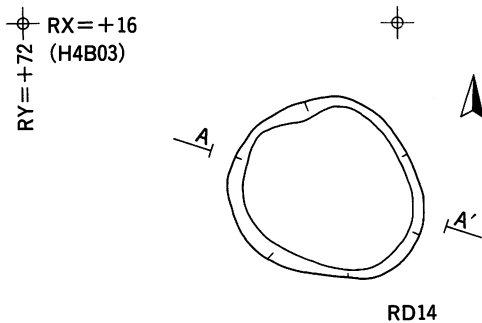
- RD10 A-A'・B-B'
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---------|----------------------|
| 1 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 締まり中、含炭化物微量。 |
| 2 | 10YR4/4 | 褐色 締まり中、含炭化物微量混入。 |
| 3 | 10YR4/4 | 褐色 締まり中、含炭化物微量混入。 |
| 4 | 10YR3/2 | 黒褐色 締まりやや疎、含炭化物1%混入。 |
| 5 | 10YR4/4 | 褐色 締まりやや密。 |



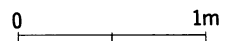
- RD11 A-A'
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---------|-----------|
| 1 | 10YR2/3 | 黒褐色 締まり中。 |
| 2 | 10YR4/6 | 褐色 締まり中。 |
| 3 | 10YR3/3 | 暗褐色 締まり中。 |
| 4 | 10YR5/6 | 黄褐色 締まり密。 |



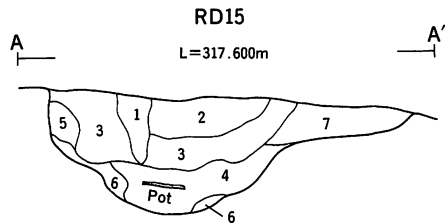
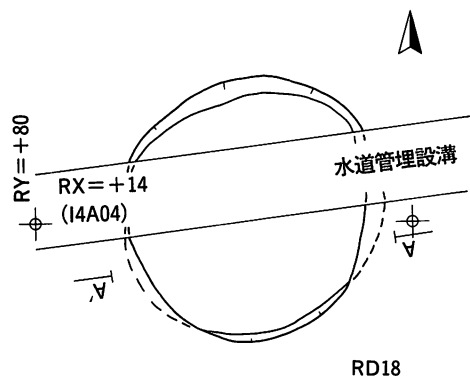
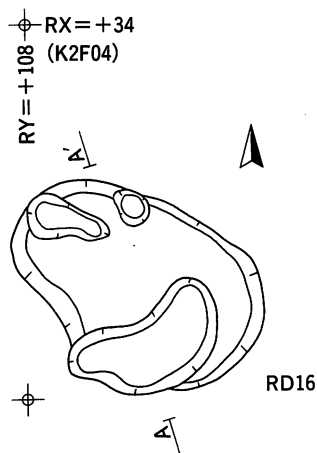
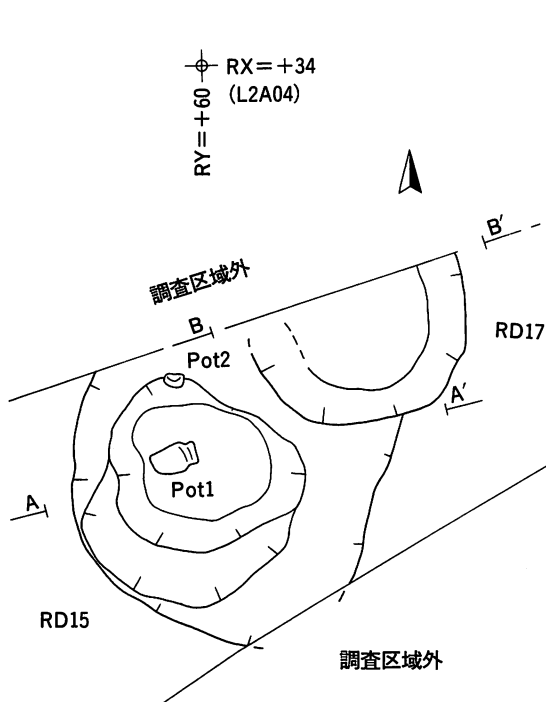
- RD12・13 A-A'
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---------|-------------------|
| 1 | 10YR4/4 | 褐色 締まりやや密、含炭化物1%。 |
| 2 | 10YR4/4 | 褐色 締まり密、含炭化物1%。 |



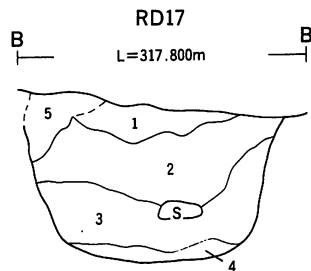
- RD14 A-A'
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---------|------------------|
| 1 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 締まり中。 |
| 2 | 10YR2/2 | 黒褐色 締まり中。 |
| 3 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色 締まりやや密。 |
| 4 | 10YR4/6 | 褐色 締まり中、炭化物1%混入。 |
| 5 | 10YR7/1 | 灰白色 締まりやや密。 |



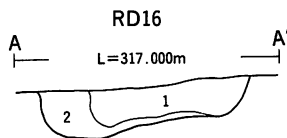
第11図 RD10・11・12・13・14土坑



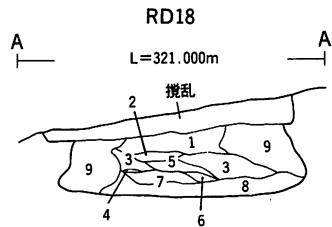
- RD15 A-A'
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---------|--------------------|
| 1 | 10YR2/1 | 黒色 締まり疎(攪乱)。 |
| 2 | 10YR2/3 | 黒褐色 締まりやや密。 |
| 3 | 10YR3/3 | 暗褐色 締まりやや密、含炭化物3%。 |
| 4 | 10YR3/2 | 黒褐色 締まり中。 |
| 5 | 10YR4/6 | 褐色 締まりやや密。 |
| 6 | 10YR3/3 | 暗褐色 締まり中。 |
| 7 | 10YR3/3 | 暗褐色 締まりやや密。 |



- RD17 A-A'
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---------|---------------------|
| 1 | 10YR3/3 | 暗褐色 締まり中。 |
| 2 | 10YR3/3 | 暗褐色 締まり中、含炭化物1%。 |
| 3 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 締まり中、含炭化物1%。 |
| 4 | 10YR3/2 | 黒褐色 締まりやや密。 |
| 5 | 10YR6/8 | にぶい黄褐色 締まり中。 |



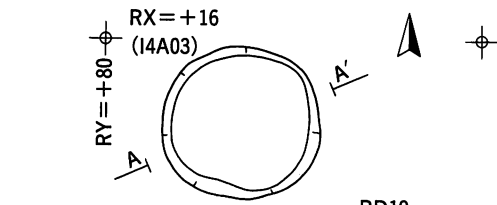
- RD16 A-A'
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---------|------------|
| 1 | 10YR4/4 | 褐色 締まり中。 |
| 2 | 10YR6/6 | 明黄褐色 締まり中。 |



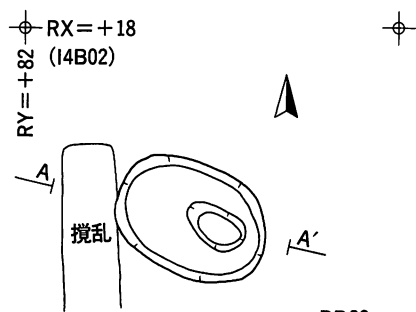
- RD18 A-A'
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|----|---------|------------------|
| 1 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色 締まり中。 |
| 2 | 10YR5/6 | 黄褐色 締まり中。 |
| 3 | 10YR4/4 | 褐色 締まり中、含炭化物1%。 |
| 4 | 10YR3/3 | 暗褐色 締まり中、含炭化物1%。 |
| 5 | 10YR3/2 | 黒褐色 締まり中、含炭化物1%。 |
| 6 | 10YR7/6 | 明黄褐色 締まりやや密。 |
| 7 | 10YR3/2 | 黒褐色 締まり中、含炭化物1%。 |
| 8 | 10YR3/3 | 暗褐色 締まり中。 |
| 9 | 10YR5/6 | 黄褐色 締まり中。 |

0 1m

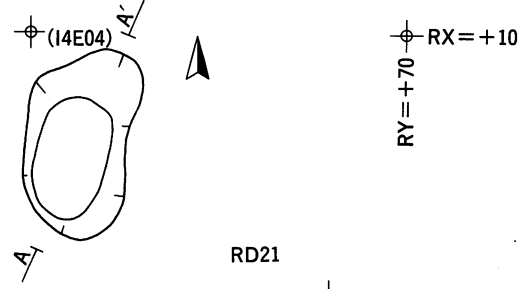
第12図 RD15・16・17・18土坑



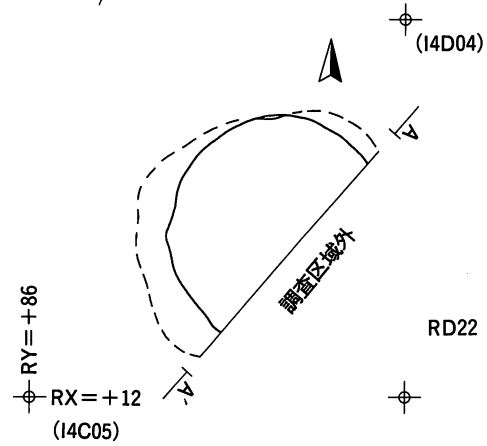
RD19



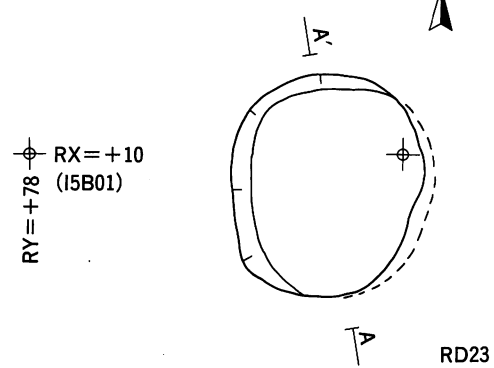
RD20



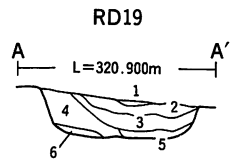
RD21



RD22



RD23



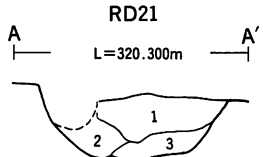
RD19 A-A'

層位	色調	土性
1	10YR8/1	灰白色 締まり中。
2	10YR4/4	褐色 締まり中。
3	10YR3/4	暗褐色 締まり中、含炭化物1%。
4	10YR5/6	黄褐色 締まり中。
5	10YR7/4	にぶい黄褐色 締まり中。
6	10YR6/4	にぶい黄褐色 締まり中。



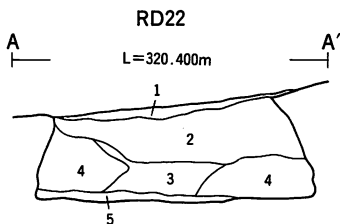
RD20 A-A'

層位	色調	土性
1	10YR3/3	暗褐色 締まり中、含炭化物1%。



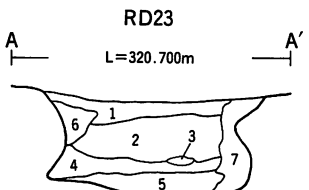
RD21 A-A'

層位	色調	土性
1	10YR4/4	褐色 締まりやや疎、含炭化物1%混入。
2	10YR5/6	黄褐色 締まり中。
3	10YR3/4	暗褐色 締まり中、含炭化物1%混入。



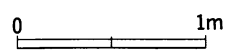
RD22 A-A'

層位	色調	土性
1	10YR5/3	にぶい黄褐色 締まり密。
2	10YR7/4	にぶい黄褐色 締まりやや密。
3	10YR2/3	黒褐色 締まり中、炭化物1%混入。
4	10YR3/3	暗褐色 締まり中、明黄褐色土40%混入。
5	10YR3/3	暗褐色 締まりやや密。

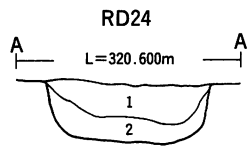
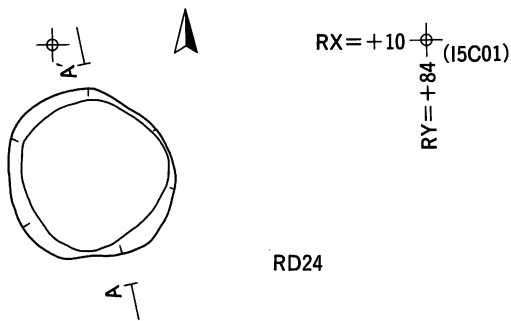


RD23 A-A'

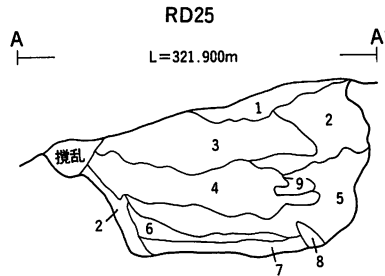
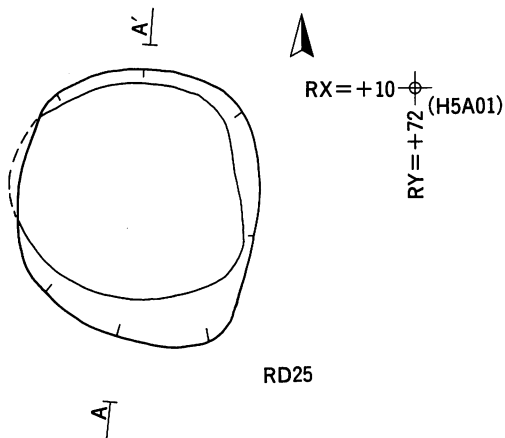
層位	色調	土性
1	10YR3/4	暗褐色 締まり中。
2	10YR3/4	暗褐色 締まり中、含炭化物3%。
3	10YR6/6	明黄褐色 締まりやや密。
4	10YR4/6	褐色 締まり中。
5	10YR3/3	暗褐色 締まり中。
6	10YR5/8	にぶい黄褐色 締まり密。
7	10YR4/6	褐色 締まり中。



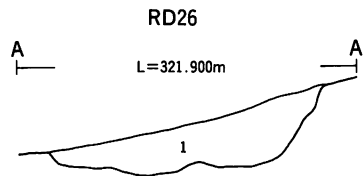
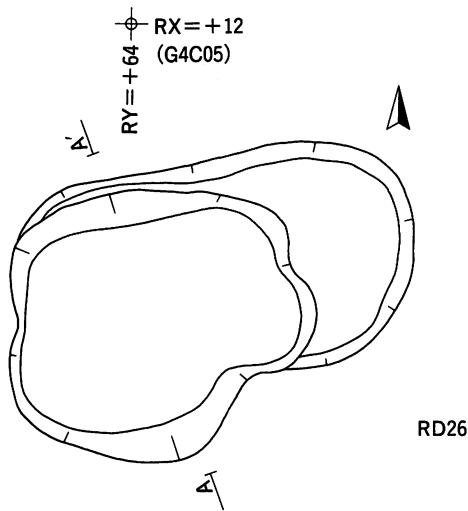
第13図 RD19・20・21・22・23土坑



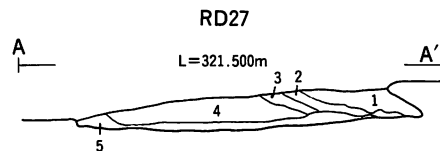
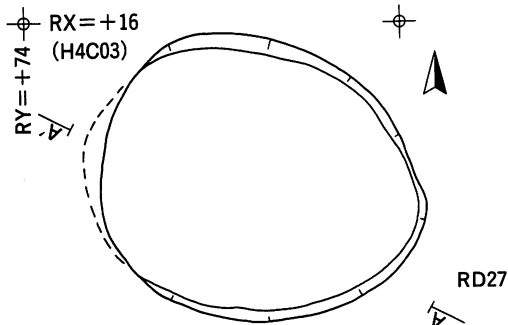
RD24 A-A'
 層位 色調 土性
 1 10YR4/4 褐色 締まり中、含炭化物1%。
 2 10YR4/6 褐色 締まり中。



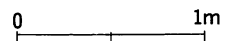
RD25 A-A'
 層位 色調 土性
 1 10YR2/3 黒褐色 締まり中。
 2 10YR4/6 褐色 締まり中。
 3 10YR2/2 黒褐色 締まり中。
 4 10YR2/1 黒色 締まり中。
 5 10YR5/6 黄褐色 締まり中。
 6 10YR6/4 にぶい黄橙色 締まり中。
 7 10YR8/1 灰白色 締まり中。
 8 10YR6/8 明黄褐色 締まり中。
 9 10YR4/4 褐色 締まり中。



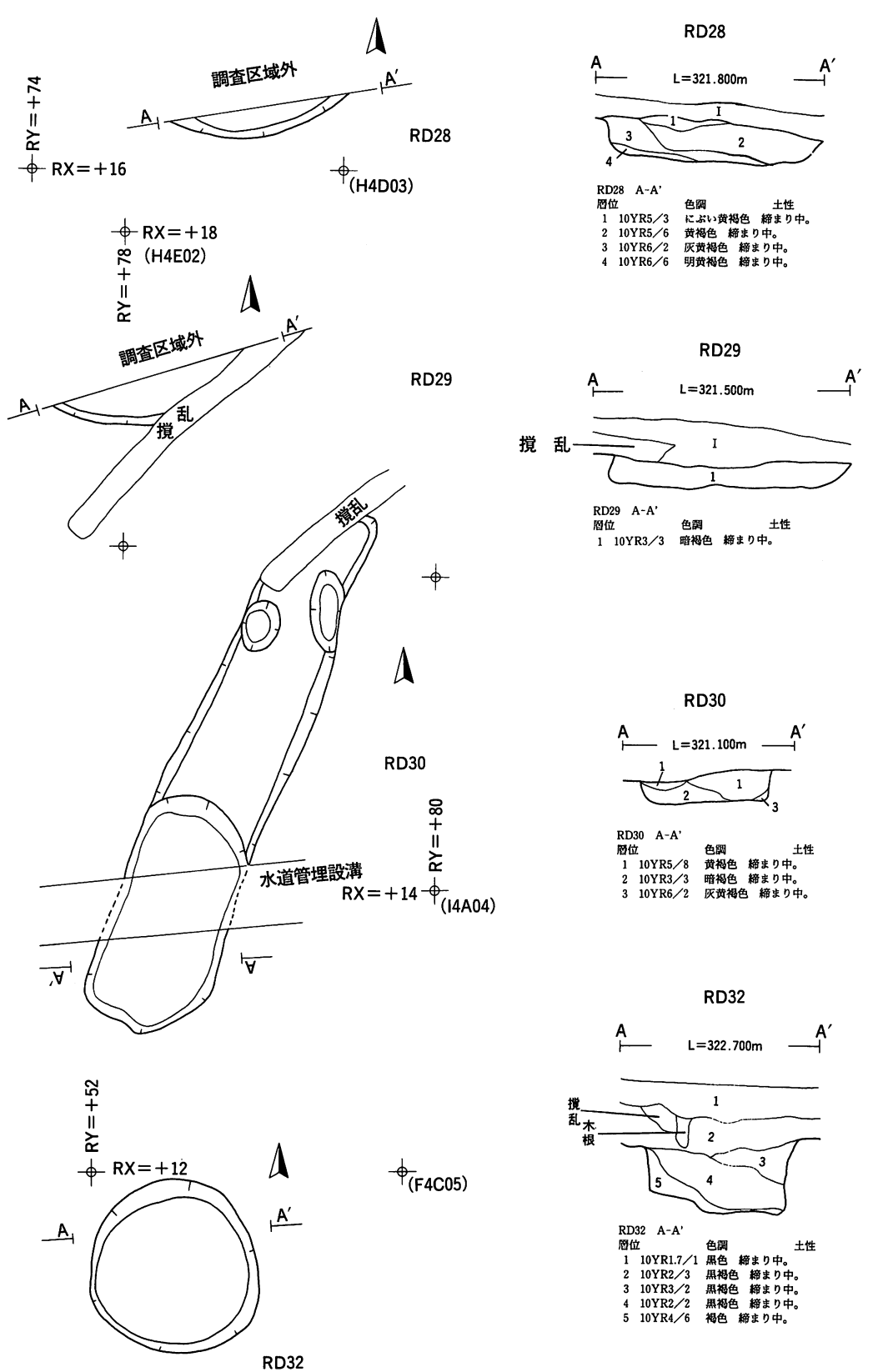
RD26 A-A'
 層位 色調 土性
 1 10YR3/4 暗褐色 締まり中。



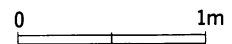
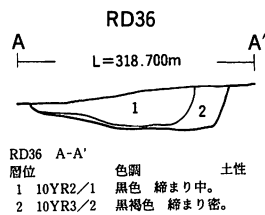
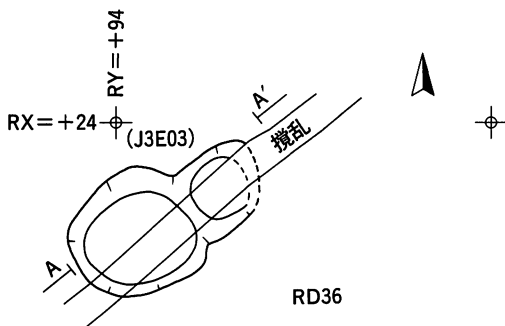
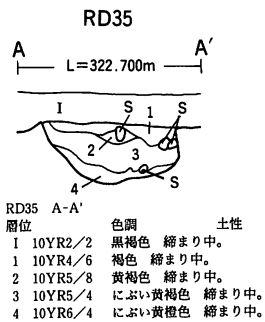
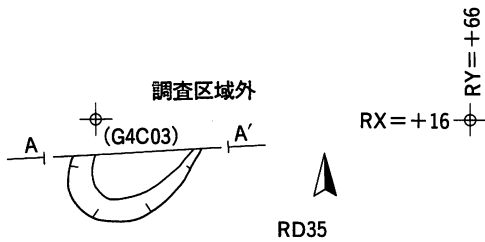
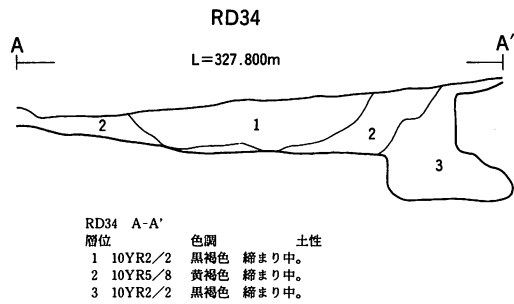
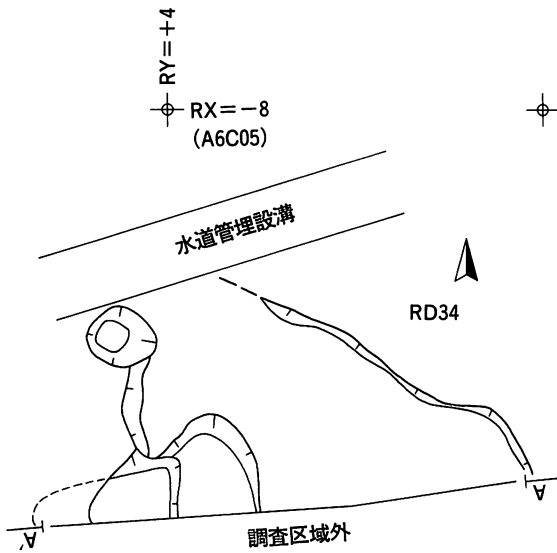
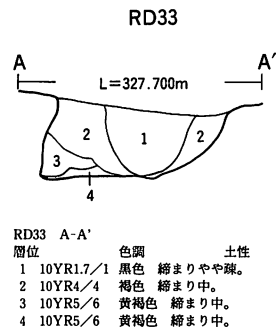
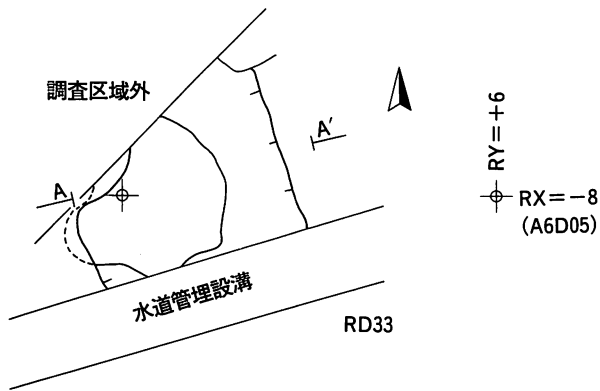
RD27 A-A'
 層位 色調 土性
 1 10YR6/6 明黄褐色 締まり中。
 2 10YR3/3 暗褐色 締まりやや疎。
 3 10YR6/6 明黄褐色 締まり中、灰白色土40%混入。
 4 10YR7/2 にぶい黄橙色 締まり中。
 5 10YR7/1 灰白色 締まりやや密。



第14図 RD24・25・26・27土坑



第15図 R D28・29・30・32土坑



第16図 RD33・34・35・36土坑

3. 陥し穴 (第 17・20 図、写真図版 10・12)

R D 31 陥し穴 (第 17・20 図、写真図版 10・12)

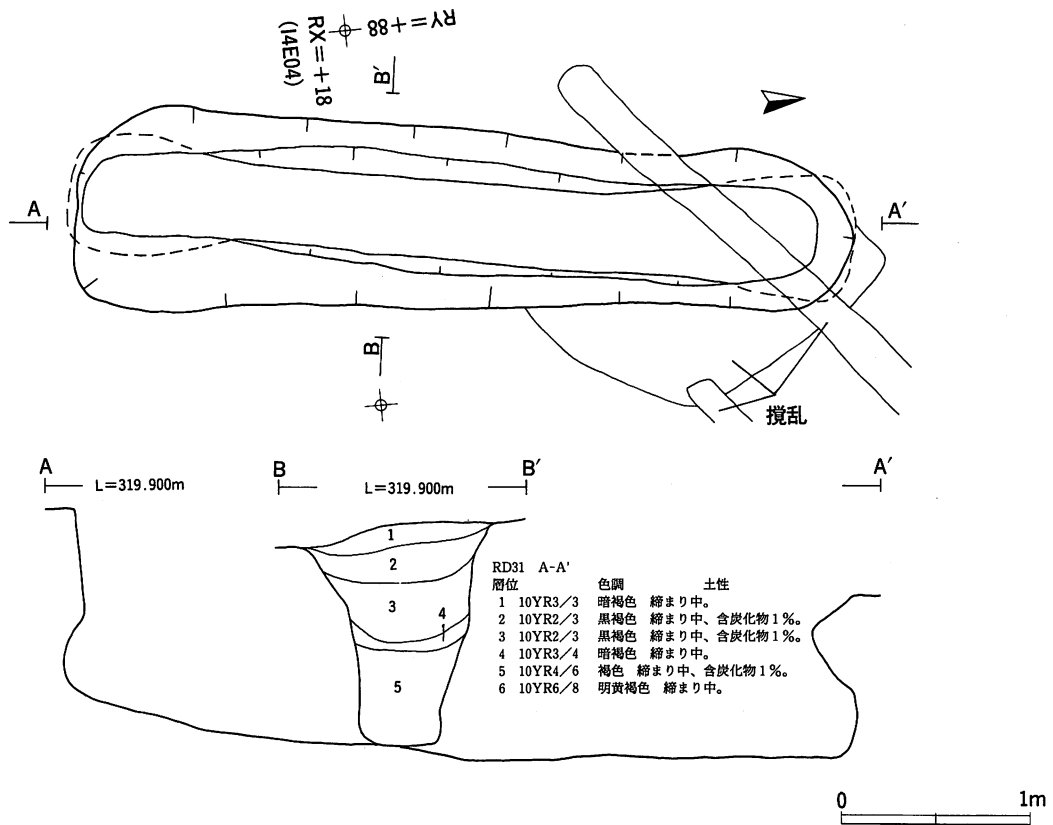
〈検出状況・重複関係〉 I 3 E 02 グリッドに位置する。III層で暗褐色土の広がりとして検出された。北側を耕作機による攪乱を受けている。

〈規模・形態〉開口部径 414 cm×114cm、底部径 396 cm×42cm、深さ 124 cm である。平面形は溝状を呈し、長軸をほぼ南北方向にもつ。底面はIV層を掘り込んでつくられており、平坦面をもって南から北に傾斜する。東西の壁は外傾するが、南北の壁は内湾する。

〈埋土〉 暗褐色土・黒褐色土・褐色土・明黄褐色土で構成される。

〈遺物〉 埋土から縄文土器片が数点出土している。

時期 出土遺物から縄文時代中期以降と推定される。



第17図 R D 31陥し穴

4. 焼土遺構 (第 18 図、写真図版 10)

R F 01 焼土遺構 (第 18 図、写真図版 10)

〈検出状況・重複関係〉 A 6 C 04 グリッドに位置する。III層で赤褐色土の広がりとして検出された。北西側は調査区域外にかかる。

〈規模・形態〉 検出した範囲は、径 60 cm×50 cm ほどの広がりを持ち、楕円形を呈するものと推定される。

〈埋土〉 赤褐色の焼土で、厚さは最大 10 cm である。

〈遺物〉 土器・石器は出土していないが、埋土中から炭化材が出土しており、樗であるとの鑑定結果を得ている。

時期 時期を決定できる出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

R F 02 焼土遺構 (第 18 図、写真図版 10)

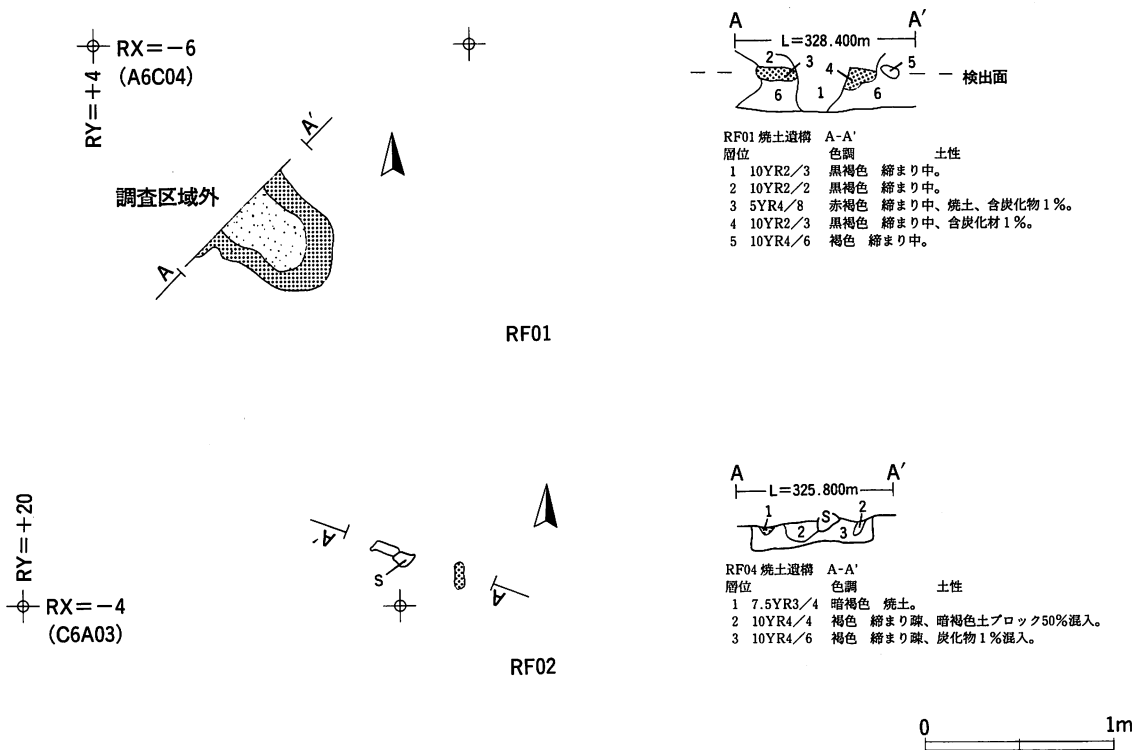
〈検出状況・重複関係〉 C 6 B 02 グリッドに位置する。III層で暗褐色を呈する焼土の広がりとして検出されたが、規模・形状が不明瞭である。西側 1.3 m に R E 01 竪穴状遺構が位置する。

〈規模・形態〉 14 cm×5cm ほどの広がりをもつ。

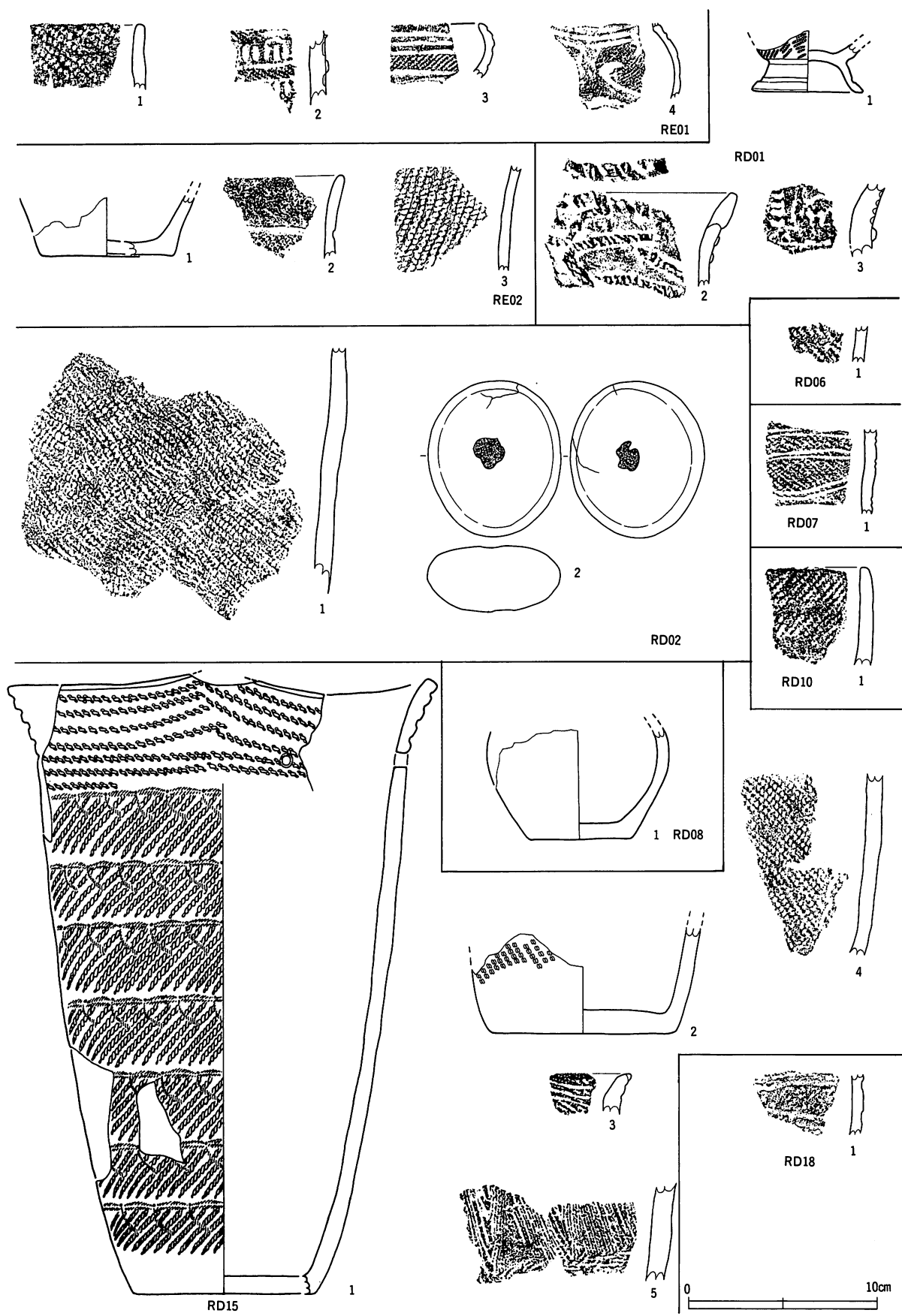
〈埋土〉 焼土の厚さは最大 5 cm である。

〈遺物〉 遺物は出土していない。

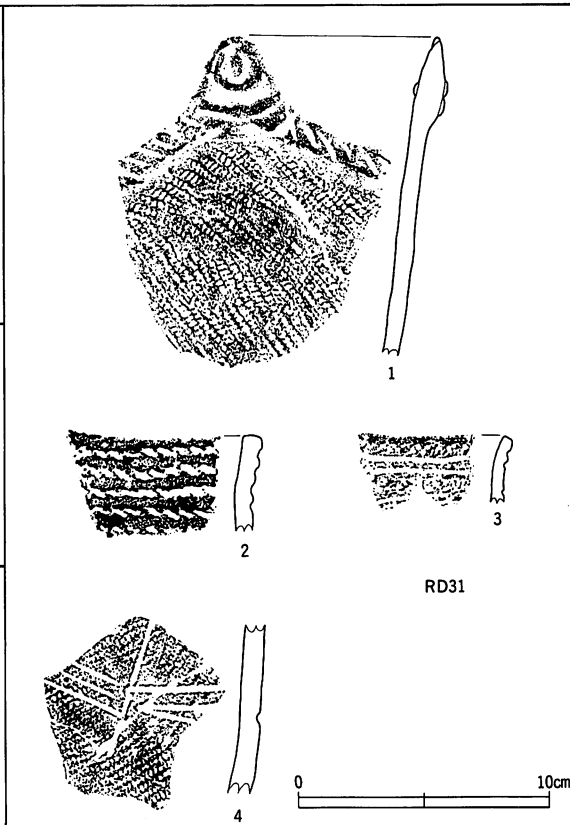
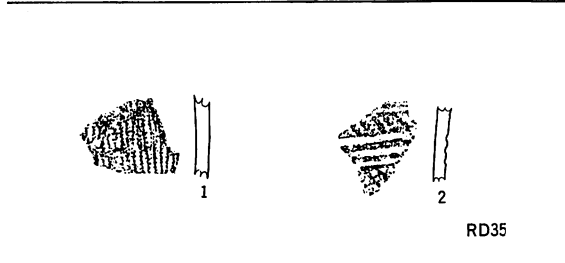
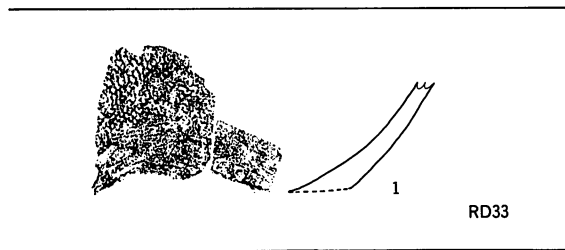
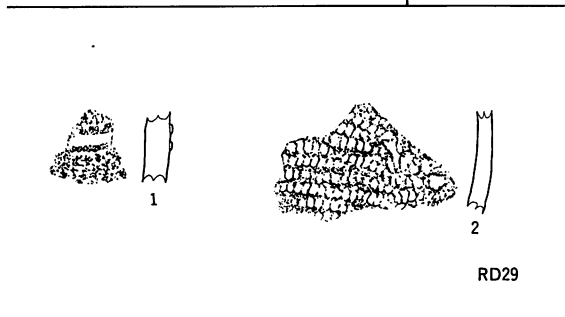
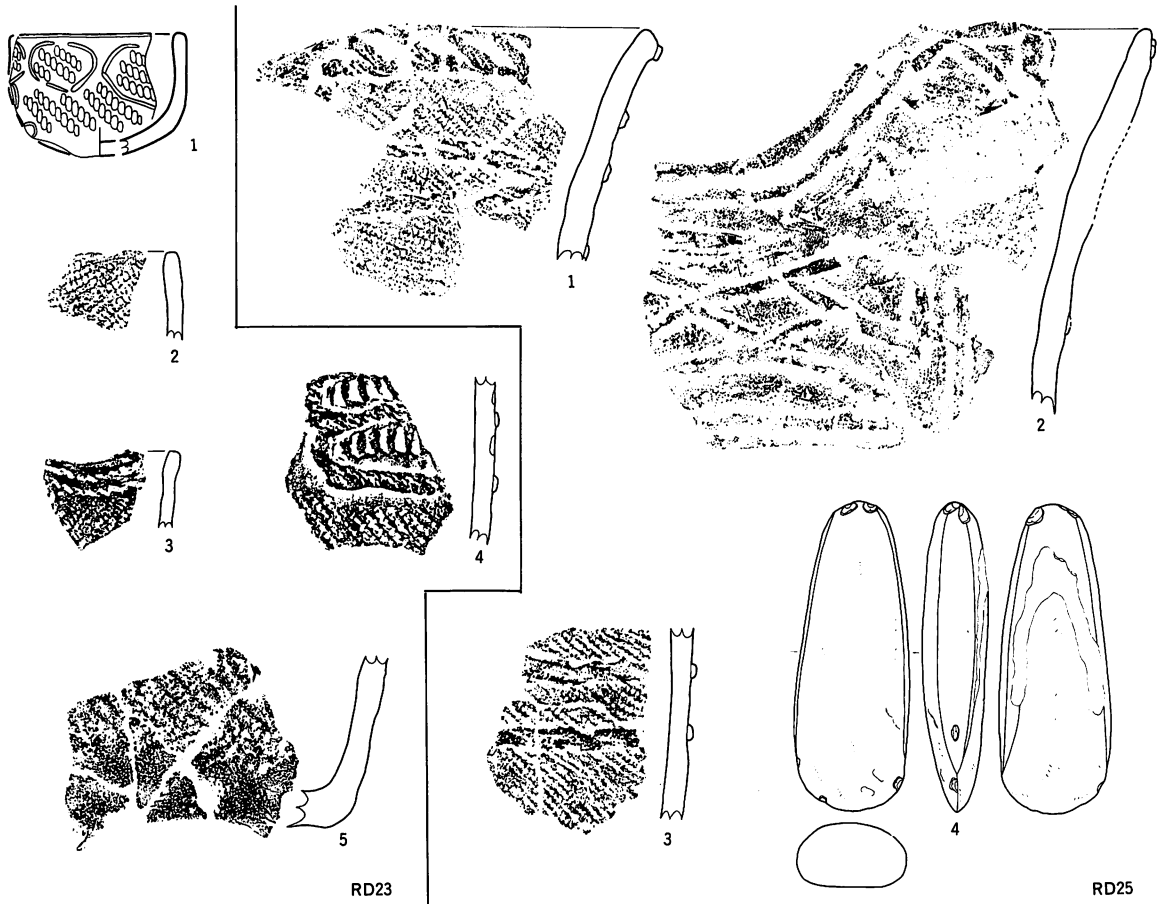
時期 時期の詳細は不明である。



第18図 R F 01・02焼土遺構



第19图 遺構内出土遺物(1)



第20図 遺構内出土遺物(2)

V. 遺構外の出土遺物

遺構外から出土した遺物の総量は、コンテナ（大：41×31×30cm）で5箱である。その多くがF4区・G4区付近とJ3区付近から出土している。この2箇所は旧沢跡であつたらしく、周囲に比べて緩く落ち込んでいる。いずれの箇所からも数形式にわたる土器が出土しているが層位的な把握は困難であつた。ここでは遺構内の出土遺物を含めて分類を行い、その特徴を述べてみたい。

（1）土器（第21～26図、写真図版13～18）

約5箱が出土している。分類については、縄文時代の土器と弥生時代の土器があることから、a、縄文時代の土器、b、弥生時代の土器に大別し、縄文時代の土器については草創期～晩期までの時期区分を行い、該当する時期について、時期別に前期の土器―第I群、中期の土器―第II群、後期の土器―第III群、晩期の土器―第IV群、その他の土器―第V群、弥生土器は第VI群として記載する。さらに小分類を1類・2類…、a類・b類…として記載した。小分類の設定にあたっては従来の形式名や分類名に対応するよう努めた。

a、縄文時代の土器

第I群土器：縄文時代前期に属する土器（第25図、写真図版17）

少量出土している。円筒式土器に属するものと思われるが、破片資料であり詳細は不明である。

第II群土器：縄文時代中期に属する土器（第21・22・25・26図、写真図版13・14・17・18）

個体数は最も多い。ただし個体復元できたものは少なく、破片資料が多くを占めるため、器形・文様など詳細については不明な部分が多い。円筒式土器（1類）と大木式土器（2類）に属すると思われるものが出土しており、以下それぞれについて概観する。

第II群1類（第25図、写真図版17）

円筒式土器に属すると思われる土器群である。破片資料のみで器形など詳細は不明であるが、施文方法・文様等の特徴から次のように細分できる。隆帯間に平行・波状・鋸歯状に原体圧痕が施される土器群、隆帯間に原体圧痕を用いた爪形の圧痕が施される土器群、隆帯間に工具を用いた爪形の圧痕や刺突が施される土器群、細い隆帯の貼り付けにより文様が描かれる土器群などである。色調はにぶい黄褐色～暗褐色を呈するものが多く、胎土には細砂・細礫を含む。これらの土器群は、それぞれ円筒上層a式、円筒上層b式、円筒上層c式、円筒上層d式に相当するものと思われる。

さらに円筒式土器に後続する土器として泉山・榎林式などに相当すると思われる土器片も出土しているが、いずれも破片資料であり詳細は不明である。

第II群2類（第21・22・25・26図、写真図版13・14・17・18）

大木式土器に属すると思われる土器群である。復元個体数が数点あり、器形・施文方法・文様等の特徴から以下のように分類できる。中葉から末葉までの土器が出土しているようである。

第II群2類a（第21・25図、写真図版13・17）

小型の深鉢が1点出土している。口縁部が外反し胴部がやや張り出す器形である。口縁部には厚い隆帯が貼り付けられ4単位の渦巻文が施されている。口縁部と胴部は2本の隆帯を横位に貼りつけて区画されている。胴部は地文が施されて後、細い隆帯による渦巻文が貼り付けられ、渦巻文の横位には剣先文が付き、下位は懸垂状に延びる。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は緻密である。焼成は良好である。他にキャリパー形深鉢の口縁部破片などが出土している。これらの土器は中期中葉（大木8a・8b式）に相当するものと思われる。

第II群2類b（第25図、写真図版17）

破片資料で詳細は不明であるが、深鉢の口縁部破片と推定される。沈線によって縦位の文様（楕円文？）が描かれ、それに沿って内側に刺突列が施されている。中期後葉（大木9式）に相当するものと思われる。

第II群2類c（第21・22・26図、写真図版13・14・18）

器種は深鉢で大型のものや小型のものがある。器形は胴部中央より下に膨らみを持ち、口縁部が外反する器形が多く、口縁は小波状を呈するものと平縁のものがある。口縁部は無文となるが、横位の沈線によってしっかり区画され無文帯を形成するものと、粘土を薄く貼り付けて肥厚させて無文帯を形成しているものがあり、前者のほうが口縁部の屈曲が強い傾向がある。文様は沈線で区画された曲線のあるいは直線的な無文帯によって描かれ、文様帯は体部上半に展開しているようである。地文は撚糸・単節、複節の縄文がみられるが撚糸が多く用いられる傾向がある。施文方向は縦回転が多い。色調はにぶい黄褐色～黄褐色を呈するものやにぶい赤褐色を呈するものがある。胎土には砂礫が混入し、金雲母を含むものがある。焼成は良好である。口縁部破片では、臚状隆帯や刺突列が付されているものが多くみられる。これらの土器は中期末葉（大木10式）に相当するものと思われるが、そのなかでも新しい段階に属するものが大半を占めるようである。

第III群土器：縄文時代後期に属する土器（第26図、写真図版18）

個体数は図示した1点である。同一個体と思われる破片が数点出土しているが復元は叶わなかった。器種は深鉢で口縁部が外傾する器形のようなものである。平行沈線による入組文風の文様が描かれている。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には砂礫を含む。焼成は良好である。いわゆる瘤付土器と思われる。

第IV群土器：縄文時代晩期に属する土器（第24図、写真図版16）

平行沈線と雲形文・磨消縄文によって施文される土器で、地文には細い原体の縄文が施される。色調は黒褐色を呈し、胎土は緻密である。20は磨滅して器壁も剝落している。晩期中葉に属するものと思われる。

第V群土器：その他の土器（第22・23図、写真図版15・16）

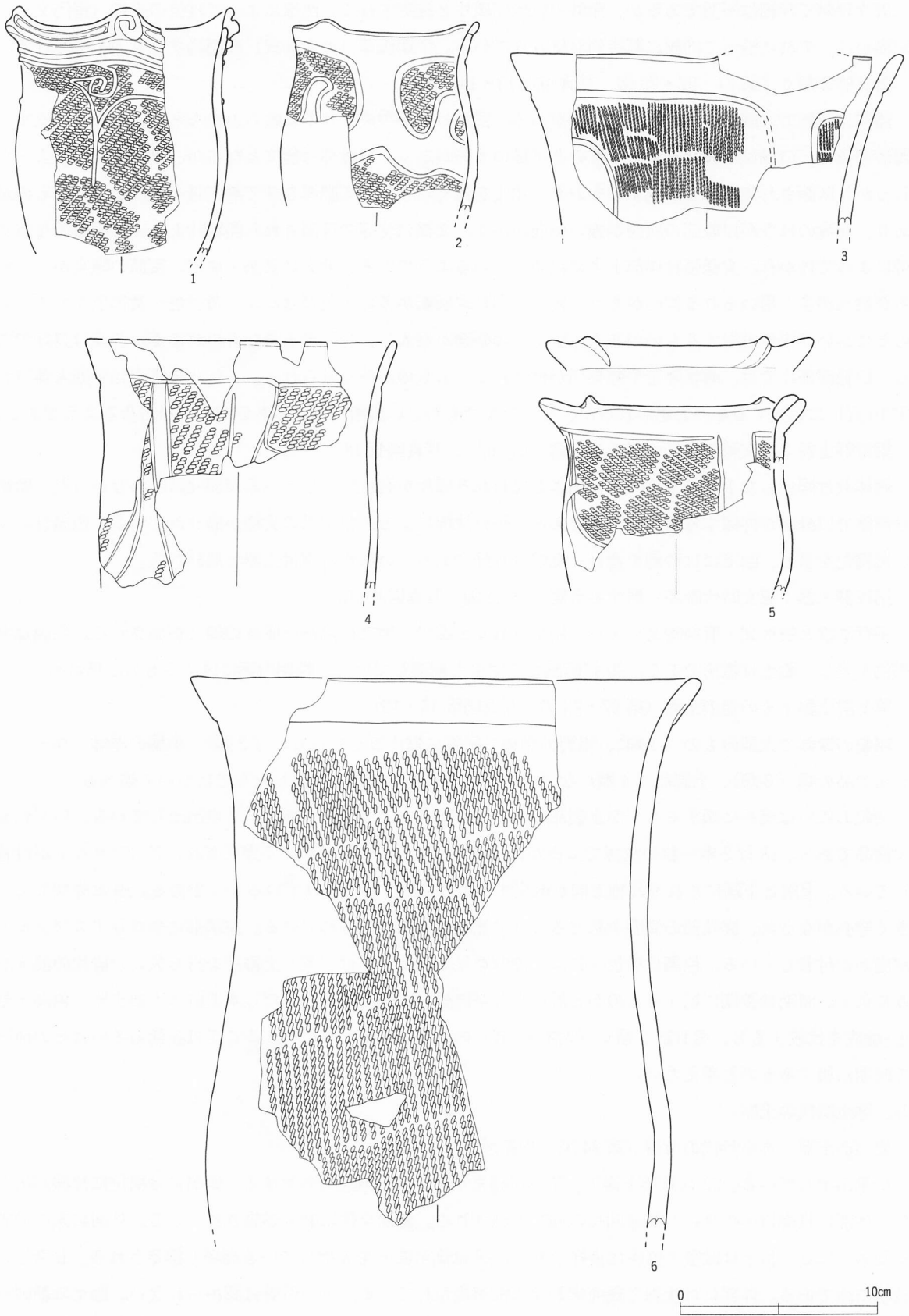
粗製の深鉢で大型のもの（1類）、粗製の深鉢で底部に網代痕をもつもの（2類）、小型の深鉢・鉢・ミニチュア品の類（3類）、土製品（4類）などを一括した。ここでは4類としたものについて述べる。

突起あるいは摘みに類するものや土製品の可能性もあり、ここに含くめた。2点出土している。いずれも欠損品である。18は2本一組の沈線で文様が施されている。中央部は大きく穿孔され、アスファルトが付着している。上端と下端にそれぞれ軸方向が直交するように穿孔がなされているようである。19は先端部に大きく穿孔がなされ、穿孔部の周囲を縁どるように沈線で文様が施されている。左端部にやはりアスファルトが僅かに付着している。色調は橙色～にぶい橙色を呈し、胎土には石英と土器片を打ち欠いた碎片の混入がみられる。時期は後期に属するものかと思われるが詳細は不明である。ただし本遺跡出土の土器と色調・胎土・焼成を比較すると、第II群2類c（大木10式）の土器群に極めて近い。ここでは該期あるいはその前後の時期に属するものと考えたい。

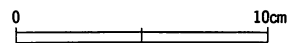
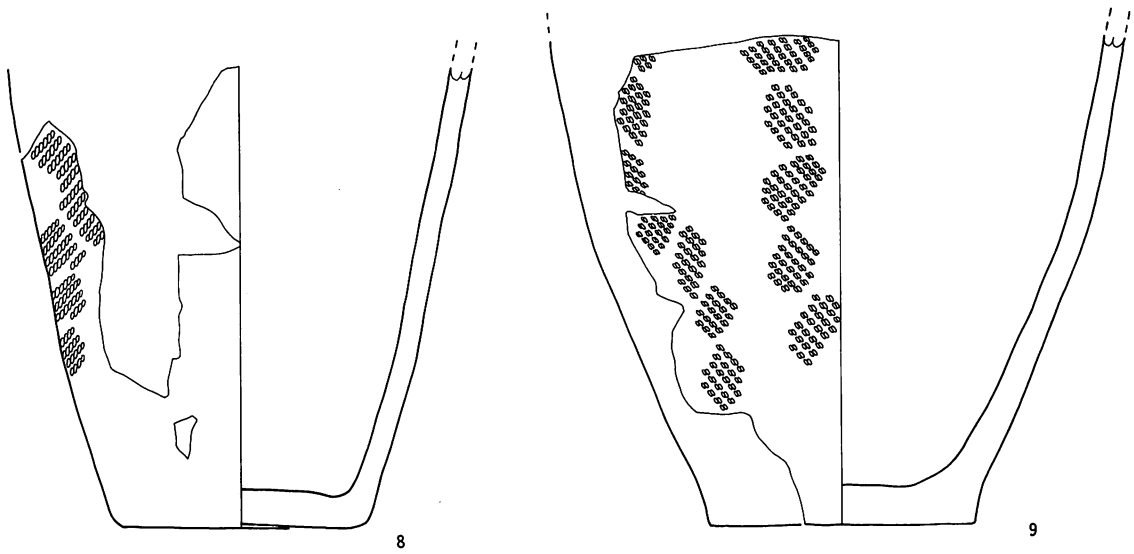
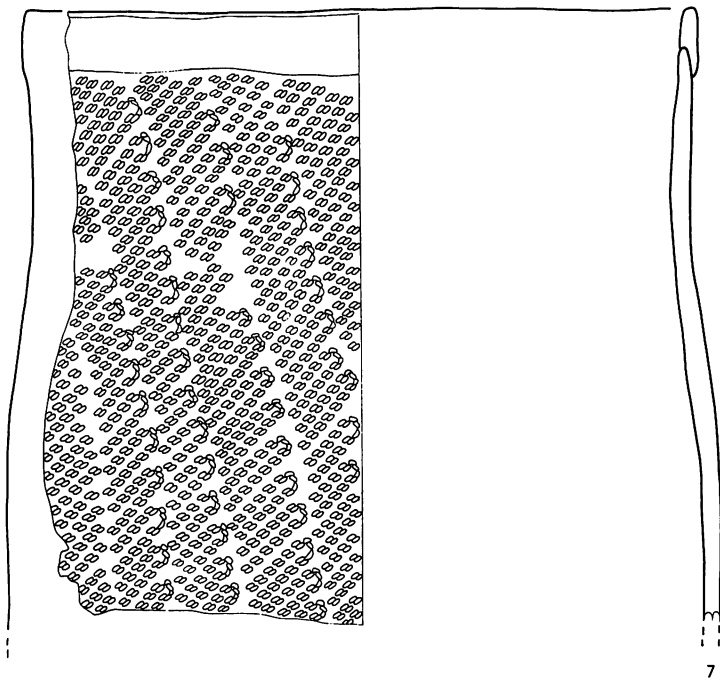
b、弥生時代の土器

第VI群土器：弥生時代の土器（第24図、写真図版16）

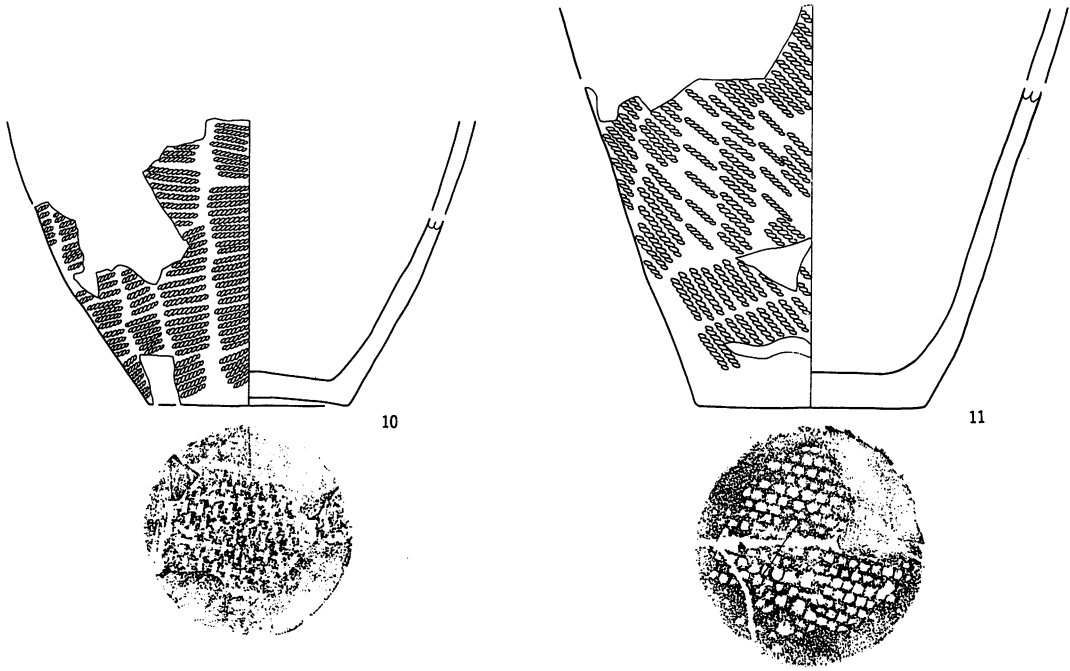
少量出土している。22は鉢形土器で、頸部が縮まり口縁部は無文で外反する。頸部には横位に沈線が施され、体部には縄目の小さいLR縦回転の縄文が施される。器面全体に磨きが施されている。外面に朱の付着が認められる。胎土は緻密で焼成は良好である。28は高台部分を欠損している高坏と推定される。6単位の波状口縁である。体部には沈線で幾何学的な文様が描かれている。朱の付着は認められない。胎土は細砂を含み、緻密で焼成は良好である。別個体と思われる高坏の口縁部破片も出土している。22は弥生時代の前期、28は弥生時代の中期に相当するものと思われる。



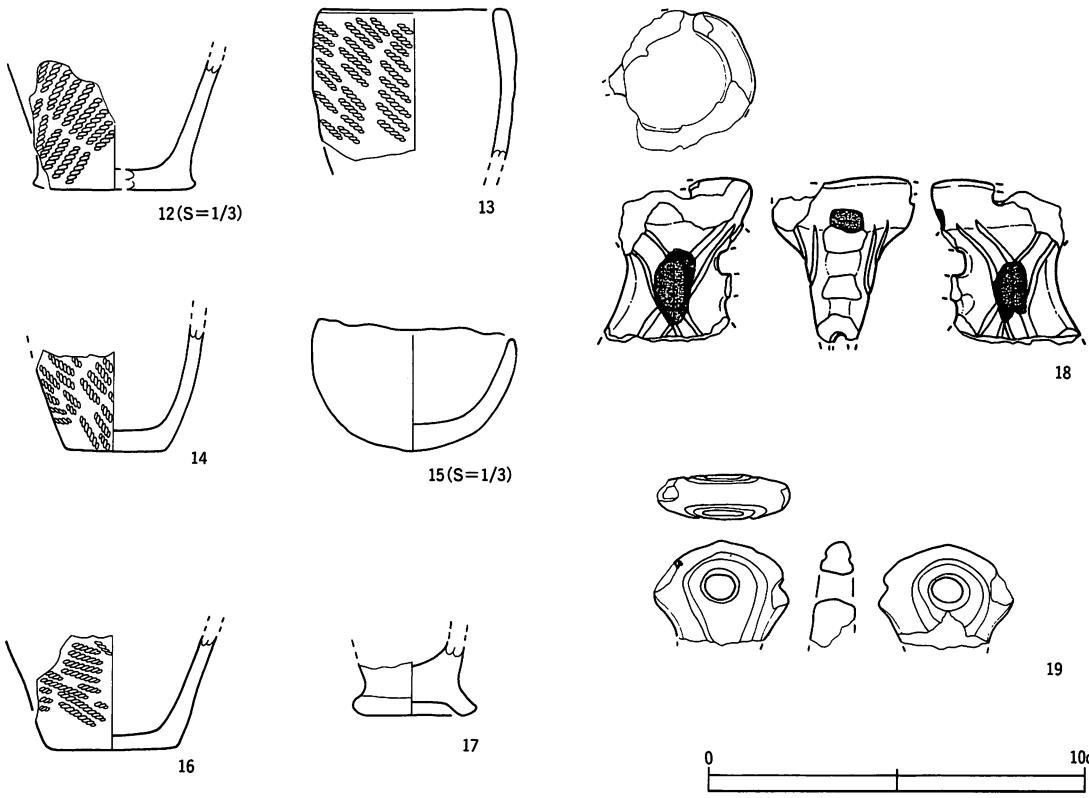
第21図 遺構外出土遺物：土器(1)



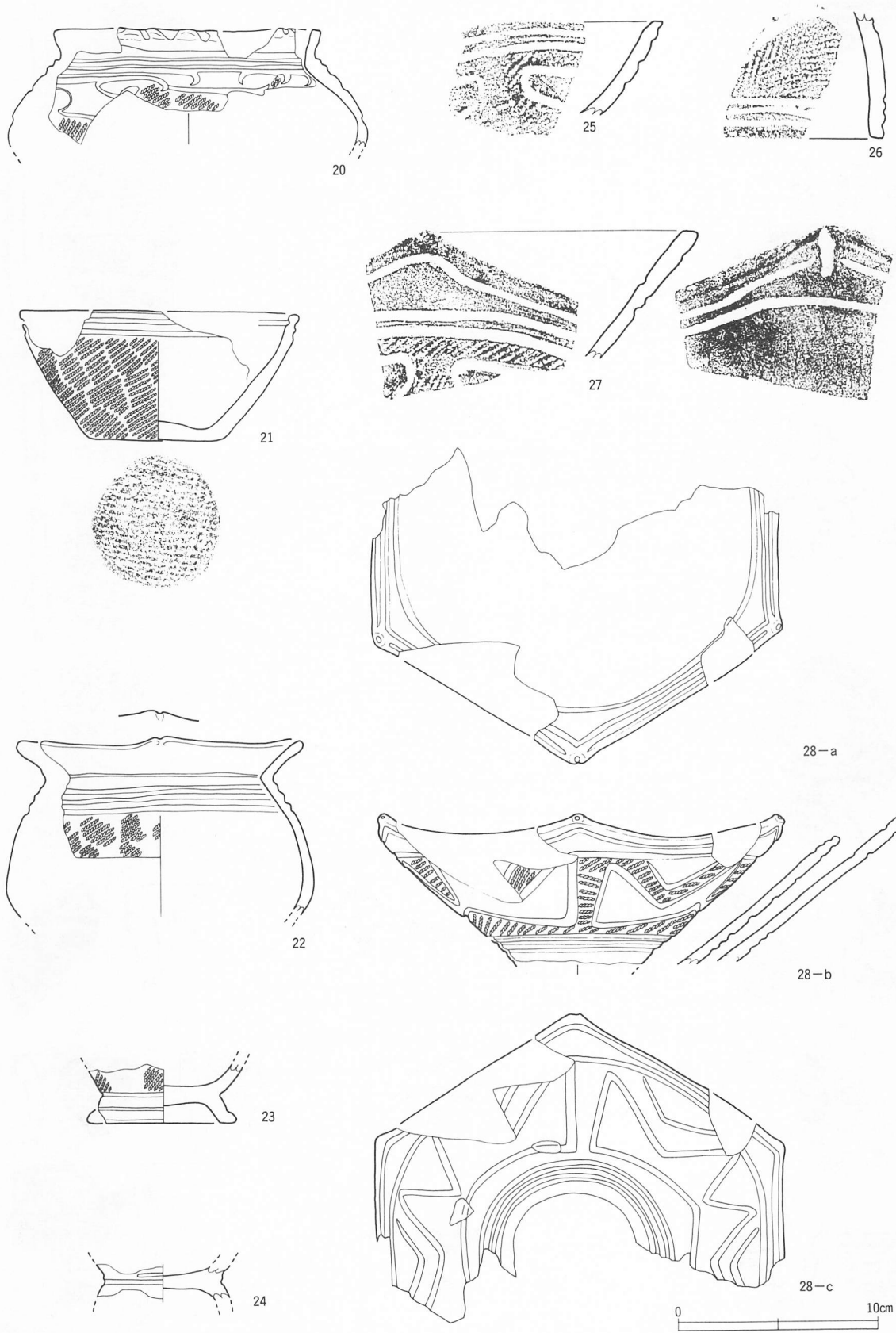
第22図 遺構外出土遺物：土器(2)



10・11 : S=1/3



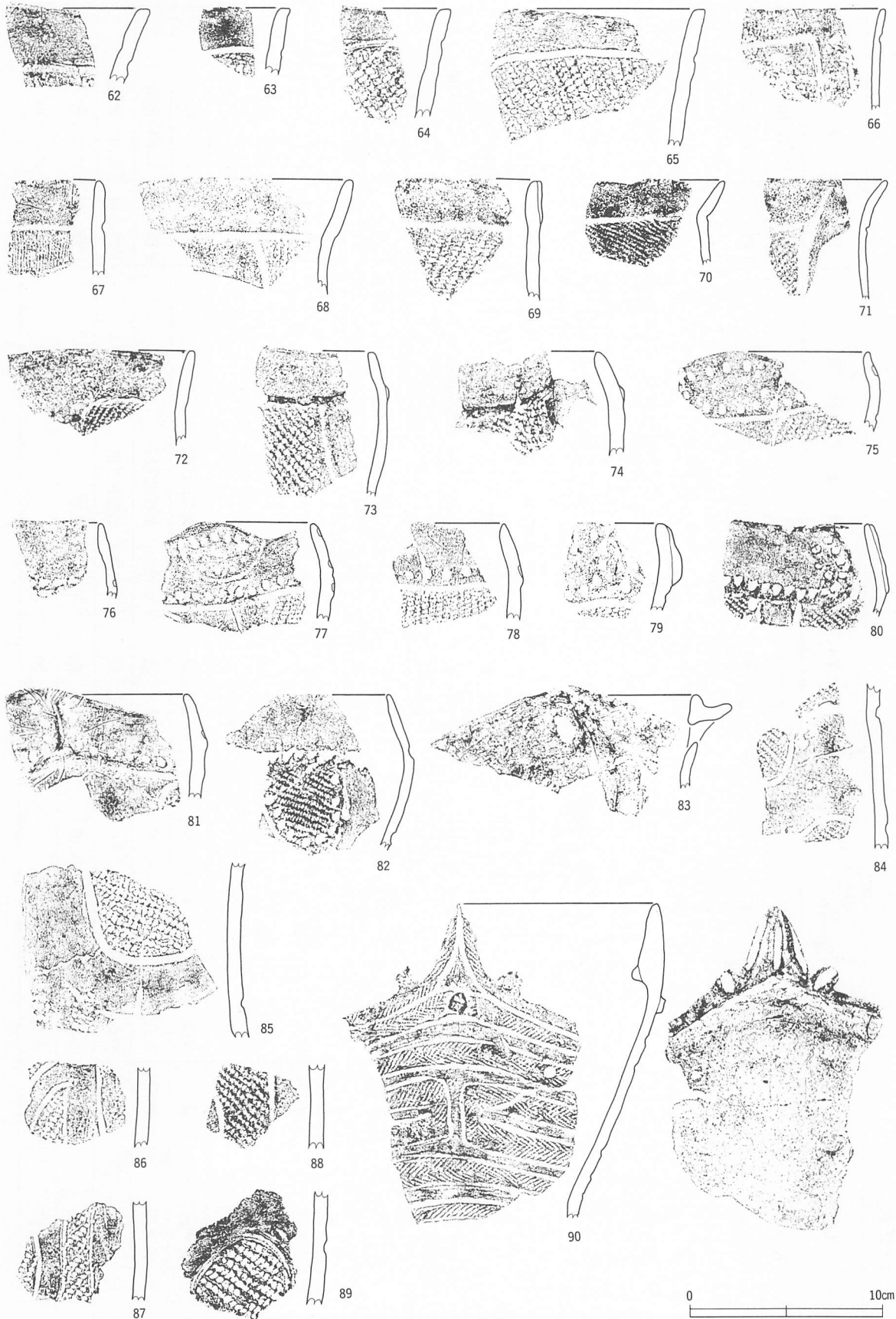
第23図 遺構外出土遺物：土器(3)



第24図 遺構外出土遺物：土器(4)



第25圖 遺構外出土遺物：土器(5)



第26図 遺構外出土遺物：土器(6)

表2 土器観察表

図版No	No	出土地点	層位	器種	大きさ (cm)		原形	方向	文様の特徴	分類	色調
					器高	口径					
19	1	RE01	埋土	小型鉢	—	(7.0)	—	無文?	V群1類	にぶい橙	
19	1	RD01	埋土	台付鉢	—	(6.0)	LR	地文のみ 平行沈線 台付	IV群	灰褐～にぶい黄褐	
19	1	RD08	埋土	深鉢	—	5.3	—	無文	V群3類	にぶい褐	
19	1	RD15	PotI	深鉢大	(32.8)	(22.6)	LR	4波状 穿孔 口縁部原体圧痕 他の条で織り止める。	II群1類	明赤褐	
19	2	RD15	埋土	深鉢	(5.5)	—	LRL	地文のみ	V群1類	橙	
20	1	RD23	埋土上位	ミニチュア	(3.3)	—	RL	平縁 沈線による文様	V群3類	にぶい黄橙～橙	
21	1	F4区	3a層	深鉢	(12.6)	(11.9)	RL	4波状 隆帯 渦文 懸垂文	II群2類a	にぶい黄橙	
21	2	G4区	2層	深鉢	(9.5)	—	RL	小波状 沈線区画による無文帯	II群2類c	にぶい褐	
21	3	G5区	3層	深鉢	(8.7)	20.0	R	平縁? 口縁部無文帯 沈線区画による無文帯	II群2類c	にぶい橙～褐灰	
21	4	G4・G5区	3層下位	深鉢	(12.5)	(16.0)	RL	平縁 口縁部無文帯 沈線区画による無文帯	II群2類c	にぶい黄褐	
21	5	G5区	3層下位	深鉢	(10.2)	13.7	LR	平縁 口縁部無文帯 沈線区画 隆帯貼付	II群2類c	赤～赤褐	
21	6	F5区	3層下位	深鉢大	(28.0)	26.0	L	平縁 口縁部無文帯 体部地文のみ 捺糸文	II群2類c	にぶい黄橙～黄橙	
22	7	G5区	3層下位	深鉢大	(24.5)	26.5	RRL	平縁 口縁部無文帯 体部地文のみ	II群2類c	にぶい黄橙	
22	8	F4区	3層	深鉢	(18.3)	—	LR	地文のみ	V群1類	橙	
22	9	H5区	埋土上位	深鉢	(19.5)	—	LRL	地文のみ	V群1類	橙～明赤褐	
23	10	F4区	1層	深鉢	8.0	(11.4)	LR	地文のみ 底部網代痕	V群2類	にぶい橙	
23	11	F4区	3層下位	深鉢大	(16.0)	—	LR	地文のみ 底部網代痕	V群2類	にぶい黄橙	
23	12	G5区	3層	深鉢	(5.2)	—	RL	地文のみ 底部張り出し	V群3類	にぶい黄橙	
23	13	G4区	不明	小型鉢	(4.0)	(5.0)	LR	平縁 地文のみ	V群3類	にぶい橙～にぶい褐	
23	14	F5区	3層	小型鉢	(3.5)	—	RL	地文のみ	V群3類	にぶい褐～にぶい橙	

図版No	出土地点	層位	器種	大きさ (cm)			原 体	方 向	文 様 の 特 徴	分 類	色 調
				器 高	口 径	広 径					
23	G 5 区	3 層	小型鉢	5.2	7.8	—	—	無文	V群 3 類	にぶい黄橙～浅黄橙	
23	G 4 区	1 層	小型鉢	(3.1)	—	3.6	LR	地文のみ	V群 3 類	黒褐～褐灰	
23	H 5 区	2 層	ミニチュア	(2.0)	—	3.3	—	—	V群 3 類	赤褐	
23	G 5 区	不明	把手?	(4.5)	(4.0)	(2.0)	—	沈線 穿孔 アスファルト付着	V群 4 類	橙	
23	F 5 区	不明	把手?	(2.8)	(3.6)	(1.1)	—	沈線 穿孔 アスファルト付着	V群 4 類	にぶい橙	
24	F 4・J 4 区	3 層	鉢	(5.2)	(13.5)	—	LR	平線 沈線 雲形文	IV群	黒褐～にぶい黄橙	
24	F 4 区	1 層	鉢	6.4	(14.0)	6.6	LR	平線 横位平行沈線 底部網代底	IV群	にぶい赤褐	
24	G 4 区	1 層	鉢	(8.4)	(14.6)	—	LR	平線 平行沈線 外面に朱が付着	VI群	明赤褐	
24	G 5 区	3 層	台付鉢?	(3.1)	—	(7.4)	LR	地文のみ 平行沈線 台付	IV群	にぶい褐～橙	
24	G 5 区	1 層	台付鉢?	(1.6)	—	(6.0)	不明	台付鉢? 平行線	IV群	明赤褐	
24	G 4 区	2 層	高坏	(7.5)	(22.0)	—	LR	六単位 波状口縁 平行沈線 幾何学的文様	VI群	褐灰～灰黄褐	

(2) 石器 (第 27・28 図・写真図版 19)

石器として取り上げた資料は 20 点である。内訳は、石鏃 3 点、石錐 1 点、石匙 3 点、削搔器 2 点、磨製石斧 4 点、特殊磨石 1 点、凹石 3 点・石皿 2 点・石棒 1 点である。石器の計測値と石質については観察表を参照されたい。

石鏃 (1～3)

3 点出土している。両面から加工を施して作られている。形態を分類すると、凸基有茎鏃・尖基鏃である。

石錐 (4)

1 点出土している。明瞭な摘みを有するタイプで、両面加工が施されている。

石匙 (5～7)

3 点出土している。縦型 1 点、横型 2 点で、1 側縁に片面ないし両面から刃部加工が施されている。

削搔器 (8・9)

定形化していない不定形な石器で削る搔くの用途が考えられるものである。2 点出土している。縦型剥片の縁辺に片面から細部加工を施し、刃部を形成している。

磨製石斧 (10～12)

研磨により石斧の形状に整えたものである。3 点出土している。いずれも破損品で、12 は端部を敲打石に転用したものである。

凹石 (13・14)

円形の礫の 2 面と 1 側面に円錐状の凹みをもつものである。2 点出土している。

特殊磨石 (15)

断面三角形を呈する礫の側縁部を使用したものである。3 側縁に使用痕がみとめられ、使用側縁はざらざらした質感で、敲打によって生じたと考えられる潰れもみられる。擦る・敲くの用途に使われたものである。

石皿 (16・17)

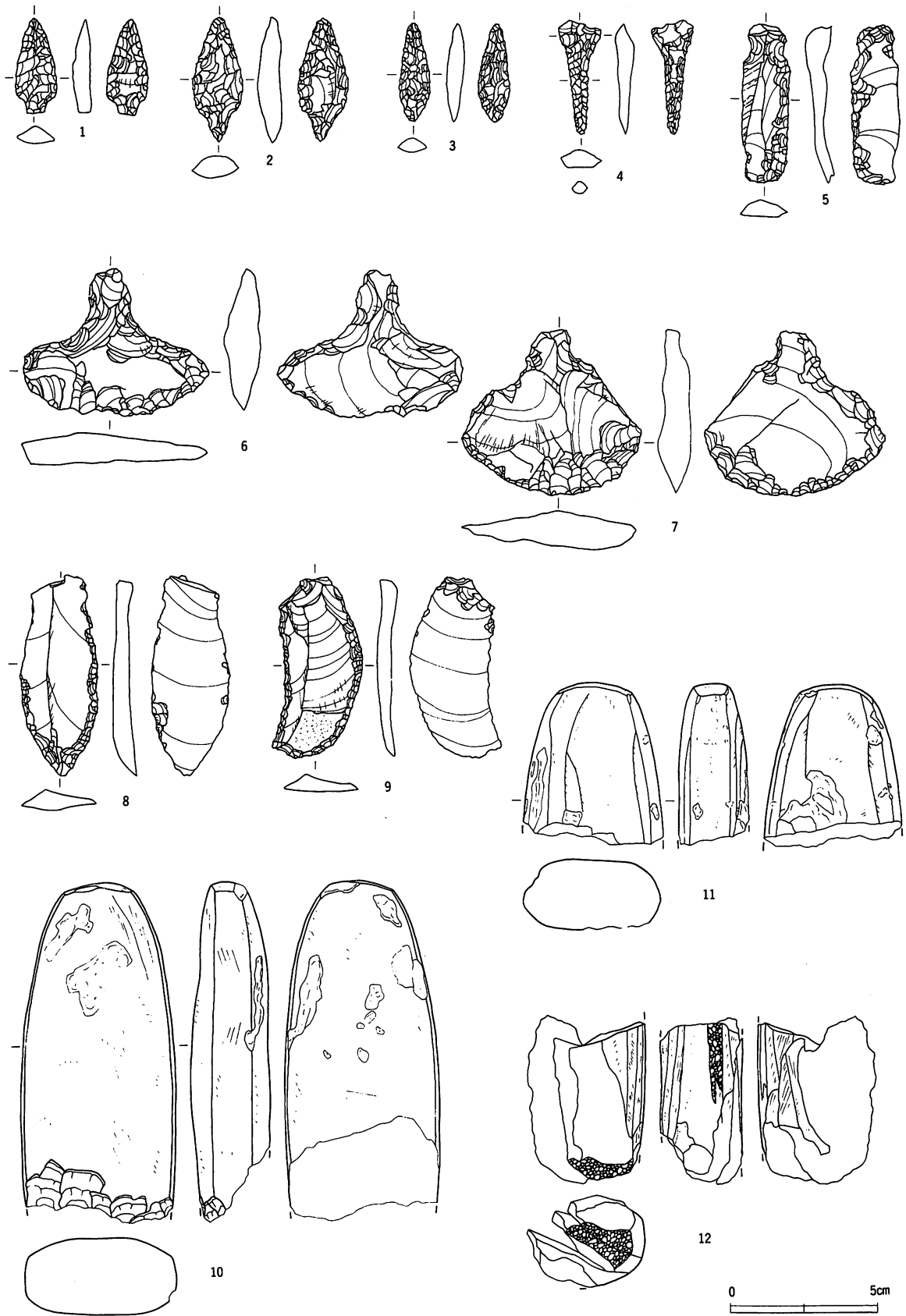
2 点出土している。16 は盤状の礫を用い使用部が浅い窪みをもっている。17 は大型の礫を用いたもので、使用面が浅い窪みをもつ。縁はみとめられるものの脚のつくりだしはない。

石棒 (18)

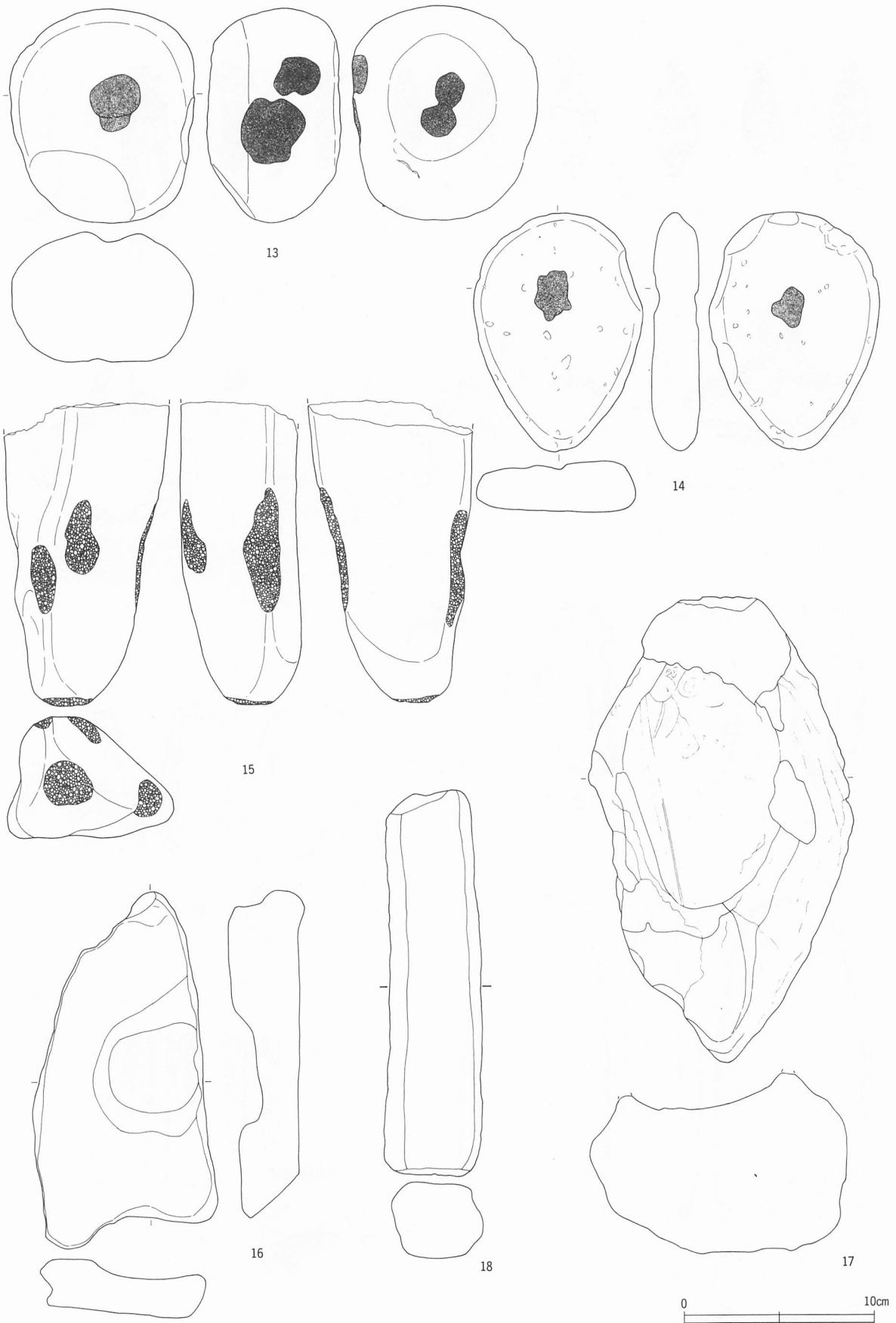
1 点出土している。横断面形は隅丸方形状を呈する。石質はデイスaitである。

表 3 石器観察表

図版No	No	出土地点	層位	器種	大きさ(cm)			重量(g)	欠損状況		特徴・備考	石質	産地・時代
					長さ	幅	厚さ		完形	一部			
19	2	RD02	埋土	凹石	8.3	7.1	3.5	320.0	○		両面に浅い窪み	凝灰岩	奥羽山地、中新統
20	4	RD25	埋土	磨製石斧	12.4	4.3	2.6	221.8	○			流紋岩質凝灰岩	奥羽山地、中新統
27	1	J3 区	3 層	石鏃	(3.2)	1.3	0.6	2.7		○	凸基有茎鏃 基部欠損	チャート	北上山地、中生界
27	2	J4 区	2 層	石鏃	4.2	1.7	0.8	4.8	○		凸基有茎鏃	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地、中新統
27	3	トレンチ 7	1 層	石鏃	3.3	1.0	0.5	1.8	○		尖基鏃	凝灰質泥岩	奥羽山地、中新統
27	4	トレンチ 3	1 層	石錐	3.9	1.5	0.6	2.0	○			珪質泥岩	奥羽山地、中新統
27	5	J3・K3 区	1 層	石匙	5.4	1.6	1.0	6.9	○		縦型 1 側面に両面からの刃部加工	珪質泥岩	奥羽山地、中新統
27	6	トレンチ 1	1 層	石匙	5.0	6.4	1.3	26.0	○		横型 1 側面に片面からの刃部加工	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地、中新統
27	7	J3 区	3 層	石匙	5.6	6.2	1.2	33.1	○		横型 1 側面に両面からの刃部加工	珪質泥岩	奥羽山地、中新統
27	8	F5・G5 区	1 層	削搔器	5.8	2.8	0.8	11.5	○		周縁に片面からの刃部加工	粘板岩	北上山地、中生界
27	9	G5 区	1～2 層	削搔器	6.2	3.2	0.7	12.6	○		周縁に片面からの刃部加工	粘板岩	北上山地、中生界
27	10	J4 区トレンチ	不明	磨製石斧	(11.5)	5.3	2.7	302.6		○	刃部欠損	凝灰角礫岩	北上山地、中生界
27	11	I5 区	不明	磨製石斧	(5.5)	(4.7)	(2.4)	104.4		○	基部	凝灰角礫岩	北上山地、中生界
27	12	G4・F4 区	1 層	磨製石斧	(5.9)	(4.6)	(0.9)	15.6		○	敲打痕	凝灰質粘板岩	北上山地、中生界
28	13	J4 区	3 層	凹石	11.3	9.8	7.1	1035.0	○		両面 1 側面に凹み	普通輝石紫蘇輝石安山岩	奥羽山地、中新統
28	14	J4 区	1 層	凹石	12.6	9.0	2.6	365.0	○		両面に凹み	普通輝石紫蘇輝石安山岩	奥羽山地、中新統
28	15	G4 区	1 層	特殊磨石	(16.0)	8.7	6.4	1142.0		○	3 側縁使用 断面三角形 端部に敲打	普通輝石紫蘇輝石安山岩	奥羽山地、中新統
28	16	J4 区	3 層	石皿	18.8	9.8	4.1	710.0	○			珪質細粒凝灰岩	奥羽山地、中新統
28	17	表探	0 層	石皿	49.2	28.2	19.2	25500.0	○			デイスait	奥羽山地、中新統
28	18	J3 区	1 層	石棒	40.9	10.4	8.2	6070.0	○			デイスait	奥羽山地、中新統



第27圖 遺構外出土遺物：石器(1)



第28図 遺構外出土遺物：石器(2)

VII. 考察とまとめ

遺跡全体が畑地造成の際に著しく削られ、攪乱を受けている。したがって遺構の遺存状態はあまり良くなく、遺物量も僅少である。調査区は遺跡全体の南側の縁の部分に沿うように設定されたものである。

1. 遺構

(1) 竪穴状遺構

2棟検出されているが、いずれも炉跡・柱配置が明瞭でない。貼床の痕跡も確認されたが、ここでは竪穴状遺構とした。出土遺物全体では縄文時代中期に属する遺物の占める比率が高いようである。

(2) 土坑類

土坑類は定形的なものそうでないものの二つに分類できる。ここでは調査区の東側でまとめて検出された定形的な土坑の一群について述べる。平面形は円形を呈し、断面形はフラスコ状を呈するものと推定されるもので13基ある。削平が著しく、RD 29の例をみれば存在すらしない土坑も無いとはいえない。残存する規模は、径90cm～140cm、深さは50cm～90cmほどである。いわゆるフラスコ状土坑といわれるこの種の土坑としては小型の部類と考えられるが、特徴としていずれも底部が平坦であり、副穴や溝状の施設をもたないことがあげられる。このことは土坑の規模（小さいこと）と係わることであろうか。時期は、出土遺物から縄文時代中期以降と思われる。

(3) 陥し穴

溝状の陥し穴が1基だけ検出されている。この種の陥し穴は、複数並んで構築されるものであり、調査区北側へ連続してつくられているものと推定される。出土遺物から時期は縄文時代中期以降と推定されるが、狩猟の場として使われていた時期もあったことになる。

2. 遺物

(1) 土器

土器はコンテナ(大)で5箱出土している。時期的には縄文時代前期以降晩期、弥生時代までのものが出土している。量的には中期に属するものが多く、とくに末葉のものが多いようである。遺構との関係を見ると、遺構外の出土遺物ではF 4・5区にまとめて出土しているが沢跡からの出土であり、流れ込んだもので原位置は留めていないものとする。石器類の出土状況についても同様である。

(2) 石器

石器は点数が少ないが、これは先述した遺跡の現況に係わる問題であろう。原石の産出地は北上山地産のものと奥羽山地産のものがあるが、器種により石質を選択しているようである。

(3) 炭化材

遺構内から出土した炭化材はすべて樺であるとの鑑定結果を得ている。

3. まとめ

今回の調査で、目名市II遺跡は縄文時代前期以降、弥生時代にいたる複合遺跡であることが明らかになった。フラスコ状土坑群がまとめて分布することや旧地形から考えて集落の中心は調査区北側の平坦面にあるものと推定される。出土遺物では縄文時代中期に属する遺物の占める比率が高いようである。その他に縄文時代前期～晩期、弥生時代までの遺物が出土していることから、それぞれの時期における集落の存在が予想されるが、いずれの時期においても今回の調査区の北側の平坦面に集落の中心があるものと思われる。

写 真 图 版

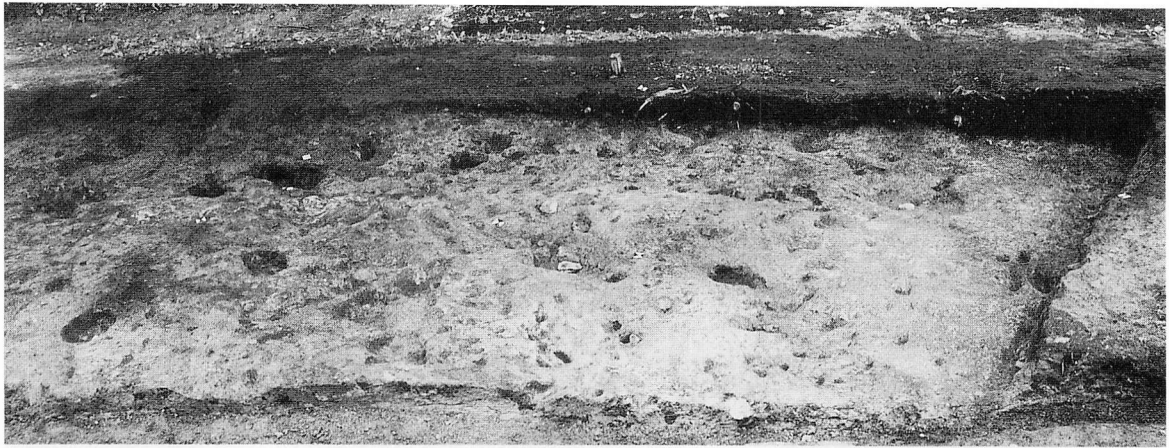


遺跡遠景(北東から)



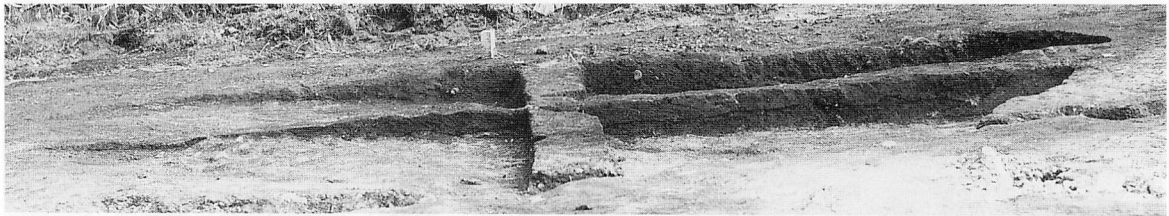
調査区東側土坑群(東から)

写真図版1 遺跡全景・調査区東側土坑群



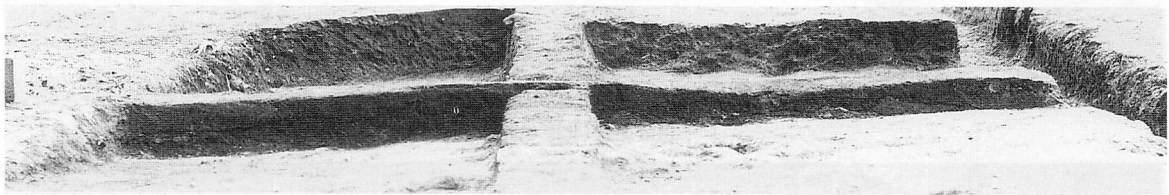
RE01

平面



RE01

断面



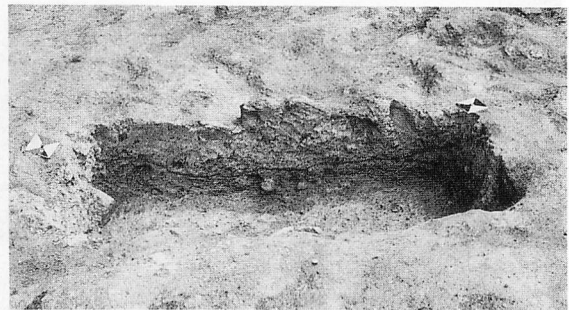
RE01

断面



炉 平面

RE01竖穴状遺構



炉 断面



平面

RE02竖穴状遺構

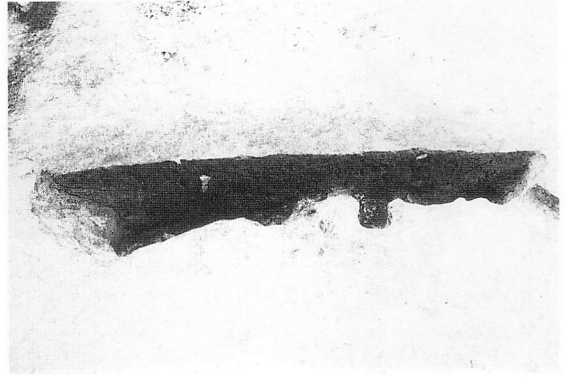


断面

写真図版 2 R E 01・02竖穴状遺構

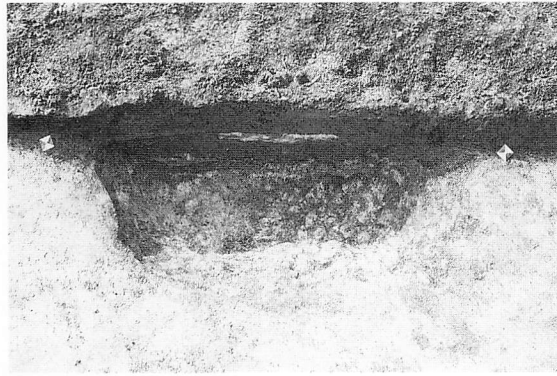


平面

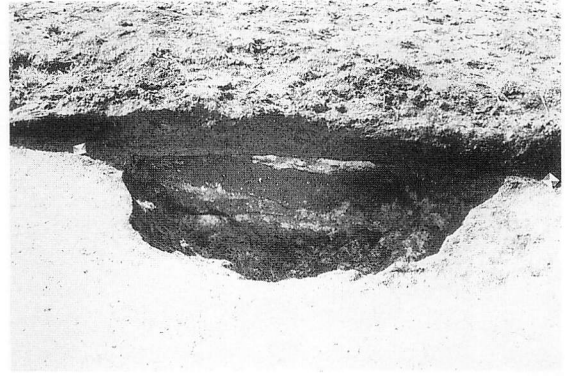


断面

RD01 · RD02

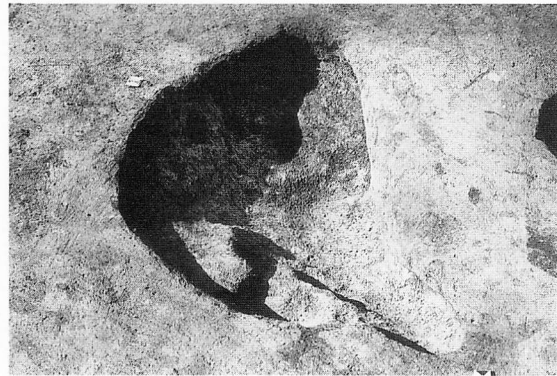


平面

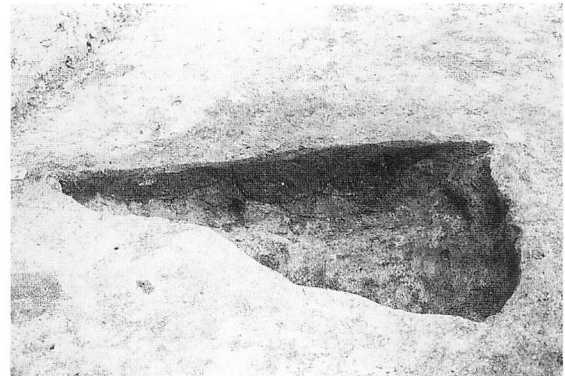


断面

RD03

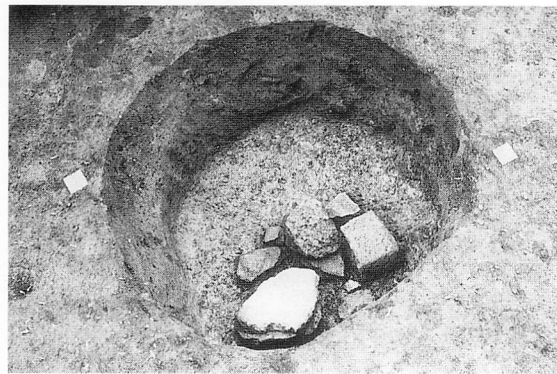


平面

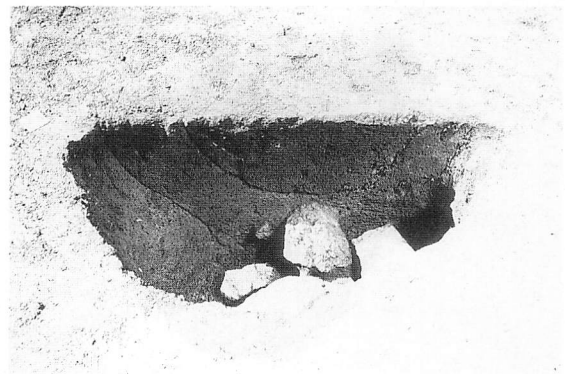


断面

RD04



平面



断面

RD05

写真图版3 RD01 · 02 · 03 · 04 · 05土坑

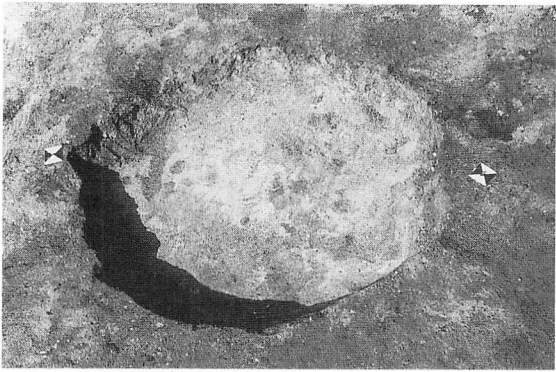


平面

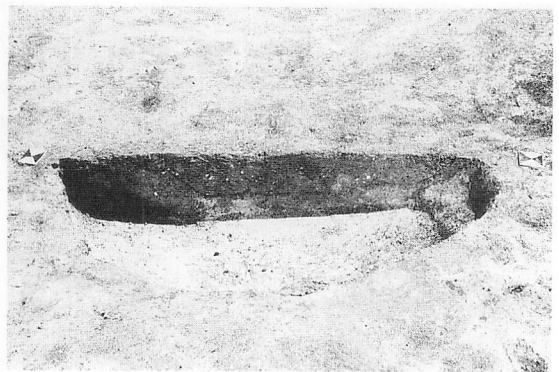


断面

RD06



平面

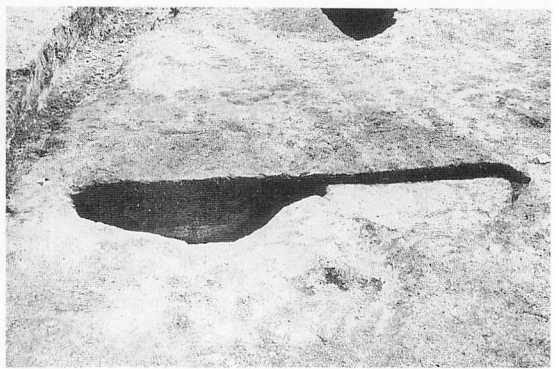


断面

RD07

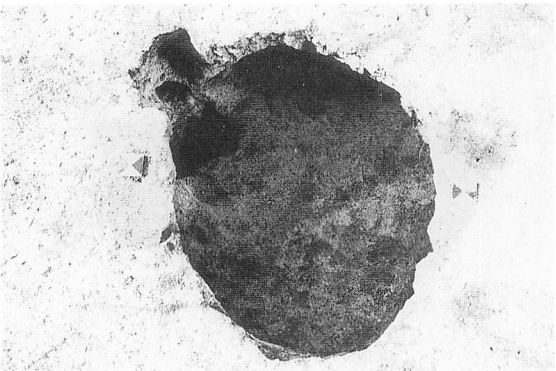


平面

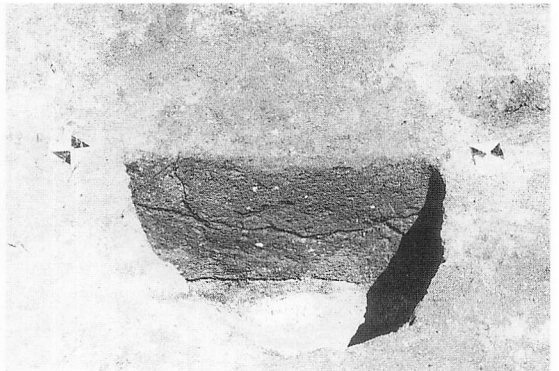


断面

RD08 · 09



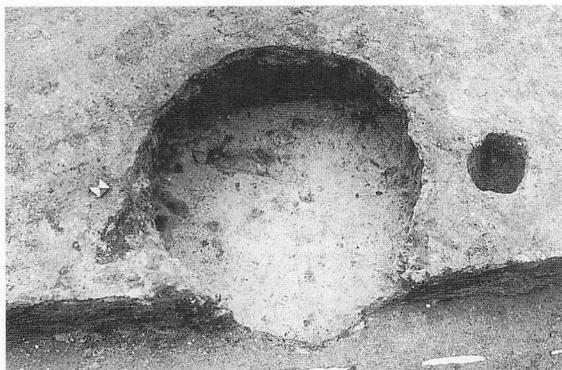
平面



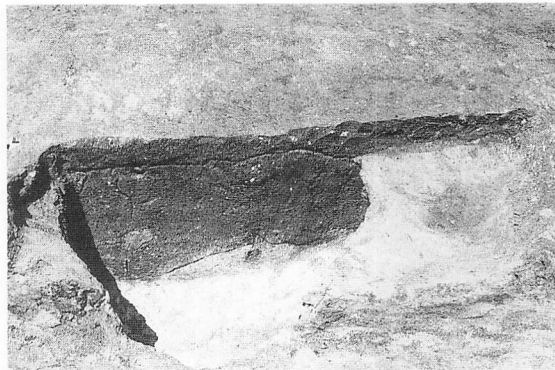
断面

RD10

写真図版4 RD06 · 07 · 08 · 09 · 10土坑

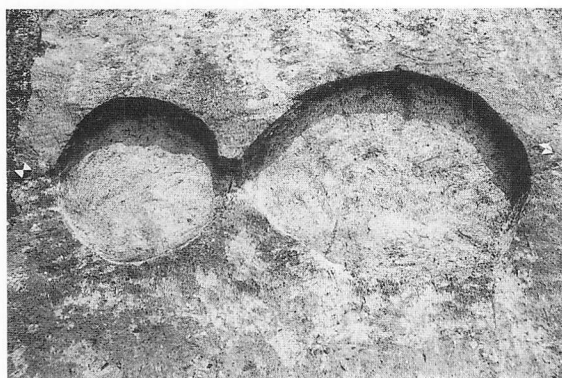


平面

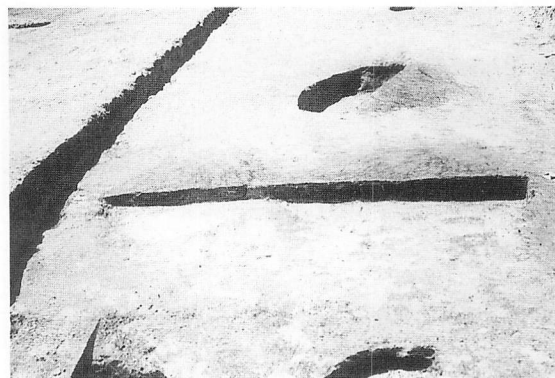


断面

RD11



平面

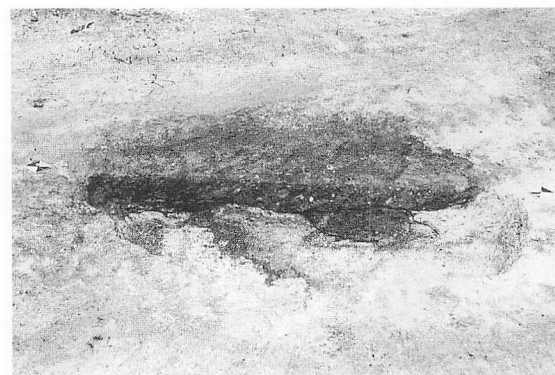


断面

RD12・13



平面



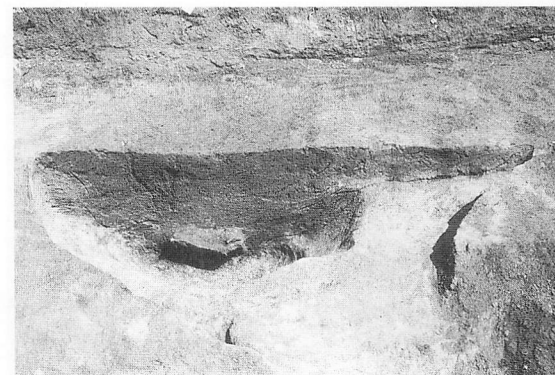
断面

RD14



RD15・17

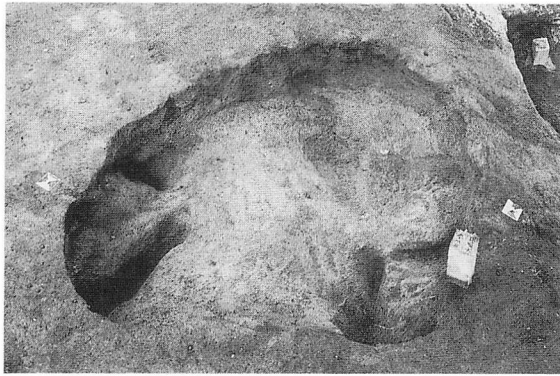
平面



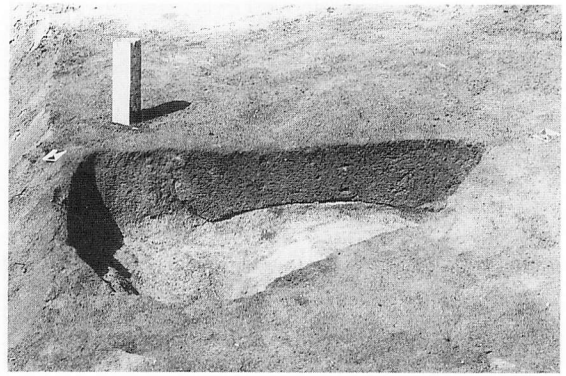
RD15

断面

写真図版5 RD11・12・13・14・15・17土坑

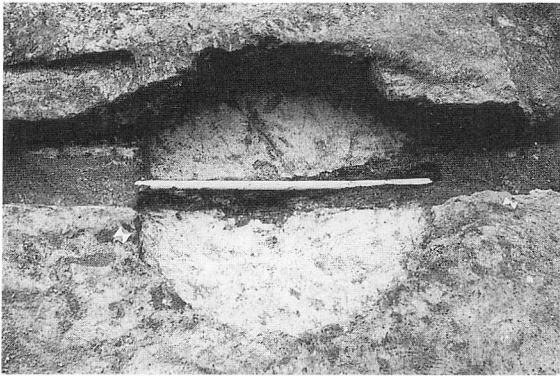


平面

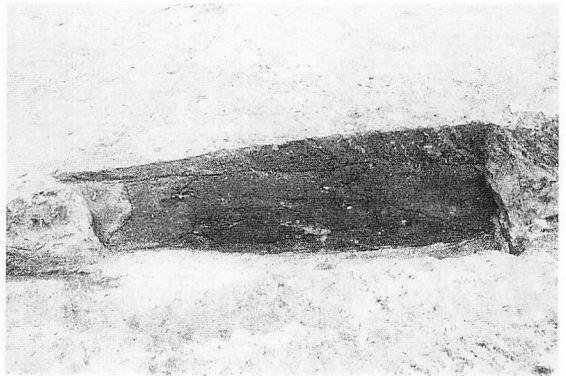


RD16

断面

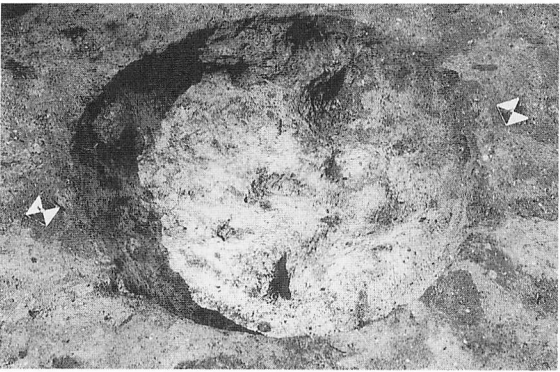


平面

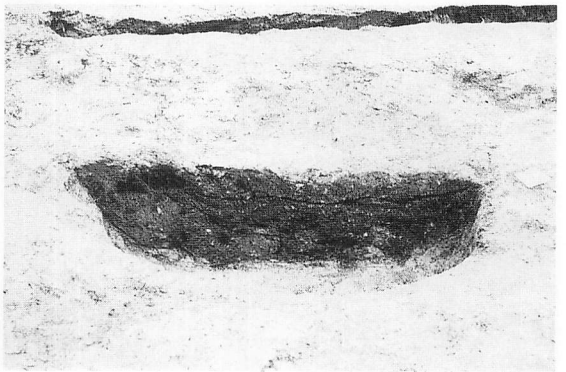


RD18

断面



平面



RD19

断面



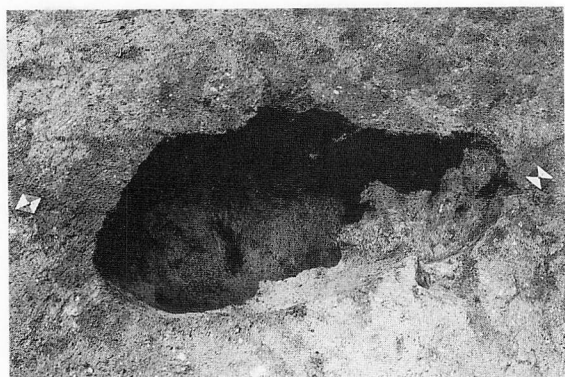
平面



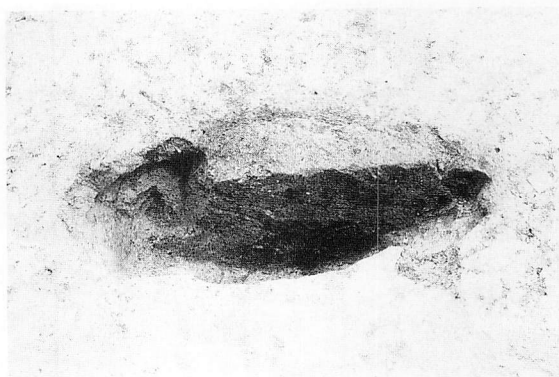
RD20

断面

写真図版 6 R D 16・18・19・20土坑

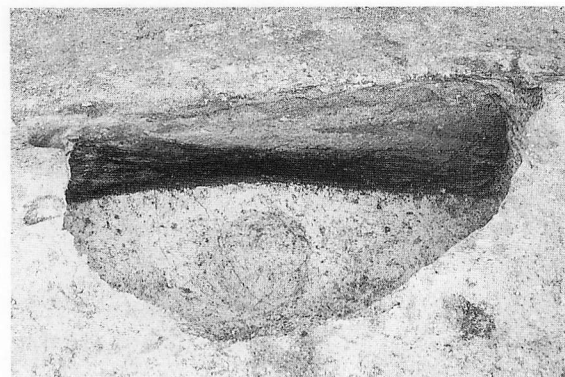


平面

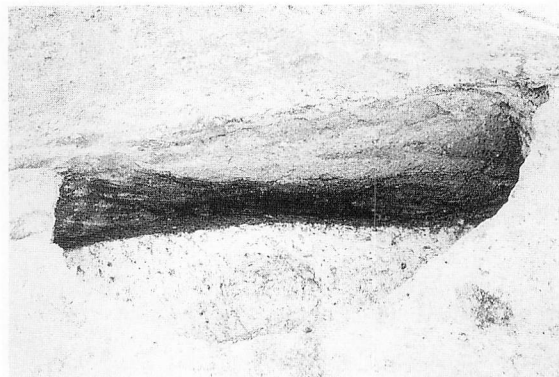


断面

RD21

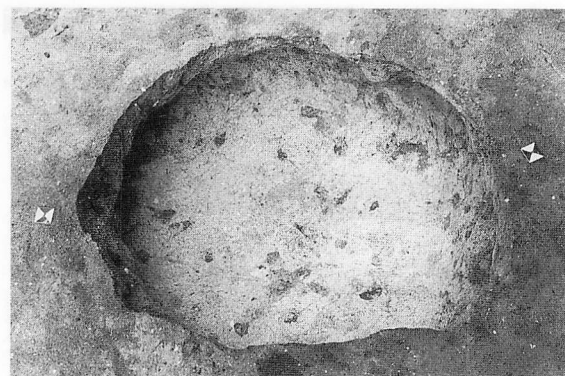


平面

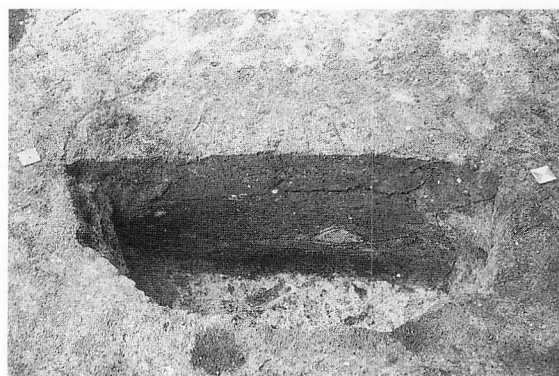


断面

RD22



平面

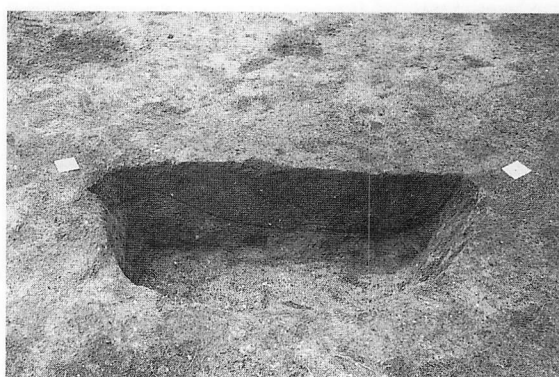


断面

RD23



平面



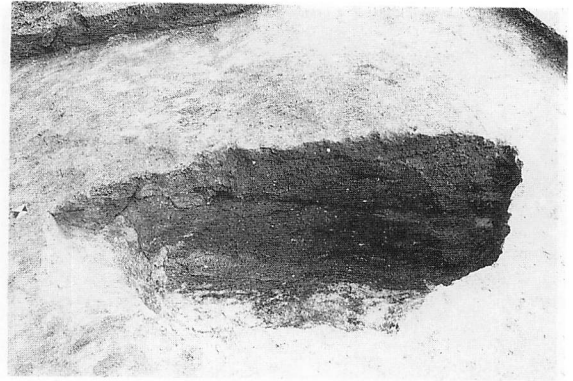
断面

RD24

写真図版7 R D 21・22・23・24土坑

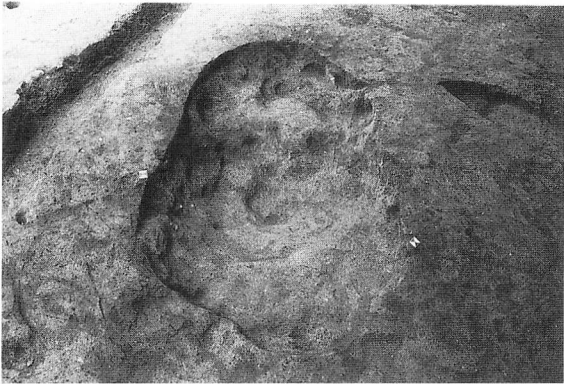


平面

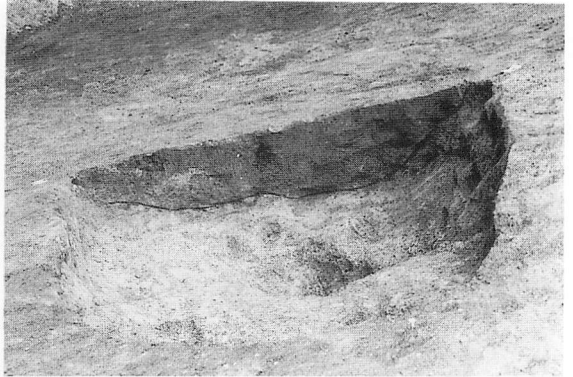


RD25

断面



平面

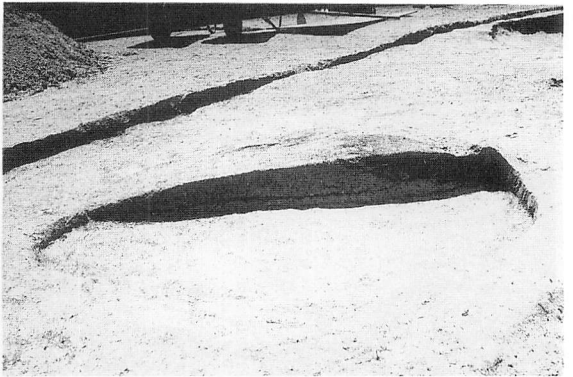


RD26

断面

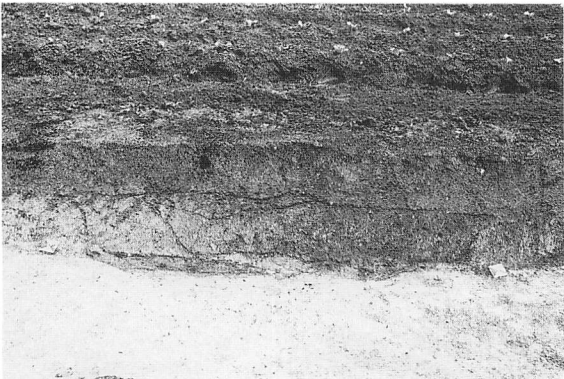


平面



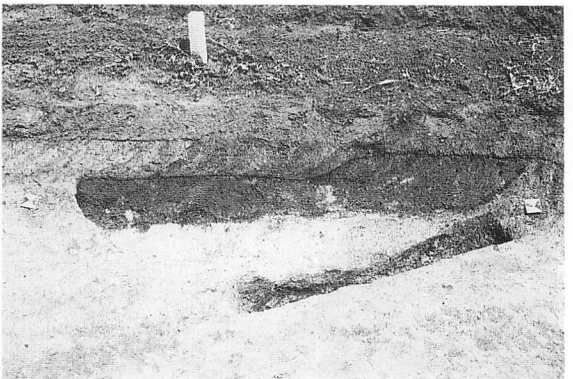
RD27

断面



RD28

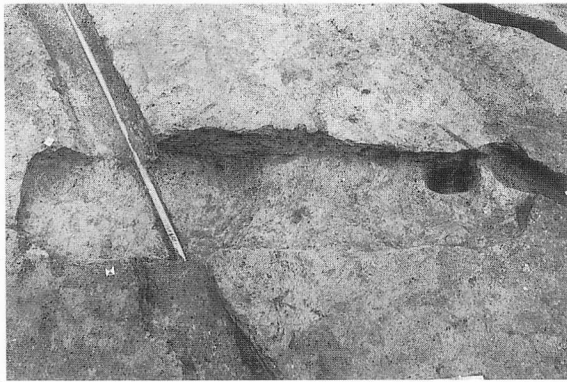
平·断面



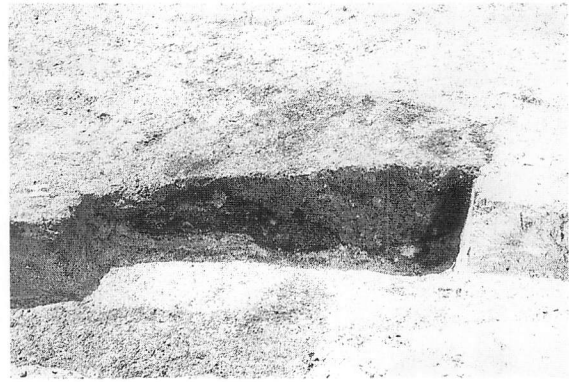
RD29

平·断面

写真図版 8 RD 25・26・27・28・29土坑

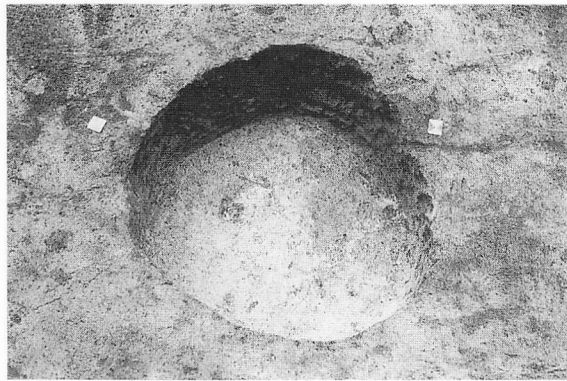


平面

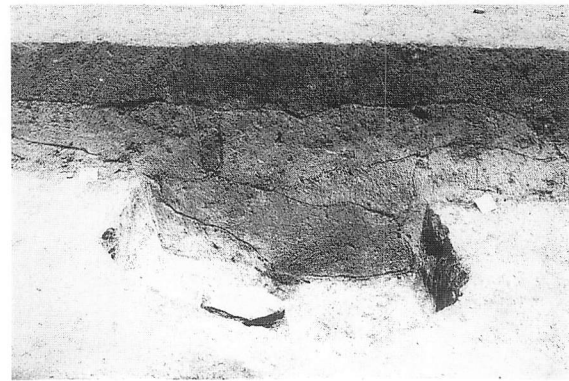


RD30

断面

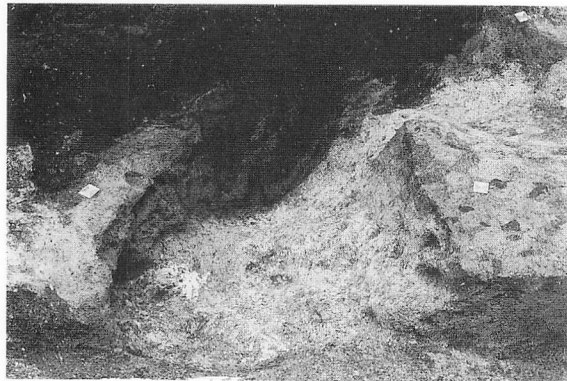


平面

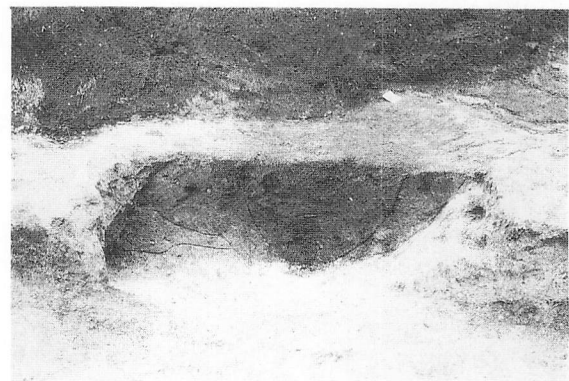


RD32

断面

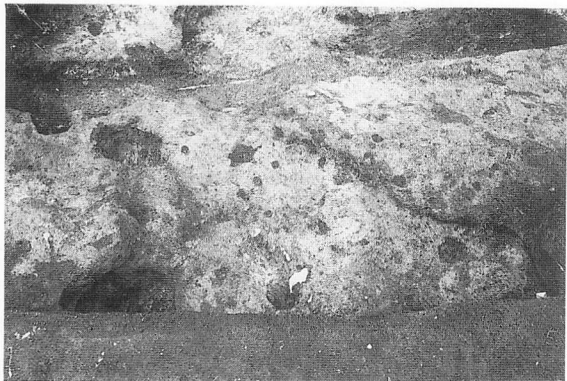


平面



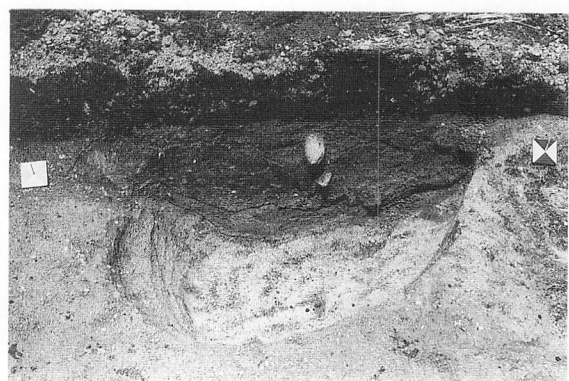
RD33

断面



RD34

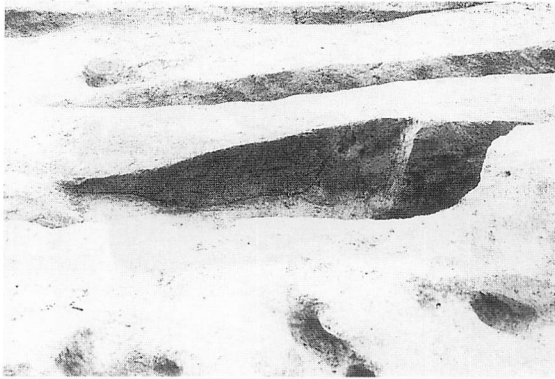
平面



RD35

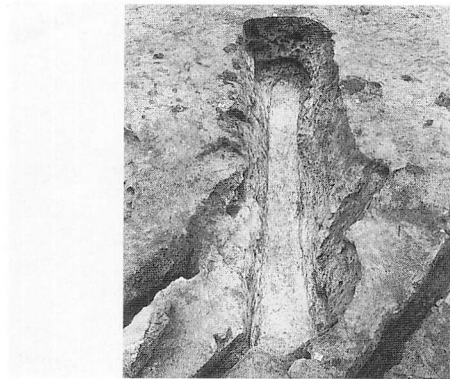
平·断面

写真図版9 R D 30・32・33・34・35土坑



RD36

断面



RD31

平面



平面

RF01

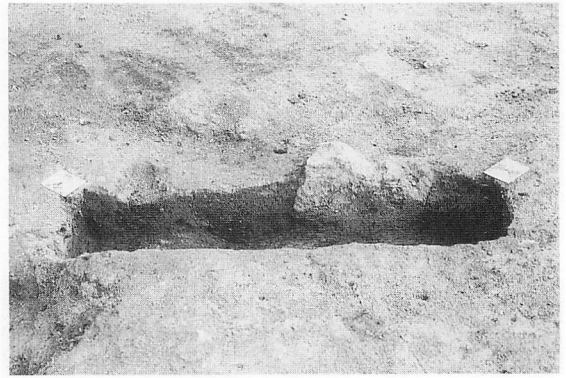


断面

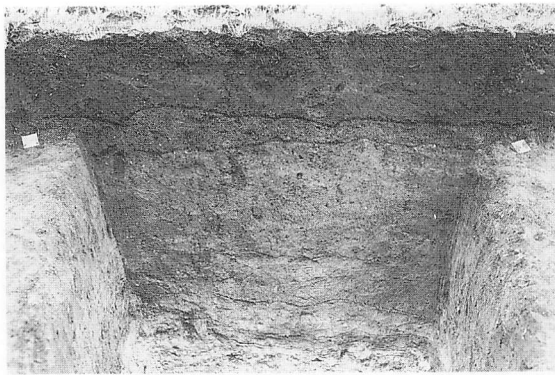


平面

RF02



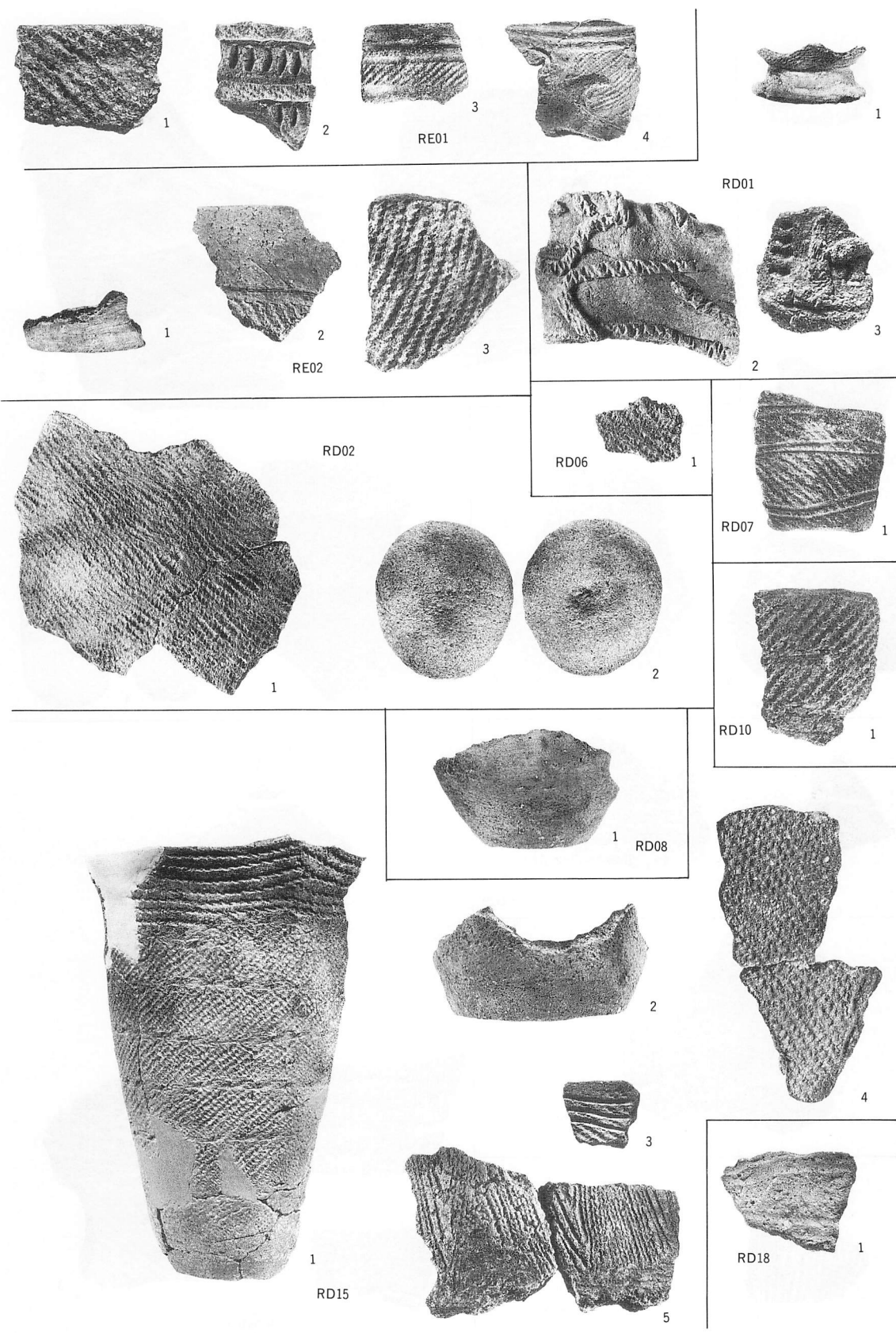
断面



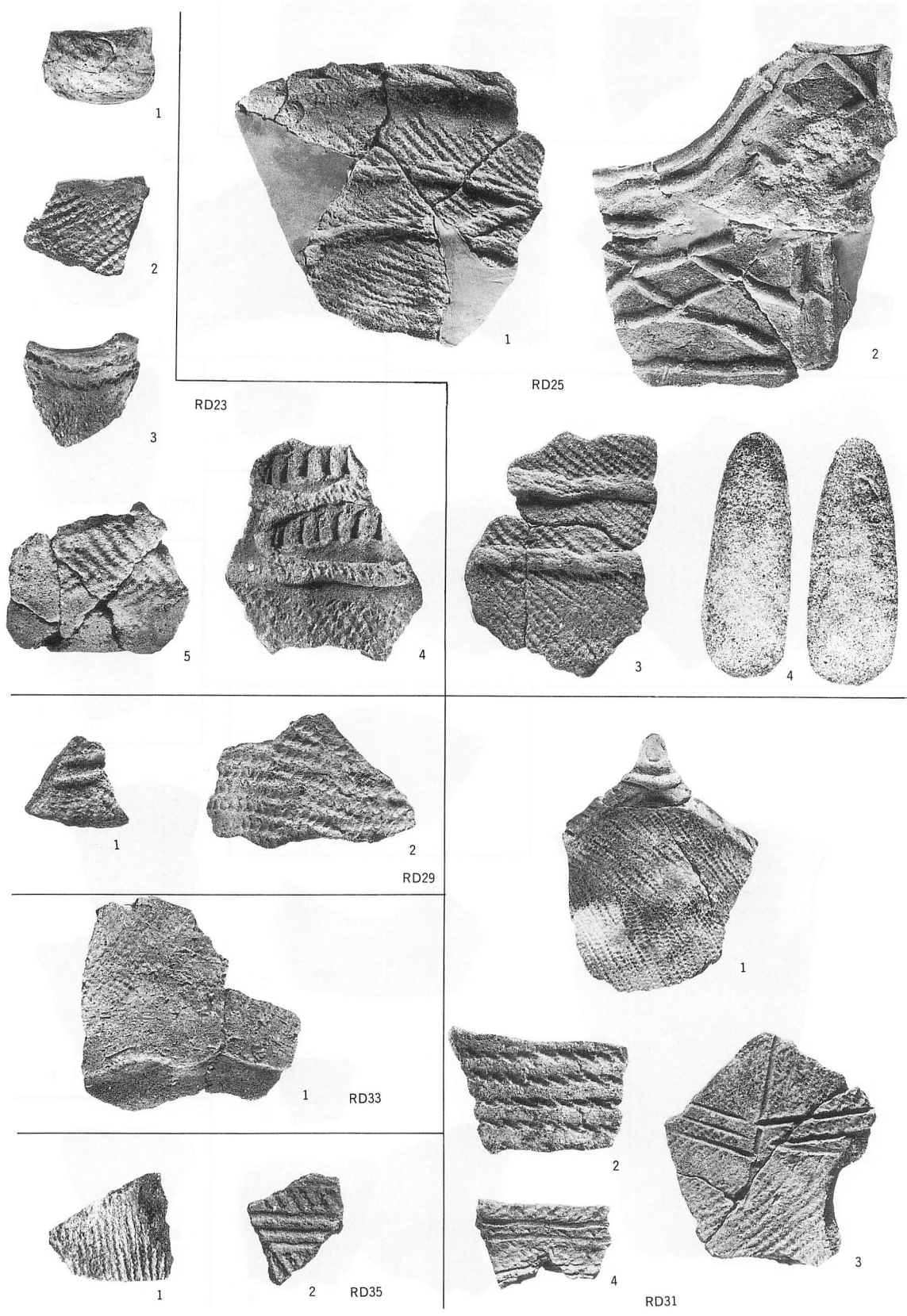
基本土層



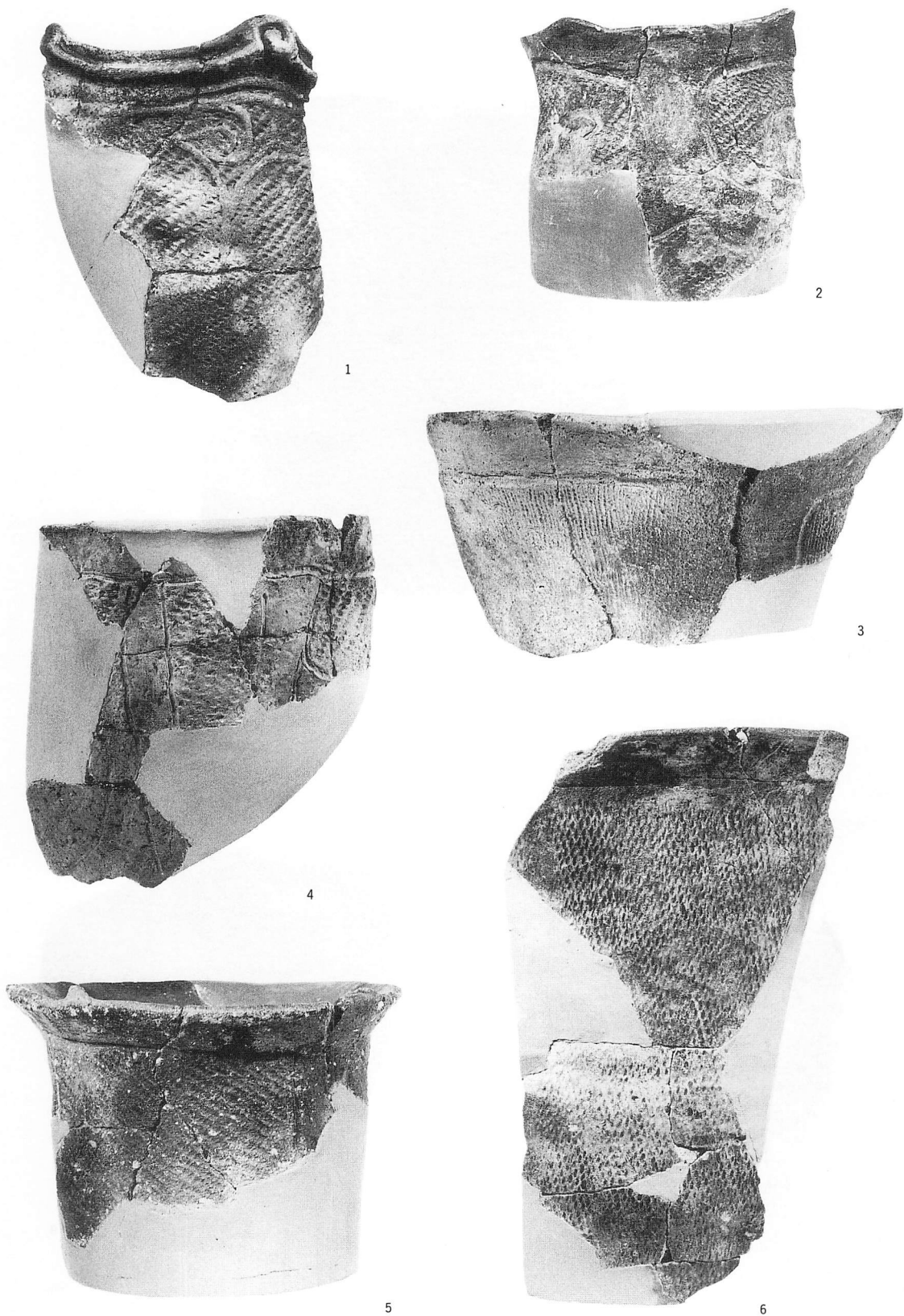
写真図版10 RD36土坑・RD31陥し穴・RF01・02焼土遺構・基本土層



写真図版11 遺構内出土遺物(1)

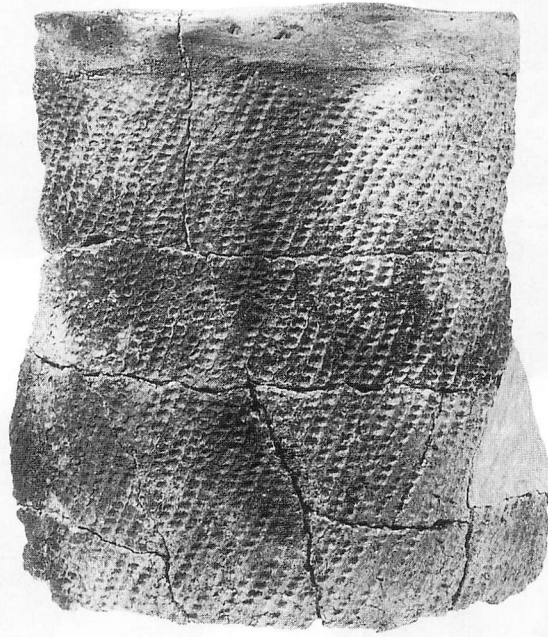


写真図版12 遺構内出土遺物(2)

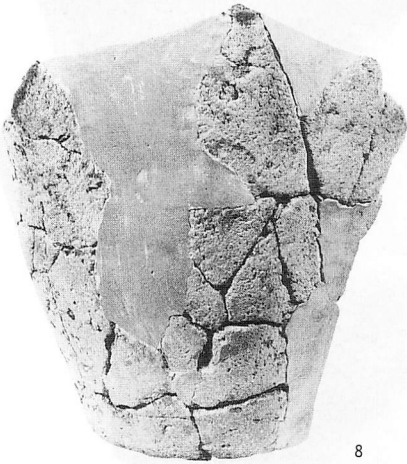


S=1/2
6 : S=1/3

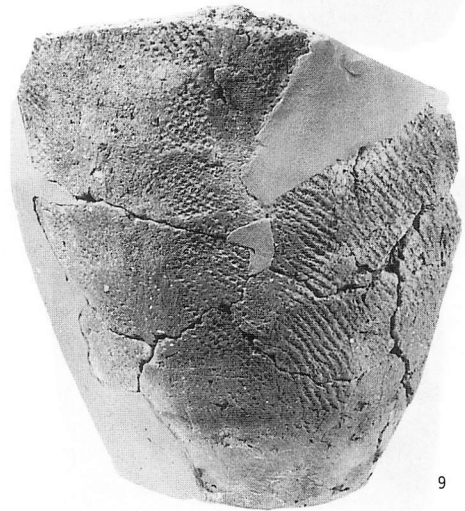
写真図版13 遺構外出土遺物：土器(1)



7



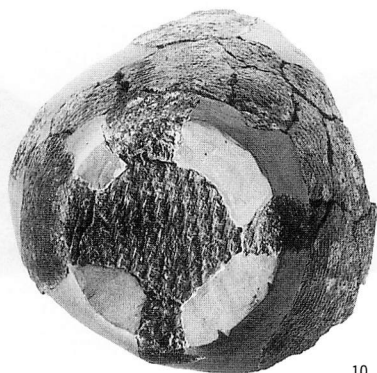
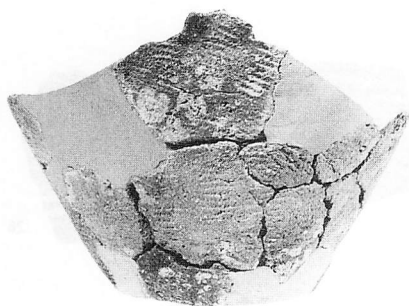
8



9

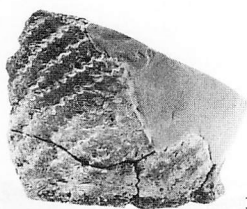
S=1/2

写真図版14 遺構外出土遺物：土器(2)



10

11



12

13



18



14

15



16



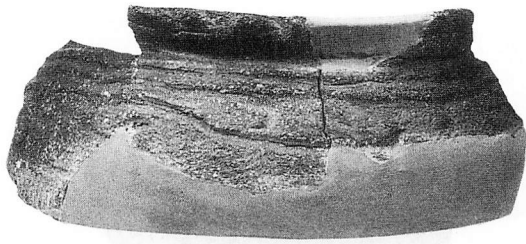
17



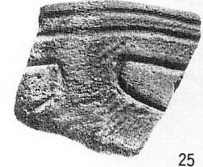
19

10・11 : S=1/3
S=1/2

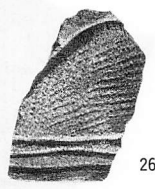
写真図版15 遺構外出土遺物：土器(3)



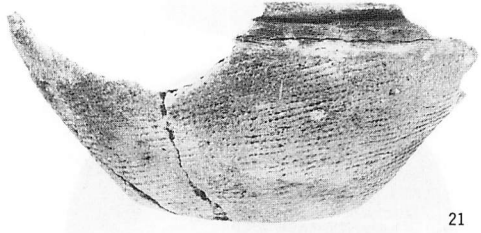
20



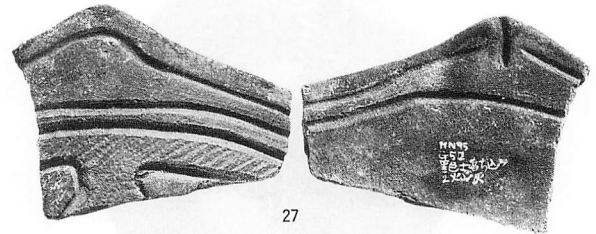
25



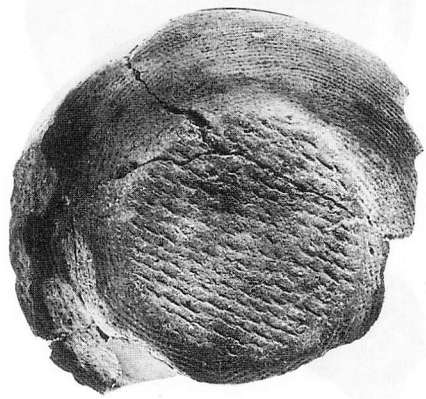
26



21



27

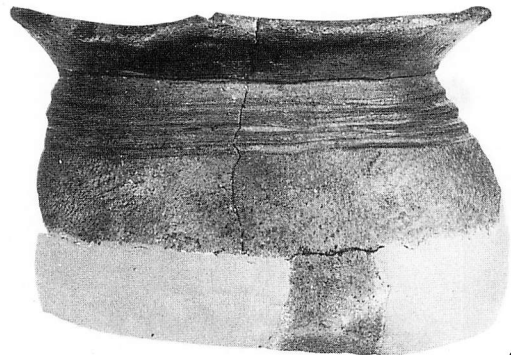


22

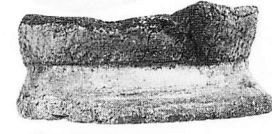
25~27 : S=1/3



28



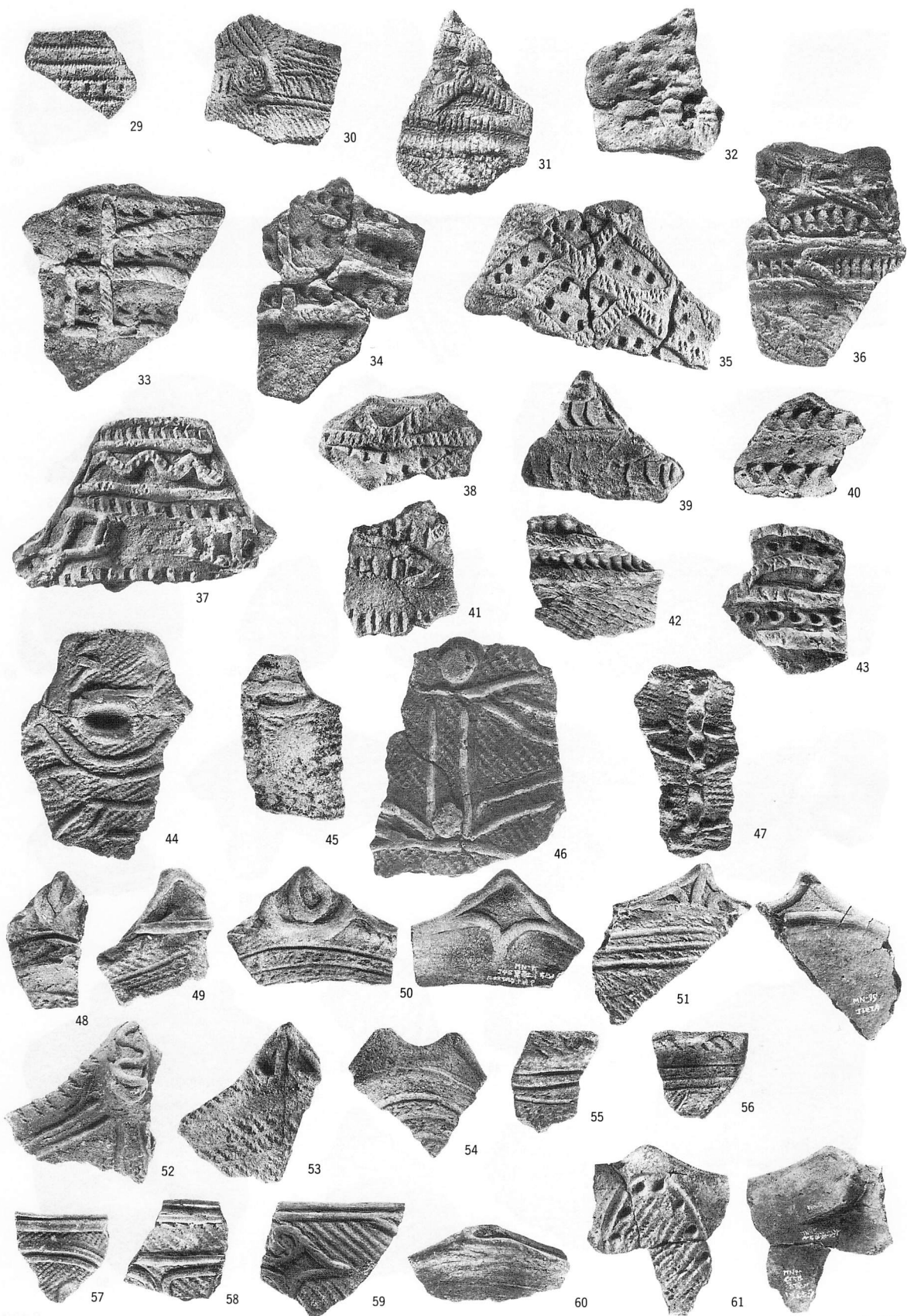
23



24

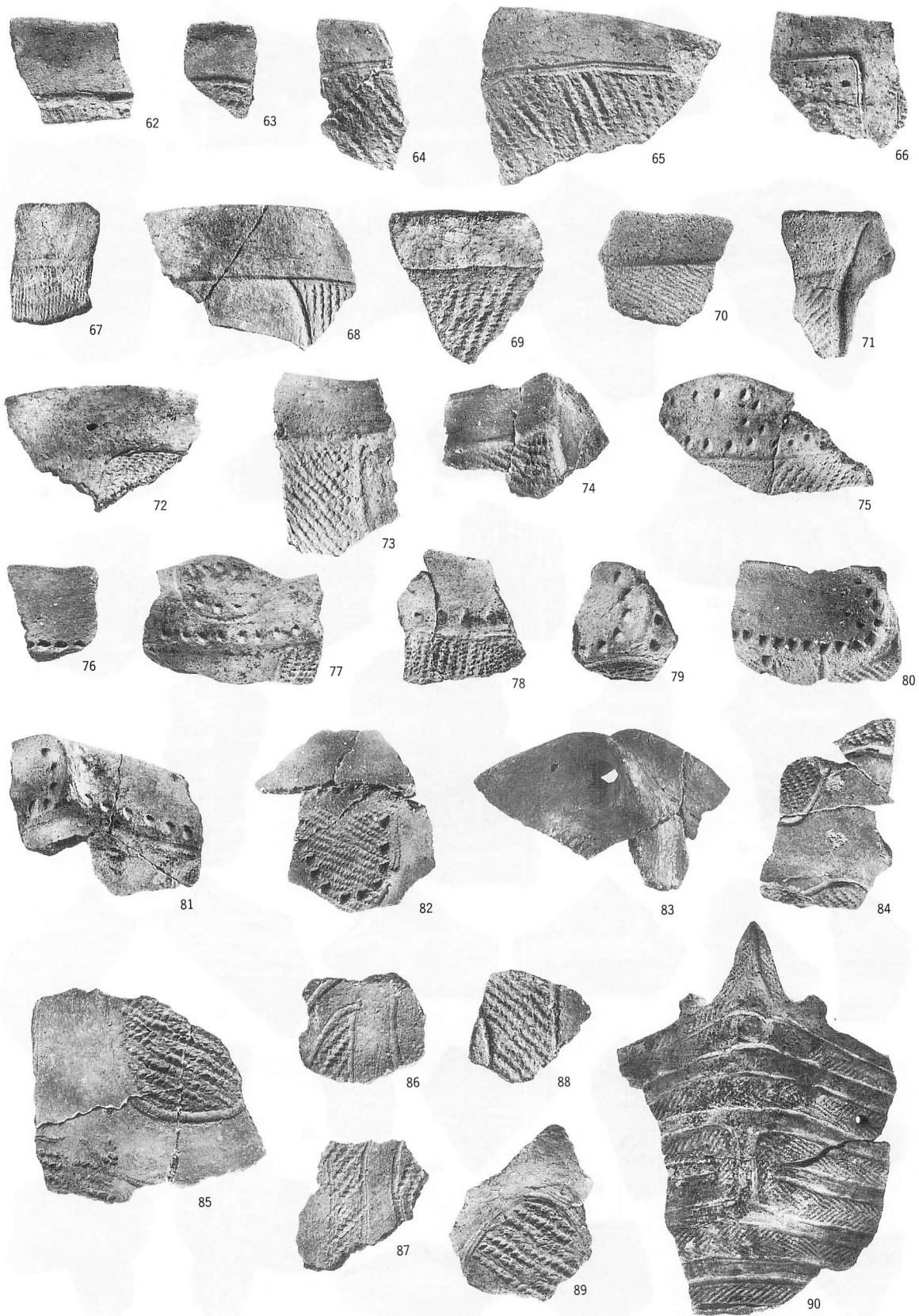
S=1/2

写真図版16 遺構外出土遺物：土器(4)



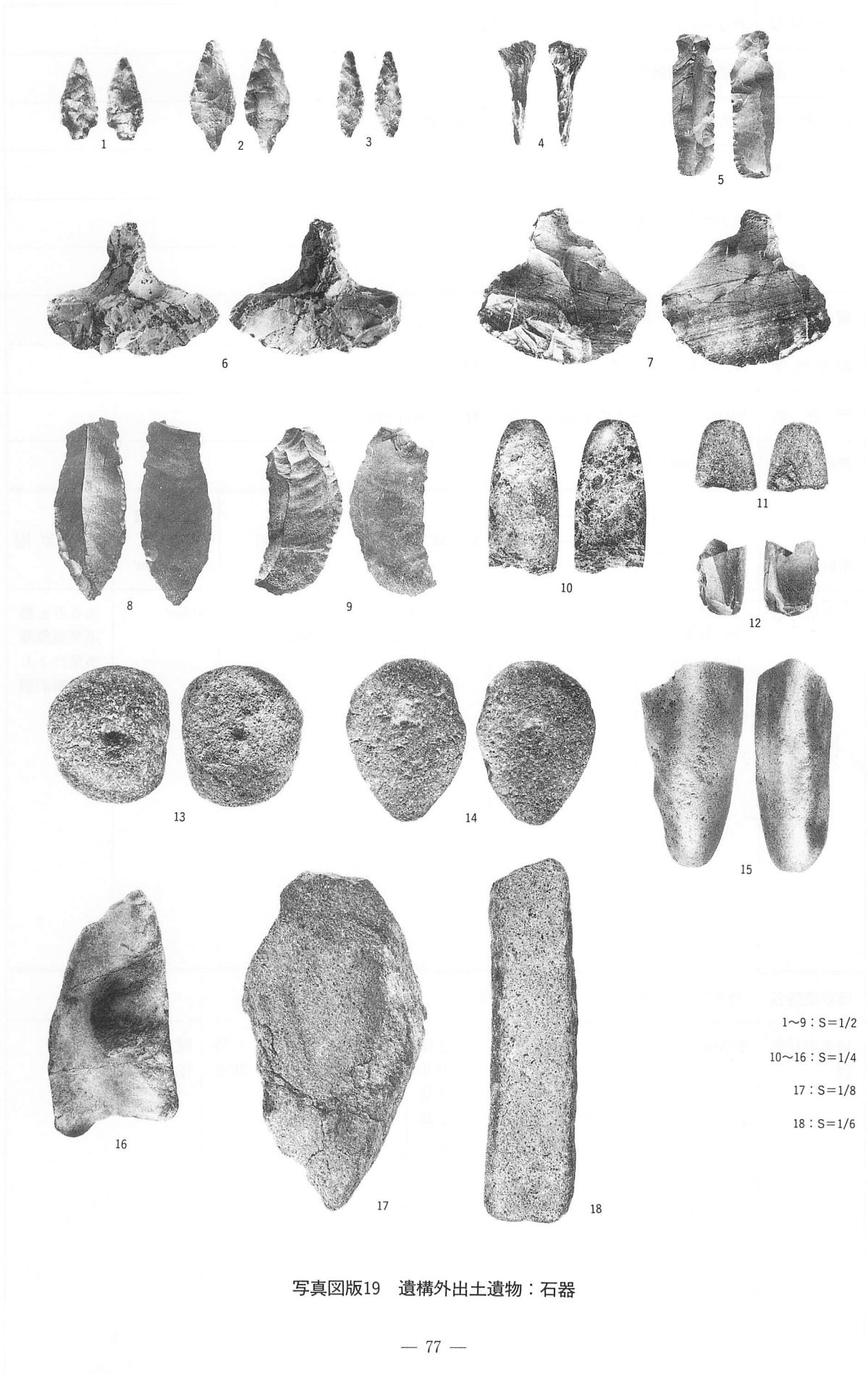
S=2/5

写真図版17 遺構外出土遺物：土器(5)



S=2/5

写真図版18 遺構外出土遺物：土器(6)



写真図版19 遺構外出土遺物：石器

報告書抄録

ふりがな	めないちにいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	目名市II遺跡発掘調査報告書							
副書名	ふるさと農道緊急整備事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第261集							
編著者名	阿部勝則 高橋與右衛門							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185 ☎ 019-638-9001							
発行年月日	西暦 1996年10月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 17"	東経 2'35"	調査期間 19950418～ 19950615	調査面積 m ² 918m ²	調査原因 ふるさと農 道緊急整備 事業にとも なう事前調 査
		市町村	遺跡番号					
めないちにいせき 目名市II遺跡	いわてけんにのへぐん 岩手県二戸郡 あしろちようあざめな 安代町字目名 市66-1ほか	03523		40°7'	141°	19950418～ 19950615	918m ²	ふるさと農 道緊急整備 事業にとも なう事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
目名市II遺跡	集落跡	縄文・弥生	竪穴状遺構 土坑 陥し穴 焼土遺構	2棟 34基 1基 2基	縄文土器 石器	5箱 20点	縄文時代前期～晩期 弥生時代	

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 山 影 源 吉
副 所 長 鷹 羽 康 造

〔管理課〕

管 理 課 長 澤 田 寛
主 事 横 山 文 彦
” 千 葉 勝 彦

〔調査課〕

調 査 課 長 小 田 野 哲 憲
課 長 補 佐 高 橋 與 右 衛 門
” 工 藤 利 幸
主 任 文 化 財 中 川 重 紀
專 門 調 査 員 ” 佐 々 木 清 文
” 高 橋 義 介
” 酒 井 宗 孝
” 菊 池 人 見
文 化 財 小 山 内 透
專 門 調 査 員 ” 高 橋 佐 知 子
” 松 本 建 速
” 菊 地 榮 壽
” 宮 本 節 子
” 下 田 隆 衛
” 濱 田 宏
” 金 子 昭 彦
” 晴 山 雅 光
” 木 戸 口 俊 子
” 阿 部 勝 則

文 化 財 專 門 調 査 員

羽 柴 直 人
” 星 雅 之
” 高 木 晃
” 杉 沢 昭 太 郎
” 大 道 篤 史
” 溜 浩 二 郎
” 村 上 拓
” 中 村 直 美
期 限 付 川 向 聖 子
專 門 職 員 ” 佐 藤 良 和
” 篠 根 敬 志
” 柴 田 慈 敬
” 鈴 木 浩 二
” 鈴 木 聡
” 高 橋 実 央
” 千 葉 和 弘
” 平 沢 里 香
” 山 口 俊 規
” 山 下 浩 幸

〔資料課〕

資 料 課 長 菊 池 強 一
文 化 財 伊 藤 拓
專 門 調 査 員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第261集

目名市II遺跡発掘調査報告書

ふるさと農道緊急整備事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成8年10月25日

発行 平成8年10月30日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185

電話 (019) 638-9001・9002

FAX (019) 638-8563

印刷 山口北州印刷株式会社

盛岡市青山4丁目10-5

電話 (019) 641-0585